

令和7年度
特別史跡埼玉古墳群シンポジウム

埼玉古墳群と 古代国家成立前夜

—資料集—

令和7年
10月18日(土)

行田市教育文化センターみらい



開催趣旨

特別史跡埼玉古墳群は、埼玉県名発祥の地とされる行田市埼玉に立地し、国内屈指の古墳群として知られています。埼玉古墳群は昭和42年に「さきたま風土記の丘」として整備を開始して以来、半世紀にわたり発掘調査を進めており、その成果を基に史跡整備を継続的に実施しています。古墳群のもつ歴史的価値はもちろん、既往の調査・研究や整備事業が評価され、令和2年3月には国内63番目の特別史跡となりました。埼玉県では最初の特別史跡、古墳群では3例のうちの一つとなり、今なお埼玉古墳群は注目され続けています。

本年度の特別史跡埼玉古墳群シンポジウムでは、埋葬施設や副葬品の全貌が判明している2つの古墳のうち、古墳時代後期に築かれた將軍山古墳に注目します。また、將軍山古墳以降の埼玉古墳群と埼玉古墳群での古墳造営が終わって以降、律令国家成立に至る北武蔵地域の動向にクローズアップします。全国的な動向をみると古墳時代後期の終わりに前方後円墳の築造は終了し、地域の有力者の墓は円墳や方墳、あるいは上円下方墳に移り変わるとともに、仏教の本格的な導入により古代寺院の造営が行われるようになります。埼玉の地域では、埼玉古墳群に近在する旧盛徳寺跡きゅうじょうとくじあとが知られている唯一の古代寺院跡であり、創建時期や伽藍の規模等については今後の調査研究が期待されます。本シンポジウムの埼玉古墳群から古代寺院への展開という視点により、埼玉古墳群と地域の新たな歴史的理解につながれば幸いです。

最後になりましたが、本シンポジウムの開催にあたり、御協力いただきました多くの関係者の皆様、関係機関に厚く御礼申し上げます。

令和7(2025)年10月18日
埼玉県立さきたま史跡の博物館

令和7年度特別史跡埼玉古墳群シンポジウム 埼玉古墳群と古代国家成立前夜

次第

開催日時：令和7年10月18日（土）

会場：行田市教育文化センターみらい 文化ホール

13：00 開会の挨拶

13：05～13：55【基調講演】古墳時代後・終末期の埼玉古墳群と北武蔵
関 義則（元 埼玉県立歴史と民俗の博物館長）

13：55～14：25【講演①】後・終末期の埼玉古墳群周辺の古墳群と遺跡
篠田 泰輔（行田市郷土博物館）

14：25～14：55【講演②】馬具からみた將軍山古墳の歴史的意義
神 啓崇（福岡市経済観光文化局文化財活用部史跡整備活用課）

14：55～15：10 休憩

15：10～15：40【講演③】古墳時代終末期以降の選択的受容と地域社会
青笹 基史（埼玉県教育局教育総務部文化財・博物館課）

15：40～16：10【講演④】北武蔵の寺院造営動向
宇高 美友子（さきたま史跡の博物館）

16：15～16：55 シンポジウム 埼玉古墳群と古代国家成立前夜
コーディネータ 関 義則 パネリスト 講師4名

16：55 閉会の挨拶

資料集目次

開催趣旨	1 p
目次	2 p
【基調講演】古墳時代後・終末期の埼玉古墳群と北武蔵 関 義則	3 p
【講演①】後・終末期の埼玉古墳群周辺の古墳群と遺跡 篠田 泰輔	17 p
【講演②】馬具からみた將軍山古墳の歴史的意義 神 啓崇	27 p
【講演③】古墳時代終末期以降の選択的受容と地域社会 青笹 基史	37 p
【講演④】北武蔵の寺院造営動向 宇高 美友子	47 p
【紙上報告】旧盛徳寺跡出土の瓦について 宮原 正樹（さきたま史跡の博物館）	59 p
関連資料集	70 p

資料集の編集は片山健太郎（さきたま史跡の博物館）が担当した。

表紙画像 左上 棘葉形杏葉 右下 三葉文環頭（いずれも將軍山古墳出土）Image：TNM Image Archives

裏表紙画像 旧盛徳寺跡上空からみた埼玉古墳群（さきたま史跡の博物館蔵）

古墳時代後・終末期の埼玉古墳群と北武蔵

関 義則

(元 埼玉県立歴史と民俗の博物館長)

はじめに

古墳時代後期には総じて前方後円墳の規模が縮小し築造数も減少傾向を示すが、関東地方では逆に前方後円墳の数が増加し墳丘長 100 m を超えるような巨大な前方後円墳が多数造営されており、そこには日本列島の他の地域とは異なった古墳造営の原理が存在したことが推測されている（白石 1992）。また、前方後円墳造営停止後の関東地方では首長墓として大型の円墳や方墳が造営され、7 世紀中頃にはいくつかの地域で上円下方墳も築かれる。

埼玉古墳群は、5世紀後半以降、終末期に至るまで首長墓と目される大型の前方後円墳・円墳・方墳が連綿と造営されており、北武蔵地域の古墳動向や古墳造営の特質を時間軸に沿って探る上で重要な位置を占めている。

ここでは古墳時代後期後半における前方後円墳の多出する現象や前方後円墳の一律的な造営停止、さらに終末期古墳と官衙・寺院の様相といった諸問題に焦点を当てつつ埼玉古墳群を中心に6世紀後半から7世紀前半の北武蔵地域の動向を概観することとしたい。

なお、埼玉古墳群は今述べたように稲荷山古墳の造営に始まる5世紀後半から連続性をもって造営されていることから、ここで対象とする時期の前段階である埼玉古墳群の成立から述べることにする。

I 埼玉古墳群の出現と北武蔵地域

利根川の流路変遷と埼玉古墳群

古墳の分布や古墳群の消長、あるいは経済圏や政治圏といった領域にかかわる問題を考察しようとする場合、自然地形とりわけ水系単位で議論されることが多い。水上交通による物流や人々の往来など河川が地域圏の形成に重要な意味をもっていたからであろう。一般に河川は時期によって蛇行することはあっても、大まかにみれば地形に左右されて基本的な流路を変えることはあまりない。しかし、関東平野を流れる河川、とりわけ北武蔵地域に関わりの深い利根川や荒川は関東造盆地運動と呼ぶ構造的な沈降運動や、火山の噴出物等による堆積物などの複合的な作用に

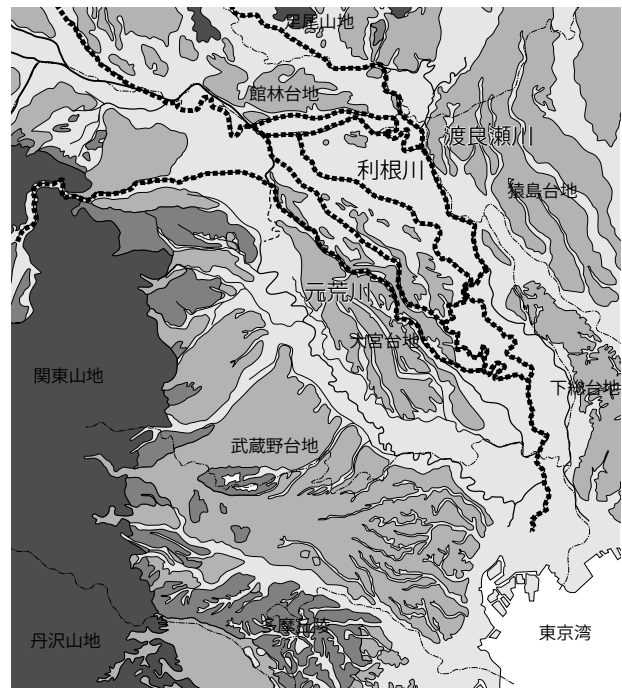


図1 古墳時代後期の利根川の流路(柿沼 2025 編図)

よって、時代とともに流路を大きく変えており、古墳時代の流路は現在の流路とは大きく異なっているため注意が必要である。従って、この地域で水系に視点を置いて検討する場合、当時の河川流路を復原した上で検討を進めなければならない。

近年は、利根川や荒川の流路変遷について検討が進み、かなり具体的に推定されるようになった。無論、治水対策のほとんど無い当時では、平野部の河川は分岐や合流を繰り返し、同一水系でも複数の流路があったはずであるが、主要な流路はおおむね次のようである。

それによれば、縄文時代の後期初め頃までは、群馬県域の河川を集めた利根川はそのまま埼玉県域を真っすぐ南下し、大宮台地西縁に沿って荒川低地を流下し東京湾に注がれており、荒川は行田市付近で利根川に流れ込む支流となっていた。その後、荒川が運びこむ堆積物によって利根川は次第に東へと押しやられ、弥生時代中期頃までには大宮台地を縦断する現在の元荒川や綾瀬川筋を流れるようになっていた。

古墳時代後期にあたる6世紀中頃に群馬県の榛名山二ッ岳が噴火し、膨大な噴出物が河川を埋め尽くし、利根川は大宮一館林台地を横断して加須低地から中川低地へと主要な流れを変えた。また、利根川は幾筋かに分流し現在の利根川と並行する谷田川も利根川的主要河道のひとつで、栃木県方面から流下する渡良瀬川と合流して南下し、春日部市付近で古隅田川を経由して星川筋を合わせ、さいたま市岩槻区に接して中川低地から東京低地を経て東京湾に注いでいた。

一方、利根川の支流であった荒川は古墳時代後期には利根川と分離してそのまま元荒川筋を流れた。縄文時代の利根川（原利根川）流路は、名残河川となり、大宮台地の西縁を流れる現在の鴨川～毛長川にその痕跡を留めている。古墳時代は、利根川と荒川は合流や分岐を繰り返しながら、群馬県域や栃木県域の河川を糾合して大宮台地の東側を流下し、埼玉県域の西南部地域の小河川を集めた入間川水系はそれらとは独立した水系となっていた（柿沼 2025）。

利根川の河口であった東京湾側から見ると、古墳時代後期の利根川は北関東の群馬県域や栃木県域に通じる大動脈であった。埼玉古墳群が形成された地点は、関東平野の中心付近に位置し、利根川が分流しながら上野地域から東京湾に注ぐ中間地点にあたり、下野方面の渡良瀬川や思川にもアクセス可能な水上交通網の要衝であった。

やや後の時代に『万葉集』に「さきたまの津」が詠まれ、さきたまの地域に港湾施設が存在したことは、古代の利根川が関東平野の南北を縦断する主要な交通路であったことを窺わせるものである。実際に古墳時代後期には利根川の流路を通じて、石材や埴輪の流通など東京湾岸地域との地域間交流が明らかにされている（高橋・本間 1994 城倉 2011）。

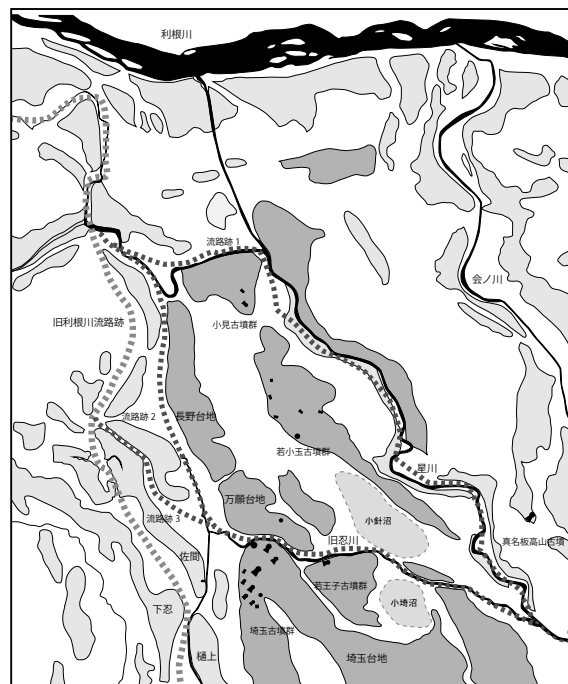


図2 利根川流路と埼玉古墳群（関 2012）

新たな古墳秩序の形成

古墳時代中期末（5世紀後半～末頃）になると、倭国内において大王が専制化し、加えて内政を重視する政策転換が行われ、国内体制も大きな変革が進められた（熊谷 2001）。関東地方では、この時期に群馬・栃木・埼玉などの地域でそれまで古墳が造られなかった地域に 100 m を超える前方後円墳が造営された。埼玉古墳群はそうした古墳群のひとつであり、埼玉県北部の行田市に所在し、およそ東西 500m、南北 800m の範囲に、4 基の 100m を超える古墳を含む 8 基の前方後円墳、2 基の大型円墳、1 基の方墳が周堀を接するようにして密集して営まれている（関連資料集資料 2）。

この付近は、現在は一面平坦な景観であるが、古墳時代は台地と低地が明確な起伏に富んだ地形であり、古墳は台地の縁辺に立地している。

埼玉古墳群は、墳丘長 120 m の前方後円墳である埼玉稲荷山古墳が仮称埼玉台地の西端に造営されたことをもって開始された。古墳時代前期には比企地域や児玉地域に前方後円墳が造営されたが、中期の一時的な断絶を経て、さきたま地域に 5 世紀後半に突如として巨大な前方後円墳が出現した。稲荷山古墳出現前後には、妻沼低地でとやま古墳（69 m）や横塚山古墳（38m）などの前方後円墳、あるいは前方部の短い帆立形の前方後円墳である鎧塚古墳（48 m）、女塚古墳（48 m）が造営されるが、次代に継続せず単発的である（増田 1980）。

埼玉古墳群では、稲荷山古墳以降、7 世紀中頃の戸場口山古墳まで、およそ一世紀半にわたり、11 基もの大型古墳が連綿と造営された。古墳は一貫した造墓規範のもと相互に関連した配置をもって造営されているが（関 2012）、その内実は単純ではなく、6 世紀前半と後半代では大きな違いが認められる（関 2013）。

狭い集水域から開放的な地点への首長墓の移動

埼玉古墳群の立地環境をみると、古墳時代前期に大型前方後円墳が出現したのは比企地域や児玉地域といった集水域の狭く三方が囲まれた閉鎖的な環境下であるのと対照的に、集水域の広い開けた空間である。これは、4 世紀後半に閉鎖的な奈良盆地の丘陵裾部から大阪平野南部の交通の要衝地へと大王墓の造墓地が移動した現象と同様の現象が 1 世紀ほど後の北武蔵地域で生じたようにみえる。ただし、比企地域や児玉地域の大型前方後円墳の衰退時期と埼玉古墳群の成立時期とは 1 世紀近い時間的な隔たりがあり首長墓の系譜は断絶時期があるため直接的な関係性は定かではなく、埼玉古墳群を形成した豪族の出自もまた不明である。ここでは、埼玉古墳群の出現は、造墓地の環境が大きく変化していることを指摘しておくにとどめたい。

系譜関係は措くとして、集水域の広い開けた地域への首長墓の移動は、この時期に地方経営に当たって交通や物流が重視されたことを示すものであろう。

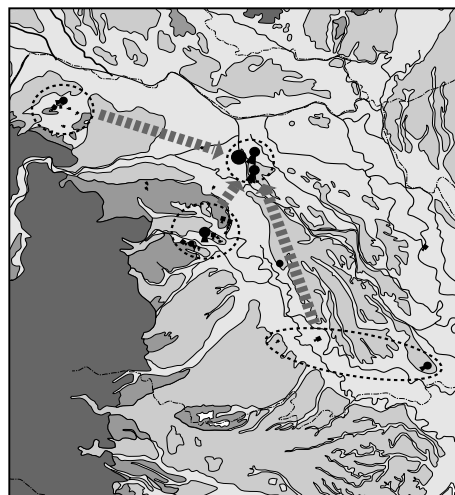


図 3 北武蔵地域の前期古墳と埼玉古墳群の立地環境

卓越する巨大3古墳—6世紀前半の埼玉古墳群—

稲荷山古墳に続いて丸墓山古墳（径 105m）、二子山古墳（132m）が造営された。二子山古墳は北武蔵地域最大規模の前方後円墳であり、丸墓山古墳も日本列島最大級の円墳である。

6世紀前半代の旧武蔵地域の墳丘長 50 mの超える古墳の分布をみると、利根川の流路からみて当時は毛野地域であったと考えられる羽生市の永明寺古墳（78 m）や毛野地域に近くやや独立した様相を示す児玉地域の生野山銚子塚古墳（58m）を別とすれば（坂本 2024）、いずれも入間川水系の朝霞市の一夜塚（径 50 m）、柊塚古墳（72 m）、東松山市のおくま山古墳（62 m）が存在するていどである。このように埼玉古墳群で相次いで築造された3基の古墳は北武蔵地域において他と隔絶した規模を有していた。

Ⅱ 後期後半の埼玉古墳群と北武蔵地域

重層化・分散化する古墳

稲荷山古墳と同じ頃に出現した上野の保渡田古墳群は、二子山古墳（108 m）・八幡塚古墳（102 m）・薬師塚古墳（105 m）の3基の大型古墳をもって造営が停止している。下野の琵琶塚古墳（125 m）・摩利支天塚古墳（117 m）も2基の造営で断絶している。このような5世紀後半に出現した各地の大型前方後円墳が、6世紀の前半代、おそらく継体朝を境として途絶する現象は、各々の古墳群の個別の事情とは別に、この時期における畿内中枢の動向や地方政策が影響を与えている可能性がある。

しかしながら、埼玉古墳群では数基の大型古墳の出現の後に前方後円墳の規模は縮小するものの造墓地は移動することなく、継続的に前方後円墳を造営しつづけた。むしろ重要な点は埼玉古墳群以外の地に埼玉古墳群と同等規模の古墳が造営されるようになることであり、6世紀中頃は大きな画期と認められる（関連資料集資料3）。

埼玉古墳群の北方約 2 kmに位置する若小玉古墳群は、埼玉台地に隣接する独立支台上に形成された古墳群であり、複数の全長 50 mを超える大型の前方後円墳と円墳・方墳で構成されている。既に削平された古墳も多く、詳細な年代を押さえることは難しいが、この古墳群は6世紀後半でも中頃と推定されている全長 58 mの三方塚古墳の造営で始まり、その後、全長 73 mの愛宕山古墳、ほぼ同規模の荒神山古墳、前方後円墳と想定される笹塚・稲荷塚古墳と継続的に墳丘長 50 mを超える前方後円墳が造営された後に7世紀の初頭には大型円墳である径 80 mの八幡山古墳、続いて一辺 27 mの方墳の地蔵塚古墳が造営されたものと推定され、ある時期から埼玉古墳群と平行して継続的に大型墳が造営された古墳群である（太田 2007）。

そのほか、行田市周辺には古墳時代後期になって真名板高山古墳、若王子古墳、小見真観寺古墳など埼玉古墳群以外にも 100 m級の大型前方後円墳が集中して造営されている（杉崎 1992）。

埼玉古墳群の北方約 4 kmの地点に位置する小見古墳群は、小見真観寺古墳（102 m）と虚空蔵山古墳（60m）の2基の前方後円墳を中心として数基の小円墳が伴う古墳群である。築造時期は、埴輪をもつ虚空蔵山古墳が小見真観寺古墳に先行し、2つの主体部が早くから開口し豊富な遺物が出土している小見真観寺古墳は埼玉古墳群の中の山古墳と同じく 600 年前後と推定される。

埼玉古墳群の東方約 4 km の地点に所在する真名板高山古墳も全長 100 m を超える前方後円墳であり TK43 型式期に相当する (塚田他 1997)。

熊谷市のとうかん山古墳(74m)は詳細不明ながら6世紀後半とみられており、この地域の前方後円墳としては最大規模である。なお、近隣の甲山古墳は直径90mの円墳であり、同郡域では最大規模の古墳である。

真名板高山古墳や小見真観寺古墳、あるいは天王山塚古墳やとうかん山古墳のように、この時期に新たに出現した大型前方後円墳は、単独もしくは少数の円墳を伴うだけの古墳群構成をとるものが大半であり、また前方後円墳停止の後の大型円墳や方墳などの首長墓も造営することがなく、首長墓の系譜が追えないものが多い。

このように6世紀後半になると、埼玉古墳群に匹敵あるいは凌駕する規模の古墳が北武蔵地域に数多く造営されるようになり埼玉古墳群の隔絶性は大きく後退した。

関東地方において6世紀後半代に前方後円墳が多く造営される現象について、この地域が倭政権にとって経済的・軍事的に重要な地域であり、6世紀中頃から屯倉や部などの設置が進められ、伴造など現地管理者として在地豪族が任命されたといった倭政権による地方政策を背景に想定する見解がある(白石1992)。

一方で、群集墳の階層分化も進み、6世紀中頃以降になると群集墳内に墳丘長50 mに満たない中小前方後円墳も出現するようになる。

ところで北武蔵地域における古墳時代中期後半以降の前方後円墳のうち全長 60 m の超える大型の前方後円墳について、その分布を旧郡単位でみると、各郡に 1 基もしくは存在しないが、埼玉郡内には 15 基も存在するという著しい偏在性が認められる。しかも、埼玉郡内においても特に埼玉古墳群を中心として半径 2.5 km の範囲に密集して造営されている。このような極度に一地点に有力古墳が密集する状況は、内水面交通の要衝であるさきたま地域が、極めて重要な地域であって古墳時代後期の北武蔵地域の政治・経済の中核でありつづけたことを示している。

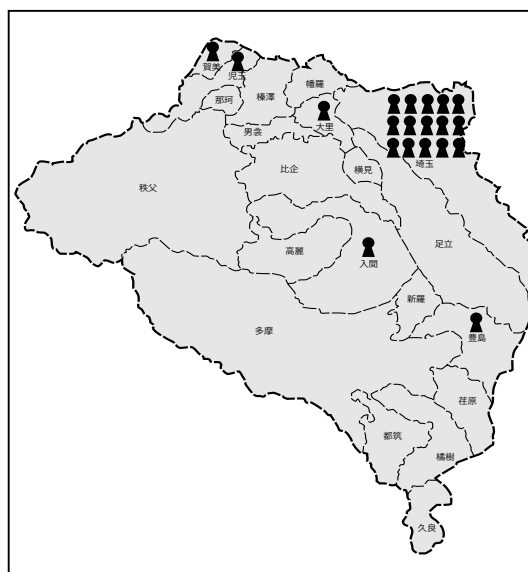


図4 武蔵国内の郡単位の大型古墳の数
(関 2025)

将軍山古墳の造営

このような前方後円墳の規模縮小・分散化傾向を示す時期に埼玉古墳群内で将軍山古墳が造営された。将軍山古墳は、稲荷山古墳の東隣に位置し稲荷山古墳の築造からおよそ一世紀後の6世紀後半に造営された墳丘長91mの前方後円墳である。方形二重の周堀を備え、墳丘と中堤の西側に各々造出しをもつ点は、埼玉古墳群の伝統的な形制を忠実に則っている。

埼玉古墳群の大型古墳は、立地環境や埴輪・須恵器などから判断すると、稲荷山古墳から始まり、丸墓山古墳、二子山古墳、瓦塚古墳、奥の山古墳、将軍山古墳、愛宕山古墳、鉄砲山古墳、中の山古墳、浅間塚古墳、戸場口山古墳の順で造営されており、将軍山古墳の造営は奥の山古墳に後続し、鉄砲山古墳に先行する。将軍山古墳の造営時期については石室から出土した無蓋高坏はTK43型式であるものの造出しから出土した甕は一段階遡るTK10型式新段階（MT85型式）とされており（酒井2024）、造出し出土須恵器の時期が本来の築造時期であろう。将軍山古墳と前後する奥の山古墳はTK10型式新段階、鉄砲山古墳はTK43型式であることから立地環境からみた築造順とも矛盾しない。

将軍山古墳の埋葬主体部は、前方部に木棺直葬、後円部に右片袖の横穴式石室が確認されている。横穴式石室の側壁には、東京湾東岸の富津付近の海岸で採取される磯石が使用されていた。この石材を使用した古墳は、板橋区や葛飾区、市川市など東京湾東沿岸から湾奥部にかけて分布しており、将軍山古墳の造営に当たり東京湾岸で石室構築に携わっていた工人集団が動員されたものと考えられる。適当な石材が存在しないこの地域の古墳は、群馬県榛名山二ツ岳

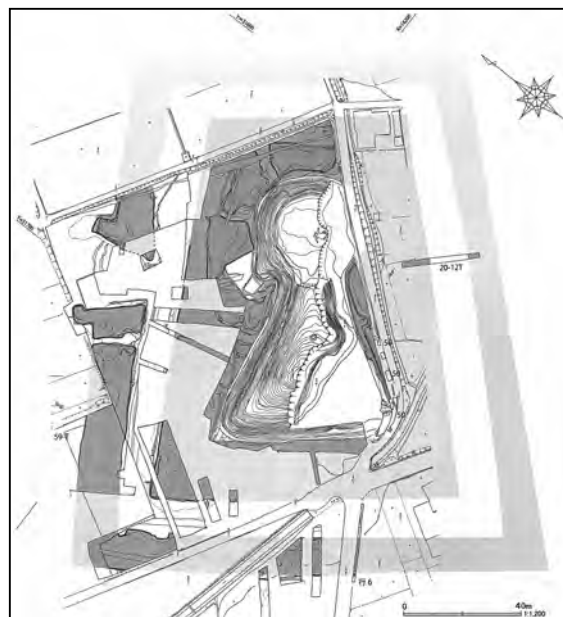


図5 埼玉将軍山古墳

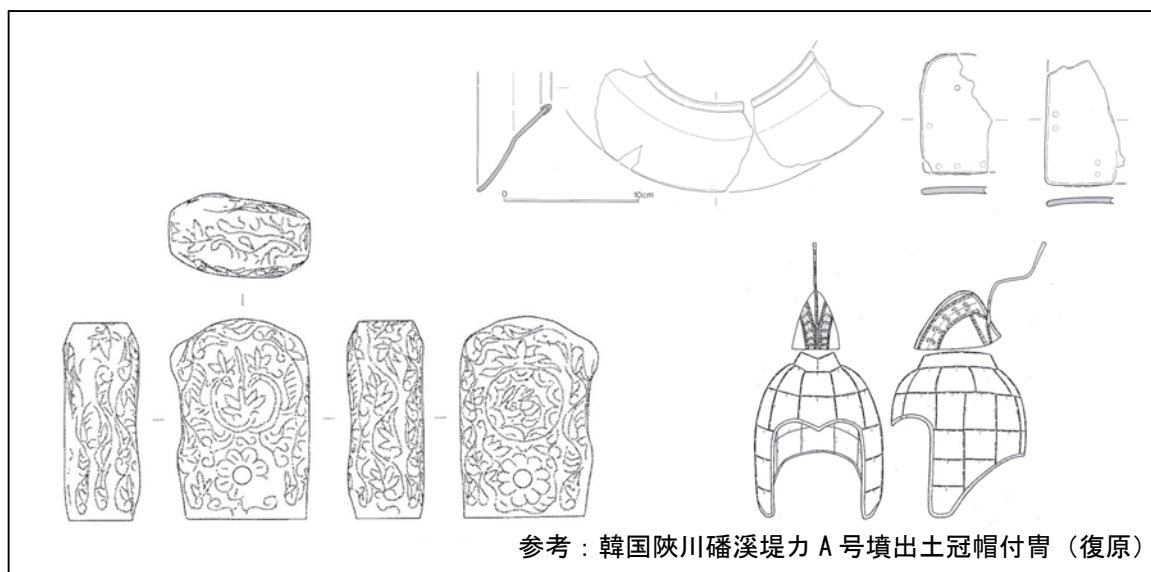


図6 将軍山古墳出土品（象嵌円頭大刀と冠帽付冑）

の古墳時代の2回目の噴火（伊香保噴火）以後は、近場で入手できる石材として噴出物の角閃石安山岩の転石を石室石材として盛んに利用している。角閃石安山岩を石室石材として使用した古墳は、群馬県高崎市の綿貫観音山古墳や埼玉古墳群内では鉄砲山古墳などTK43型式期からなので、角閃石安山岩の転石を使用していない將軍山古墳の造営はそれよりも築造時期が遡る可能性が大きく、石室石材の点でも須恵器の年代と矛盾しない。

さて、埼玉古墳群の存続時間と大型古墳の数をみれば、これを一系列の首長墓とみなすことは困難であり、複数首長墓系列の古墳群という概念で理解されている（広瀬 2009）。具体的な系列については、墳丘規模を主な基準として大型と中型の前方後円墳群に分け將軍山古墳について首長墓を構成する4基の大型前方後円墳群のひとつととらえた研究を嚆矢として（増田 1987・1999）、古墳の主軸方位からA・B・Cの3系列を設定し、將軍山古墳をC系列としてA系列として稲荷山古墳・二子山古墳・鉄砲山古墳の首長墓系列とは異なる首長墓系列とする案（高橋 2005）や、出土した円筒埴輪の分析から主系列墓と副系列墓を想定し將軍山古墳を副系列墓に位置づける案（城倉 2011）など多様な見解が提示されている。このように將軍山古墳は、規模も100mを超え主たる首長墓系列として明確な稲荷山古墳・二子山古墳・鉄砲山古墳の首長墓系列に含めるか否か、含めない場合、別の首長墓系列なのか一段階下位の副次的系列なのか、非常に評価の分かれる位置にある古墳である。なお、埼玉古墳群が複数の首長墓系列ではあることは認めるとしても、方形二重堀や墳丘・中堤の造出しの存在など排他的に共通し、各古墳の築造に関しては主・副系列とは関係無く同じ基準を遵守して造営されていることに大きな特徴が認められる（関 2012）。

後円部の横穴式石室は早い段階から一部露出しており、明治年間に石室の石材を抜き取ることが行われた際に多くの遺物が出土した。遺物の多くは博物館施設等に収納されているものの、出土当時の記録にはあるが現在では所在不明となっている遺物も少なからず存在する。將軍山古墳は、かつては將軍塚古墳とも呼ばれていたらしく「埼玉將軍塚古墳出土」の記録をもつ遺物もいくつか存在している（山田ほか 2017）。

將軍山古墳からは、当時の記録によれば、装身具、武器（環頭大刀、銀装大刀、倭装大刀、鉄鉾、鉄鏃）、武具（挂甲2領分、鉄製横矧板鋌留式衝角付冑1、冠帽付鉄製小型方形板革綴冑1）、馬具（鉄地金銅製十文字心葉形鏡板付轡と鉄製環状鏡板付轡をセットとする2組）、工具（鉄斧）、容器類（銅甕、石製盤、須恵器高坏）の出土が知られる。上記の他に伝埼玉將軍塚古墳出土品と伝えるものに、象嵌円頭大刀柄頭、鉄製鏑、水晶製切子玉、陶質土器がある。装身具を中心に現在行方不明の遺物も多く、また鉄片になったため記録に残らない遺物も多かったと考えられる。

出土遺物のうち蛇行状鉄器は、高句麗壁画古墳に装着例が認められるように、馬冑とともに重装騎兵の装備であり、馬の鞍に装着した旗竿「寄生」である。2セットあるので2組の馬具と組み合わせる可能性がある。埼玉將軍山古墳には2個体の馬冑が存在した可能性が指摘されており（李 2016）。正式な発掘調査ではないに関わらず、蛇行状鉄器を含めて少なくとも馬具と武具が各々2組存在したことが明らかとなっている。

朝鮮半島系遺物が豊富にみとめられる將軍山古墳の副葬品は、これまでに多くの研究蓄積がある（内山 2009、高田 2012、太田 2013）。例えば、鉄地金銅製十文字心葉形鏡板付轡や大型の銅鈴は類例から新羅系の遺物とみなされており、武器も新羅系や百済・大伽耶系の製品が多いとされる（高田 2012）。また、伝將軍山古墳出土品の中に、象嵌が施された鉄製の円頭大刀柄頭がある。一方の面に双鳳文を他方に月兔を中心に据え周囲に唐草文をあしらったもので円頭大刀柄頭の象嵌としては類例がない（山田ほか 2017）。月兔図は、7 世紀前半に製作された天寿国繡帳に意匠が認められており、これまで日本最古とされていたが、伝將軍山古墳出土円頭大刀柄頭の象嵌はそれらよりも遡り日本列島内最古の事例である。こうした意匠も 6 世紀の朝鮮半島系遺物とともに持ち込まれたものかもしれない。

このように、將軍山古墳の出土品は朝鮮半島製の舶載品もしくはその模倣品や渡来系の意匠をもつ遺物群であり、しかも倭国内でも類例が無いか極めて少ない遺物が数多く伴っている。朝鮮半島製の品々が豊富に副葬される傾向は、古墳時代後期後半の前方後円墳に特徴的に認められる現象であり、「舶載品ラッシュ」という表現も用いられている（内山 2003）。

朝鮮半島製の舶載品とりわけ新羅と関わりの深い製品が数多く副葬されるようになる現象の背景については、562 年に伽耶地域を併呑した新羅から倭国への遣使が行われたとする『日本書紀』の記載を反映しているとする意見もあり（山尾 1989）、6 世紀後半に新羅と倭の対外交渉の活発化を反映していると考えられている（朴 2007、土生田 2010）。

この古墳の被葬者については、造出し付近出土須恵器と石室内出土須恵器に型式差が認められることから追葬された可能性が大きく、また武具・馬具が各々 2 組あることから少なくとも 2 人以上の埋葬が想定される。ただし、2 組の武具・馬具については、冠帽付冑は装飾付大刀などとともに身分表徴の強い品であることから被葬者が外交などの場において装備を使い分けたもので、朝鮮半島との往来に伴ってもたらされたものであるという意見もある（内山 2003、内山 2011）。

將軍山古墳から出土した朝鮮半島系の遺物群をそのようにとらえてよいとすれば、6 世紀の東アジア情勢に東国の豪族層が少なからず関与していたことを示す証となるものであろう。

前方後円墳の造営停止

6 世紀後半から 7 世紀初頭頃にかけて前方後円墳がほぼ一斉に造営を停止する。その要因として、政治的には隋王朝の登場と激動する東アジア情勢に対応するため、前方後円墳を媒介とした古い族制的な政治秩序を廃止し、新しい政治秩序を組み立てるためであった（白石 2005a）。一方で、前方後円墳の消滅とともに埴輪も消滅しており、伝来

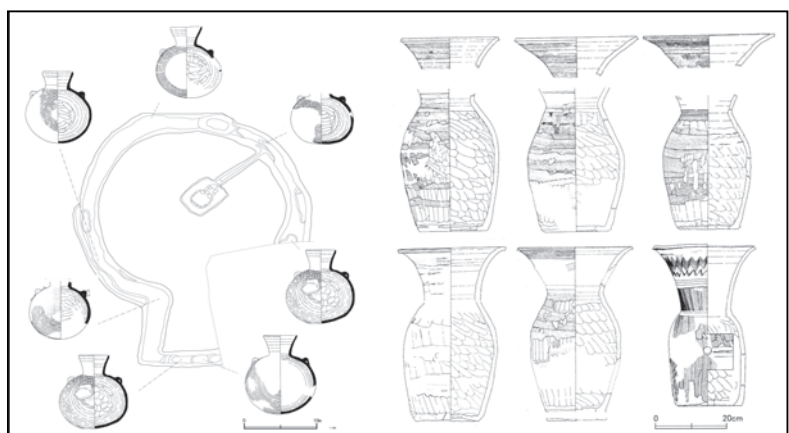


図 7 須恵器を埴輪の代用とした事例
熊谷市大境南 1 号墳（左）と中の山古墳出土の須恵質埴輪壺（右）

した仏教の影響を受けて旧来の伝統的な価値観であった祖霊祭祀の在り方もまた変化したことが窺える。埴輪は中小円墳にも普遍的に樹立されていたものの、前方後円墳の造営停止とともに消滅していることは、埴輪も基本的には伝統的な観念に基づく古墳祭祀の一翼を担っていたことを示している。

埼玉古墳群においても、西暦 600 年前後と推定される中の山古墳をもって前方後円墳の造営は終了するが、中の山古墳には埴輪の代替品として寄居町の末野窯で焼成された須恵質の埴輪壺が樹立していた。熊谷市大境南 1 号墳では、須恵器提瓶を墳丘裾に巡らし、栃木県壬生町の車塚古墳（径 84 m）では須恵器大甕が配置されていたように、最終末の前方後円墳に埴輪の代替品として須恵器や須恵質の製品が樹立されている事例がいくつか認められる。このことは、埴輪の生産停止が在地首長の自律的な意思によるものでなく外部の要請に基づくものであったことを良く示している。

前方後円墳の廃止とともに大王墓を含め首長墓は方墳に移行するが、横穴式石室を構築し石棺・木棺等を納める葬法は前方後円墳の造営停止以降も変わらず継続しており、葬送観念や他界観がこの時期に劇的に変わったわけではないらしい。撤廃されたのは前方後円墳という墳形と首長霊に対する祭儀やその観念であり、またそれと密接に結びついた埴輪祭祀であって、葬送観念や他界観の変化にはさらに半世紀ほどの時間を必要とした。

Ⅲ 終末期の埼玉古墳群と北武蔵地域

前方後円墳の築造停止後の動向

前方後円墳の造営停止後の 7 世紀前半代には首長墓は数を減らしつつ円墳や方墳に転換した。関東地方では首長墓はただちに方墳に移行した地域と、円墳を経て方墳に移行した地域とがあり（白石 2005a）、埼玉古墳群が所在した地域では、7 世紀前半の八幡山古墳（径 80 m）、白山神社古墳（径 50 m）、浅間塚古墳（径 40 m）、を経て 7 世紀中頃の戸場口山古墳（辺 42 m）が築造されたように、大型円墳一世代程度を経て方墳に移行する。八幡山古墳は埼玉古墳群に隣接する若小玉古墳群に位置し、浅間塚古墳は埼玉古墳群中の古墳であり、前方後円墳の造営停止後の首長墓が減少した 7 世紀前半代においても、依然として埼玉古墳群周辺地域が北武蔵地域の中核であり続けた。

八角墳の出現と埼玉古墳群の解体

用明天皇陵とされる春日向山古墳から方墳へ移行した大王墓は、舒明天皇（641 年崩御）の陵墓とされる段ノ塚古墳から八角墳に移行する。八角墳の出現は、大王の地位の確立と密接に関連するもので、大王が諸豪族層を超越した存在として独自の墳墓形態を採用したと評価されている（白石 2005b）。墳形に関しては、段ノ塚古墳や御廟野古墳（天智天皇陵）など早い段階の八角墳は下段が方形で上段が八角形の構造で、方墳の上段に八角が乗っている墳形をしており、野口王墓（天武・持統合葬陵）など後の段階に至って上下とも八角の墳形へと移り変わることが明らかにされている（白石 2005 b）。

八角墳の出現とほぼ同時期に数は多くないものの各地に上円下方墳が出現する。上円下方墳

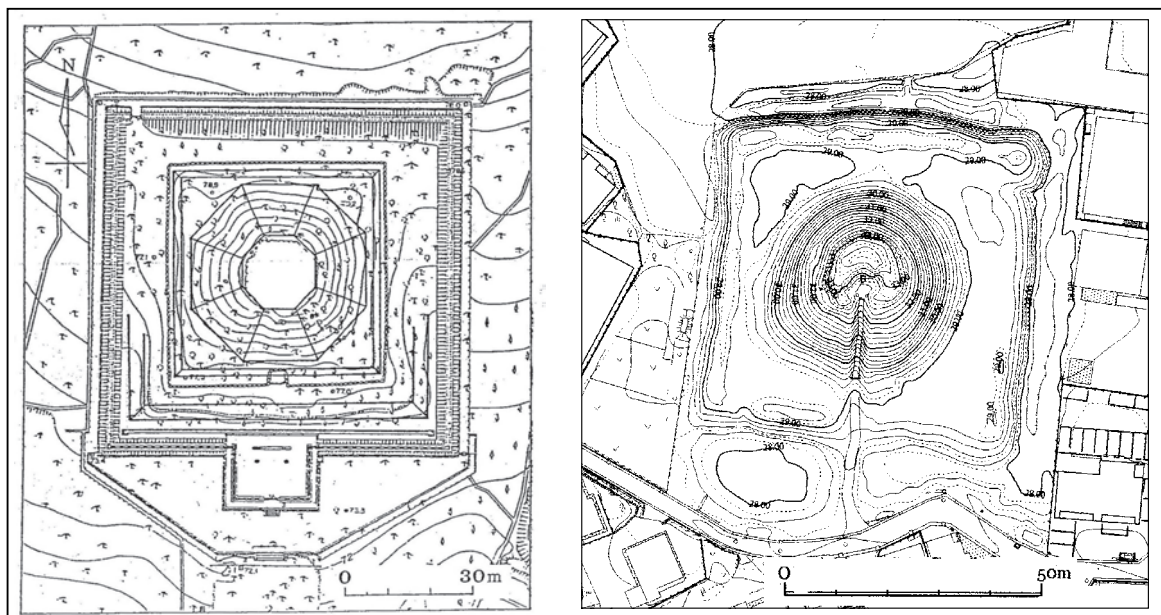


図8 御廟山古墳（天智天皇陵）と川越山王塚古墳（藤田 2020）

は下段が方形で上段が円形の構造で、時期的にも構造的にも八角墳との強い関連性がうかがえる。八角墳以外の墳形もあり、総称して多角形墳とも呼ばれるが（寺社下 1997）、いずれにしても各地の首長層が八角墳の出現に触発されて、この時期に新たな墳形を創出・採用したものと考えられる。

7 世紀中頃から後半にかけて、上円下方墳として川越市山王塚古墳や府中市熊野神社古墳（辺 32m）が造営される。熊谷市の宮塚古墳も上円下方墳とされるが未調査のため不確定である。

山王塚古墳は入間川水系沿いで利根川水系とも現在の荒川とも別の水系沿いにあり、府中熊野神社古墳は多摩川水系沿いである。利根川水系とは異なる水系に 7 世紀の中頃前後に有力な古墳が出現した事実は、少なくとも北武蔵地域において利根川水系に集中していた権力構造がこの時期には解体・分散していた状況を示す。

終末期古墳の性格

日本列島最大規模の上円下方墳である川越市南大塚の山王塚古墳は、山王塚西古墳の周堀を壊して構築されている（太田 2020）。山王塚西古墳は径 43 m ほどの円墳で 7 世紀第 1 四半期の年代が想定され、この時期としては比較的規模の大きな古墳であり、牛塚古墳に続く首長墓かもしれない。山王塚古墳は、時期の離れた古墳ではなく直前の時期に造営された古墳を破壊して縄張りを決めているのである。このことは、上円下方墳が単に新しい墳形の採用に留まらず、祖霊祭祀や在地の首長系譜の連続性といった従来の関係性を断ち切り、新しい観念に基づく古墳造営であることを示唆している。古墳の築造に寺院建築の技法である版築工法が援用されるのは若小玉八幡山古墳など 7 世紀前半代の古墳が認められるが、山王塚古墳でも版築工法が用いられ石室下には掘り込み地業と呼ぶ基礎工事が行われるなど土木技術面においても革新的な様相を示している（広瀬 2019）。

埼玉古墳群中の大型古墳である戸場口山古墳は一辺 40 m の方墳で二重周堀であることが調査

によって確かめられている。戸場口山古墳は周堀の調査が行われ、隣接する中の山古墳の周堀を切り込んで構築されていることが判明している。中の山古墳は600年前後に造営された最終末の前方後円墳であり、ここでもそれほど隔たらない時期に造営された古墳が容易く破壊されている。埼玉古墳群の各古墳は狭い台地端でも、相互に干渉しないように配慮されながら造営されてきたが、戸場口山古墳の段階になって、突如としてそれまでの関係性を断ち切るように造営されているのである。

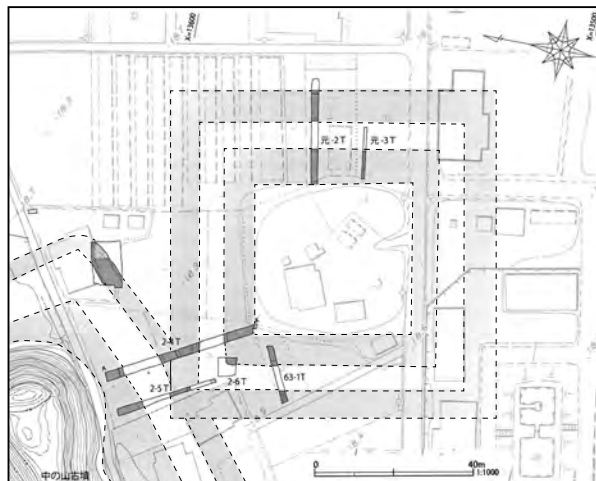


図9 中の山古墳と戸場口山古墳

る。この古墳の平面形は方形であることが周堀の形によって確認されて方墳とされているが、墳丘盛土は早い段階で失われており、正確な墳形は不明である。山王塚古墳の事例から類推すれば戸場口山古墳は上円下方墳であった可能性も考えられる。

上円下方墳は、単に墳丘の形状が異なるだけに留まらず、それまでの系譜関係や伝統などの連続性が遮断されている。八角の採用は、仏教思想との関連性が早くから唱えられてきており、また古代中国思想の天円地方の観念を体現したものと推測されている（広瀬 2019）。その正否はともかくとして、新しい墳形の創出や採用には政治的・思想的な背景が伴うことは想像に難くない。上円下方墳をはじめとする多角形墳の出現に関しても、単に新たな墳形の模倣や創出に留まらず新たな観念に基づいて従来の伝統と異なる墳形を採用しようとする意識のもとに造営された古墳であろう。

古墳時代後期・終末期古墳と寺院

6世紀前半には仏教が伝来し、6世紀末には蘇我氏の氏寺である飛鳥寺が建立された。『日本書紀』によれば西暦588年に百済から僧とともに寺工・鑪盤博士・瓦博士・画工が派遣されたとあり、仏教伝来は宗教的な思想とともに寺院建築に要する様々な新技術や新しい意匠を伴うものであり、そうした技術や意匠のいくつかは他の分野に援用された。先に述べた月兔図の意匠や群馬県高崎市の八幡観音塚古墳出土の仏像の後輪と似た意匠の杏葉（障泥の吊金具とする意見もある）、行田市の小見真観寺古墳出土の銅鏡など寺院建築に先行して仏教と関わりのある遺物が北武蔵地域にももたらされている。また、山王塚古墳のところで述べたように古墳の造営についても版築技術など寺院建築の技術が援用されているように古墳時代後期から終末期には着実に仏教の影響が北武蔵地域にも浸透しつつある。

北武蔵地域における寺院建立は、7世紀の第2四半期でも中頃に近い時期と推定される比企郡滑川町の寺谷廃寺が最初とされる。寺谷廃寺は、羽尾窯跡、平谷窯跡の近傍で横淳屯倉推定地や後の比企郡・横見郡二つの郡家に地理的に近い位置にあり、6・7世紀から「さきたま」地域とつながる交通の要衝であったとする指摘がある（酒井 2014）。寄居町の馬騎の内廃寺は末野窯跡群に隣接し、窯業集団が寺院の造営に無関係ということは考えられない。

一方、深谷市と熊谷市の境界に位置する西別府廃寺は、幡羅官衙遺跡群に隣接し、律令制下の幡羅郡衙と郡寺（郡家隣接／周辺寺院）の関係にあり、西別府廃寺と同範の瓦が出土しているさいたま市の大久保領家廃寺も周辺は足立郡衙の有力な推定地となっているが（水口 2025）、両地域とも古墳時代の群集墳が存在するものの有力な首長墓が存在しない地域である。

古代寺院については、前代の首長墓系譜と明確に対応する場合とそうではない場合とが指摘されているが（鈴木 2013）、武蔵地域は相模地域や常陸地域と並んで有力古墳が存在しないにも関わらず古代寺院が存在する地域である（三舟 2017）。

滑川町寺谷廃寺や寄居町馬騎の内廃寺などの古代寺院の近傍に古墳時代後期以降の首長墓が存在しないのは、北武蔵地域では 7 世紀前半代まで、「さきたま」地域に首長墓が極度に集中していたことと無関係ではなく、古墳時代後期以降に首長墓を形成した伝統的な勢力とは異なる、首長墓を造営しないような新興集団層が先行して寺院建立に関与したことを示している。

終末期古墳と律令社会

西暦 645 年に乙巳の変によって蘇我本宗家が滅ぼされ、替わって中大兄皇子を中心に一連の政治改革が断行された（大化の改新）。倭国内は、国一評（後に郡）一五十戸（後に里、郷）という新たな地方行政組織に編成され、併せて地方拠点結び付ける駅路をはじめとする陸上交通網の整備が進められた。

7 世紀第 3 四半期には東山道と東海道の間を陸路で結ぶ東山道武蔵路が整備された。東山道武蔵路は、入間郡衙と推定される川越市霞が関遺跡、多摩郡衙や武蔵国府の近傍を通過し、河川交通の要衝である新たな地域拠点を横断するように施工されている。川越市山王塚古墳や府中市熊野神社古墳が各々の郡衙推定地の近辺に立地していて、これらの古墳と郡家との間には有機的な関係が想定されている（広瀬 2012・2019）。郡を治める地方官である郡司（評司）は在地の有力豪族が任じられたが、熊野神社古墳の被葬者については前代の首長墓が周辺に存在しないことから伝統的な埼玉古墳群の首長と離れた「王権直通型首長」ととらえられている（佐藤 2018）。彼らの具体的な出自は明確ではないが、北武蔵地域からの移住を想定する意見もある（広瀬 2019）。

川越市の山王塚古墳の場合、先行する 7 世紀前半代に造営された山王塚西古墳は直径 43 m の規模でこの時期の円墳としては有力な古墳であり、府中熊野神社古墳が造営された多摩川水系沿いにも先行する 7 世紀前半代の古墳として、円墳か方墳か不明確ながら 40 m 規模の八王子市北大谷古墳や径 44 m の円墳とされる調布市狐塚古墳（下布田 6 号墳）などがあり、在地の有力者の存在が窺われるのであって、川越市山王塚古墳や府中市熊野神社古墳は唐突に出現したわけではない。古墳被葬者の出自を考古学的に実証することは難しいが、先行する有力古墳の存在は無視できない。

従って 7 世紀中頃になって北武蔵地域の豪族がこの地に移住したものか否かは保留せざるを得ないけれども、7 世紀中頃には埼玉古墳群を中心とした「さきたま」地域の集中していた権力構造は解体し、地域権力の主体が入間川水系や多摩川水系に分散・移動したことは疑いないであろう。

律令制下では埼玉古墳群が所在する地域は前（埼玉）玉郡に含まれる。前玉評（郡）の官衙である前玉評家の所在地については現在までのところ確定していないが、埼玉古墳群から北西に 8 km ほど離れた熊谷市北島遺跡や諏訪木遺跡では多数の竪穴住居や掘立柱建物とともに腰帯の金具、緑釉陶器、灰釉陶器が出土し、また北島遺跡から南に 2 km ほど離れた行田市池上遺跡では、規則的に並んだ掘立柱建物跡や墨書土器、緑釉陶器、灰釉陶器などが検出され、隣接する小敷田遺跡からは 8 世紀初頭の出挙に関わる木簡が出土し、全体として官衙的な性格を帯びていることが注意されている。池上遺跡や前中西遺跡では、「さきたま（前玉）」を表す「前」と墨書された土器も出土していて、近年ではこの付近一帯が前玉評家の有力候補地とみなされている。

しかしながら、最近の研究で埼玉古墳群に隣接する旧盛徳寺の創建が 7 世紀末頃にまで遡ることが推測された（本紙宮原報告参照）。評家（郡衙）の構造については、郡庁や館、倉庫群（正倉）、厨などがあり、さらに周囲には工房群や寺院や祭祀場、津など様々な機能をもつ施設が有機的につながる複合施設であり、評家（郡衙）に隣接して終末期古墳がしばしば存在している。埼玉古墳群に隣接する旧盛徳寺の創建時期が見直されたことで、前玉評家（郡衙）の位置についても、前代の首長墓系譜と明確に対応する官衙と寺院という関係性で、埼玉古墳群周辺を含めて改めて再考する余地があるように感じられる。

【補注及び参考・引用文献】

- 池上悟 2007「多摩川流域における首長墓の様相」『武蔵と相模の古墳』季刊考古学別冊 15 雄山閣
- 池上悟 2019「各地の上円下方墳と山王塚古墳」『山王塚古墳総括報告書』川越市教育委員会
- 井上尚明 2007「さきたまの津を探る」『埼玉県立博物館紀要』創刊号 埼玉県立博物館
- 内山敏行 2003「古墳時代後期の諸段階と甲冑・馬具」『後期古墳の諸段階』第 8 回東北・関東前方後円墳シンポジウム発表要旨資料
- 内山敏行 2009「6 世紀の外来系遺物と対外関係」土曜考古学研究会発表要旨
- 内山敏行 2011「毛野地域における 6 世紀の渡来系遺物」『古墳時代の毛野の実像』季刊考古学別冊 17 雄山閣
- 太田博之 2007「武蔵北部の首長墓」『武蔵と相模の古墳』季刊考古学別冊 15 雄山閣
- 太田博之 2013「東日本における古墳時代後期の朝鮮半島系遺物と首長層の動向」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 179 集 国立歴史民俗博物館
- 太田博之 2020「北武蔵の終末期古墳」『川越市立博物館紀要』第 2 号 川越市立博物館
- 柿沼幹夫 2025「第 2 章 第 2 節 4 古墳時代の利根川と荒川」『さいたま市史原始・古代編Ⅱ』さいたま市
- 熊谷公男 2001『日本の歴史 3 大王から天皇へ』講談社
- 酒井清治 2014「埼玉県寺谷廃寺から勝呂廃寺への変遷—素弁軒丸瓦から棒状子葉軒丸瓦へ—」『駒沢史学』第 82 号 駒沢大学史学研究室
- 酒井清治 2024「埼玉古墳群と須恵器」『日本考古学の論点 上』雄山閣
- 坂本和俊 1996「埼玉古墳群と无耶志国造」『群馬考古学手帳』6 群馬県土器観会
- 坂本和俊 2024「武蔵国の中心にない那珂郡と知々夫国造」『地域考古学』第 8 号 地域考古学研究会
- 佐藤信 2018「稲荷山古墳出土鉄剣銘と武蔵国の古代史」『史跡埼玉古墳群総括報告書Ⅰ』埼玉県教育委員会
- 寺社下博 1997「地方の多角形墳」『倉田芳郎先生古希記念 生産の考古学』同刊行会
- 白石太一郎 1992「関東の後期大型前方後円墳」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 44 集 国立歴史民俗博物館
- 白石太一郎 1996「駄ノ塚古墳の提起する問題」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 65 集 千葉県成東市駄ノ塚古墳発掘調査報告 国立歴史民俗博物館（2000『古墳と古墳群の研究』に「関東における前方後円墳の終末」と改題して所収）

- 白石太一郎 2005a「前方後円墳の終焉」『古代を考える 終末期古墳と古代国家』吉川弘文館
- 白石太一郎 2005b「古墳の終末と古代国家」『古代を考える 終末期古墳と古代国家』吉川弘文館
- 城倉正祥 2011「北武蔵の埴輪生産と埼玉古墳群」『古代工房の復元的研究―埴輪・須恵器・瓦の工房を中心に―』奈良文化財研究所
- 杉崎茂樹 1992「北武蔵における古墳時代後・終末期の諸様相」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 44 集 国立歴史民俗博物館
- 鈴木一有 2013「7 世紀における地域拠点の形成過程」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 179 集 国立歴史民俗博物館
- 関義則 1990「埼玉将軍山古墳出土の蛇行状鉄器」『埼玉県立博物館紀要』第 16 号 埼玉県立博物館
- 関義則 2012「埼玉古墳群の構成原理」『埼玉県立史跡の博物館紀要』第 6 号 埼玉県立さきたま史跡の博物館
- 関義則 2013「埼玉古墳群の構造変遷」『埼玉県立史跡の博物館紀要』第 7 号 埼玉県立さきたま史跡の博物館
- 関義則 2025「第 2 章 第 5 節 1 埼玉古墳群の成立と展開」『さいたま市史原始・古代編Ⅱ』さいたま市
- 高田貫太 2012「金工品からみた 5、6 世紀の日朝交渉―東日本地域の事例から―」『東日本の古墳と渡来文化』松戸市立博物館
- 高橋一夫・本間岳史 1994「将軍山古墳と房洲石」『埼玉県史研究』第 29 号 埼玉県史編さん室
- 高橋一夫 2005『鉄剣銘一一五文字の謎に迫る・埼玉古墳群』新泉社
- 辰巳俊輔 2015「八角墳の再検討」『明日香村文化財調査研究紀要』第 14 号 明日香村教育委員会
- 塚田良道・中島洋一 1997「真名板高山古墳の再検討」『行田市郷土博物館研究紀要』第 4 集 行田市教育委員会
- 土生田純之 2010「古墳時代後期における西毛（群馬県西部）の渡来系文物」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 158 集 国立歴史民俗博物館
- 朴天秀 2007『加耶と倭』講談社
- 朴天秀 2009「考古学を通じてみた新羅と倭」『湖西考古学』第 21 号 湖西考古学会
- 広瀬和雄 2009「古墳時代像再構築のための考察 前方後円墳時代は律令国家の前史か」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 150 集 国立歴史民俗博物館
- 広瀬和雄 2012「多摩川流域の後・終末期古墳―7 世紀における東国地域の一動態―」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 170 集 国立歴史民俗博物館
- 広瀬和雄 2019「山王塚古墳と畿内の終末期古墳 ―終末後期古墳論に関する素描―」『山王塚古墳総括報告書』川越市教育委員会
- 藤田健一 2020「山王塚古墳の調査」『川越市立博物館紀要』第 2 号 川越市立博物館
- 増田逸朗 1980「埼玉古墳群の立地と環境」『埼玉稲荷山古墳』埼玉県教育委員会
- 増田逸朗 1987「埼玉政権と埴輪」『埼玉の考古学』新人物往来社
- 増田逸朗 1999「辛亥銘鉄剣と武蔵国造一乎獲居臣と笠直使主」『国学院大学考古学資料館紀要』第 15 輯 国学院大学考古学資料館
- 水口由紀子 2025「評制段階の足立郡家（評家）の候補地について」『さいたま市アーカイブスセンター紀要』第 9 号 さいたま市
- 三舟隆之 2017「古代東国の仏教受容と寺院」『古代東国の地方官衙と寺院』山川出版社
- 山尾幸久 1989『任那の調』の実態と性質』『古代の日朝関係』塙選書 93 塙書房
- 山田琴子・瀧瀬芳之・荒木臣紀・宮田将寛 2017「将軍山古墳の新発見資料について」『埼玉県立史跡の博物館紀要』第 10 号 埼玉県立さきたま史跡の博物館
- 李尚律 2016「古代東アジアと日本列島の馬具」『騎馬文化と古代のイノベーション』角川文化振興財団
- 若松良一 1982「菖蒲天王山塚古墳の造営時期と被葬者の性格について」『土曜考古』第 6 号 土曜考古学会

※紙面の都合上、個々の報告書は割愛したが、文中の各古墳のデータ等については、埼玉県教育委員会編 2018『史跡埼玉古墳群総括報告書Ⅰ』及び川越市教育委員会編 2019『山王塚古墳総括報告書』に拠っている。

後・終末期の埼玉古墳群周辺の古墳群と遺跡

篠田 泰輔

(行田市郷土博物館)

はじめに

行田市に所在する後・終末期の古墳群と遺跡の動向を概観して、古墳群と遺跡の展開を考える。まず行田市の地形について概観するが、本稿では古墳群と遺跡が立地する地形を端的に表すため、台地・自然堤防にアルファベットを便宜的に付ける。さらに台地・自然堤防の区域を細分化する際、アルファベットの後ろに数字を付して記述を進めていく。

1 行田市の地形

埼玉古墳群が位置する行田市は埼玉県北部に位置し、北側は群馬県で、利根川中央が県境となる。東側は羽生市と加須市、南側は鴻巣市、西側は熊谷市と隣接している。

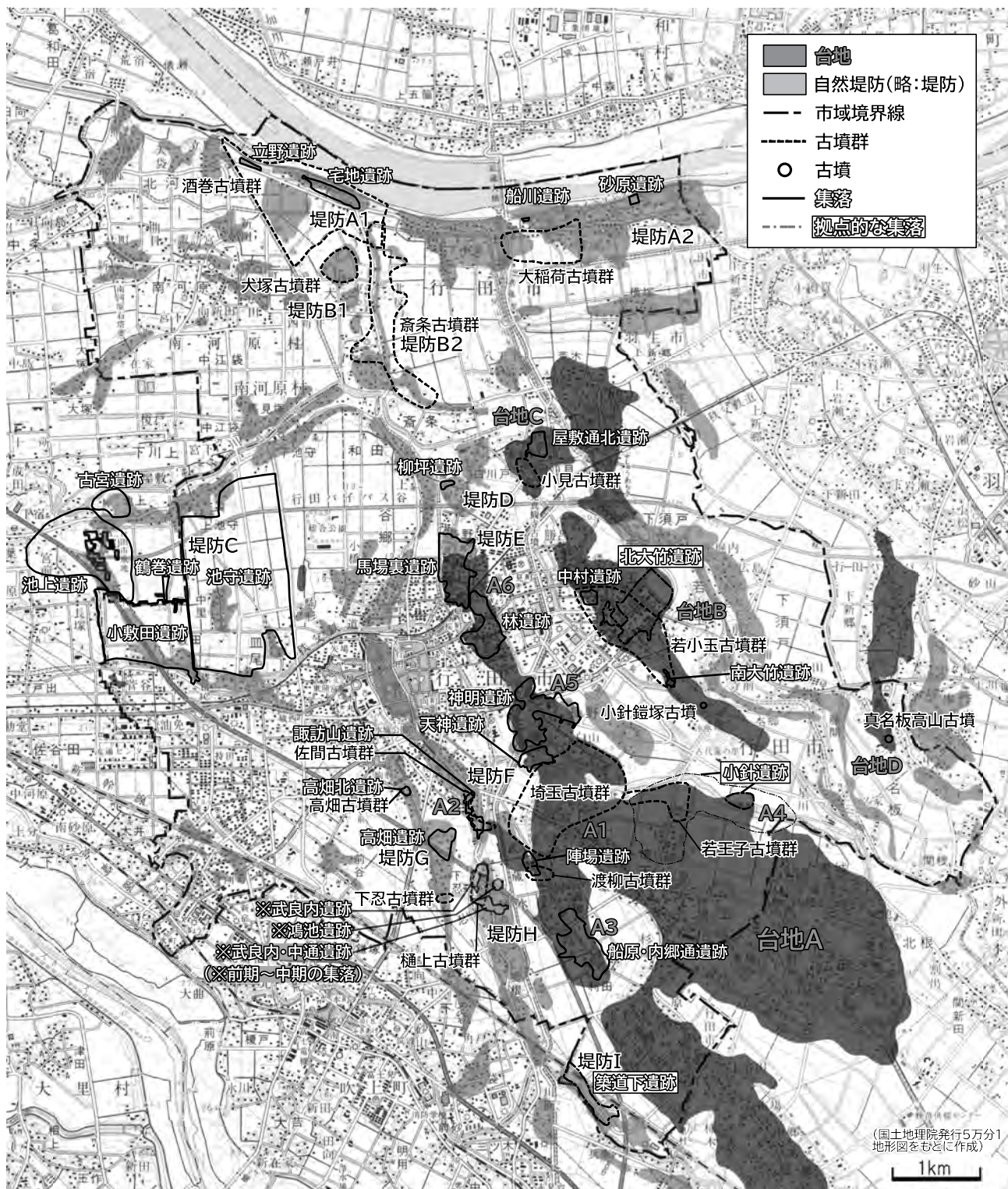
市域東部は地形区分の加須低地に属する。加須低地は一般的な低地とは異なり、洪積台地が関東造盆地運動によって沈降し、さらに利根川の氾濫等によって沖積面下に埋没して形成された地形として特徴づけられている。市域に埋没する洪積台地は、さいたま市から続く大宮台地の続きである。大宮台地は桶川市西部に最高点標高約 30 m があり、そこから北西方向へ続き漸次低くなっていく。埼玉古墳群が位置する台地 A は市内を南南東から北北西に進み市内中央付近まで続く。また台地 A に並行して、東側に台地 B が延び、谷地を挟んで台地 C が形成されている。台地 C より北側は市域を抜け利根川を越えて群馬県に入ると、再び徐々に高くなり標高約 20 ～ 25 m の館林台地へとつながっている。台地 C より北側は河川によって形成された自然堤防が多く認められて、その自然堤防に遺跡が立地している。その後の河川の氾濫等によって、遺跡が水田面下に埋没していることが多い地域である。

一方、市域西部は地勢が異なり、妻沼低地となる。市西側の熊谷市中央には荒川によって形成された新期荒川扇状地が広がっている。深谷市川本明戸付近を扇頂とし、市境より西側の熊谷市上之付近が扇端の一部となる。新期荒川扇状地の東側に位置する市域は、扇状地から続く氾濫原となっており、熊谷市から東流する星川や忍川の両岸には複数の自然堤防が分布する。また両河川の間や星川の北側には、広大な後背湿地が形成されている。

現在は市域全体ほぼ平坦な地形であるが、地質的には台地、埋没台地、自然堤防が入り組んでいる様相を呈している（第 1 図）。

2 後・終末期の埼玉古墳群周辺の古墳・古墳群

まず立地する台地・自然堤防ごとに古墳・古墳群の概要・動向を概観する。行田市内において、古墳時代前期の墳墓は方形周溝墓の造営のみで、現在のところ 4 世紀代まで遡る古墳は発見されておらず、古墳の築造は 5 世紀後葉以降に開始され、6 世紀代に盛行する。



第1図 行田市の地形と後・終末期の古墳群・遺跡

【台地A 1】

埼玉古墳群 台地Aの中央に位置する。特別史跡の範囲には前方後円墳8基、大型円墳1基、小型円墳10数基がある。他に南側には浅間塚古墳（円墳・墳径約50m）、戸場口山古墳（方墳・一辺約42m）がある。さらに稲荷山古墳北側の長野地区には白山古墳（白山1号墳）（円墳・墳径50m）、墳径約8～30m強の小型円墳9基が確認されており、他に7基が埋蔵文化財包蔵地として登録されている。大型古墳の築造順序については巻末資料2・3に譲り、ここでは長野地区の古墳について概括する。

円墳の白山愛宕山古墳（白山4号墳）（墳径約26m）の周溝から、須恵器甕・甗・無蓋高坏、土師器模倣坏・高坏、円筒埴輪、朝顔形埴輪、人物埴輪、馬形埴輪、鵜形埴輪などがまとまって発見された。また周溝内に群馬県榛名二ツ岳渋川テフラ Hr-FA（以下、FAとする）が堆積していた。築造年代は稲荷山古墳とほぼ同時期である。白山2号墳は周溝から円筒埴輪や形象埴輪が出土しており、6世紀末の築造と考えられる。白山古墳は墳丘上に大形の緑泥片岩や角閃石安山岩が認められるが、その他埴輪などの遺物は発見されておらず、7世紀代の築造と考えられる。

渡柳古墳群 埼玉古墳群・中の山古墳から約300m南側に位置する。墳径約5～20mの小型円墳4基が確認されている。6世紀前葉（陣場2号墳）から築造が始まるが、その他の古墳の年代は不明である。なお原1号墳は墳丘が残存しているが、墳頂面に神社社殿が建っている。

若王子古墳群 埼玉古墳群・將軍山古墳から約700～1,200m東側に位置する。前方後円墳の若王子古墳（墳長92m）と墳径約10mの小型円墳3基が確認されている。なお、墳長40m前後の円墳と6基の円墳がかつて存在したとされている。小型円墳3基が6世紀前半の築造と想定され、若王子古墳は6世紀末～7世紀初頭の築造である。

【自然堤防F（台地A 2）】

佐間古墳群 台地Aの北西方向に延びる小支台と、その小支台に続く自然堤防上に位置する。大人塚古墳のみが台地上に築かれ、その他はすべて自然堤防上に立地している⁽¹⁾。

墳丘が現存する円墳の大日塚古墳（墳径約22m）、前方後円墳の大人塚古墳（墳長約37m）、他に墳径10～20m前後の小型円墳14基が確認されている。なお、諏訪神社社殿が建つ塚が「諏訪山古墳」とされているが、周辺で明確な遺構が確認されておらず、古墳かどうか定かではない。

大日塚古墳は墳頂部に粘土槨2基、その下部に緑泥片岩が使用された箱式石棺が発見されている。ヨコハケが施された埴輪が出土しており、築造時期は5世紀末～6世紀初頭と考えられる。また周溝内にFAが堆積している円墳1基がある。本古墳群は5世紀末～6世紀初頭に築造が始まり、6世紀代に小型円墳が造られ続け、6世紀後半に大人塚古墳が築造される。

【台地B】

若小玉古墳群 台地Bの中央に位置する。本古墳群は、北大竹遺跡・中村遺跡・南大竹遺跡の3遺跡にまたがって展開している。墳丘が現存する円墳の八幡山古墳（墳径約80m）・地藏塚古墳（南北35m以上）、前方後円墳3基（三方塚古墳・荒神山古墳・中村7号墳）、円墳60基が確認されている。なお、他にいくつかの前方後円墳や円墳がかつて存在したとされている。

若小玉古墳群と北大竹遺跡の展開については、最終項で詳述する。ここでは大型古墳を中心に概括する。

本古墳群ではFAが周溝内に堆積した円墳2基が発見されており、5世紀末～6世紀初頭には古墳の造営が始まる。その後、6世紀代には古墳が継続的に造られ続け、6世紀中葉には三方塚古墳（墳長約70 m）が築造される。周溝は方形で、周溝から円筒埴輪、朝顔形埴輪、人物埴輪、馬形埴輪などが出土している。7世紀前葉には本古墳群中最も大きい八幡山古墳が築かれる。埋葬施設は推定全長16.7 mの横穴式石室で、前室・中室・奥室の三室構造である。石室の石材には群馬県榛名山の角閃石安山岩、荒川上流域の緑泥片岩、比企丘陵の砂質凝灰岩を用いて、様々な地域から石材を入手していた。また副葬品にはフラスコ形長頸壺、銅鏡、青銅製八花形棺金具、漆塗木棺片、銅鋌、鉄釘などがある。八幡山古墳の被葬者は広範囲から石材を入手できる人物であり、またこれらの副葬品からも広範囲に影響力をもつ有力者であったと推定されている。7世紀中葉に線刻壁画を伴う地蔵塚古墳が築造される。埋葬施設は胴張型の横穴式石室で、石室の側壁に水鳥、舟に乗った人物、馬、弓矢を持った人物などが、線刻で描かれている。

小針鎧塚古墳 南大竹遺跡から南東約500 m弱に位置する。若小玉古墳群に入れてもよいが、やや離れているため単独墳とした。6世紀中葉～後葉の墳径約20 mの円墳で、埋葬施設は横穴式石室である。副葬品は耳環、水晶製勾玉、碧玉製管玉、ガラス小玉、大刀、金銅製鈴、剣菱形杏葉、帯金具、飾金具、轡、鉄鏃、挂甲小札などがある。

【台地C】

小見古墳群 前方後円墳の小見真観寺古墳（墳長102 m）を中心に、虚空蔵山古墳（墳長約60 m）、竈山古墳（墳径約10 m）、天神山古墳（墳径約20 m）の4基で構成されている。

小見真観寺古墳は、後円部に緑泥片岩で造られた2基の埋葬施設があり、第2埋葬施設からは頭椎大刀、圭頭大刀、堅矧広板鋌留衝角付冑、有蓋脚付銅鏡、銅鏡など豊富な副葬品が出土している。埴輪は伴わず、副葬品から築造は6世紀末～7世紀初頭と考えられる。

虚空蔵山古墳は前方後円墳であるが、現在は前方部しか残存していない。周溝から円筒埴輪、人物埴輪、馬形埴輪、大刀形埴輪などが出土しており、小見真観寺古墳より先行して築造されたと考えられ、6世紀後葉とされている。竈山古墳は確認調査で周溝と考えられる溝が検出され、角閃石安山岩や緑泥片岩が出土している。天神山古墳は地中レーダー探査で埋葬施設や周溝と考えられる反応が認められず、古墳でない可能性もある。

【台地D】

真名板高山古墳 関東造盆地運動等の影響で、墳丘裾が現地表面下約3 m埋没している前方後円墳（墳長約127 m）である。円筒埴輪、人物埴輪、器財形埴輪が確認されており、埴輪から築造は6世紀後葉と推定されている。

【自然堤防A1】

酒巻古墳群 調査によって前方後円墳3基を含む22基が確認されている⁽²⁾。本古墳群は6世紀初頭と考えられる酒巻16号墳が初めに築造され、6世紀前半に堅穴系の埋葬施設が確認された酒巻10号墳他、5基の円墳が築造される。6世紀中葉～後葉の酒巻21号墳（墳径約11 m）

では複室構造の横穴式石室が採用され、石室前で須恵器を用いた葬送儀礼が確認されている。

6世紀後葉には前方後円墳（酒巻8・15・1号墳）が築造されるようになる。酒巻8号墳（全長約27 m以上）では前方部付近の円筒埴輪列に接した位置から須恵器大甕を主とした土器がまわって出土し、葬送儀礼の痕跡が確認されている。酒巻15号墳（墳長約34.2 m）では横穴式石室が検出されたが、遺存状態が悪く副葬品は確認されなかった。墳丘上や周溝内から円筒埴輪、大刀形埴輪、靱形埴輪、靱形埴輪、家形埴輪が出土した。酒巻1号墳（約46 m）は後円部に2基の横穴式石室が並列して構築され、両石室から副葬品が出土した。また前方部両側の埴輪列が検出されている。

6世紀末に築造された酒巻14号墳（墳長約35.8 m）では、円筒埴輪列・形象埴輪がほぼ原位置を保った状態で検出された。形象埴輪には筒袖の男子人物埴輪や力士の男子人物埴輪、旗を立てた馬形埴輪があり、渡来文化が反映された埴輪が樹立されていた。そのため、酒巻14号墳の被葬者は渡来系のひとと関係がある人物の可能性が高いと考えられる。

7世紀前葉には埴輪が伴わない酒巻3・5・18号墳が築造され、古墳の造営が終わる。

【自然堤防A2】

大稲荷古墳群 調査によって2基の古墳が確認されている。他に古墳に関わる遺物が発見された地点が3ヶ所あり、古墳が存在していた可能性が高い。また昭和30年代の村史には、「愛宕塚古墳」がかつて存在していたと書かれているが、現在、古墳が所在した場所はわからない。

大稲荷2号墳は埋葬施設のみが調査で検出され、直刀・鉄鏃・刀子・轡が出土した。轡の年代から5世紀末の築造とされる。6世紀初頭の大稲荷1号墳（円墳・墳径約26 m）からは円筒埴輪・朝顔形埴輪・須恵器甕等が出土している。

【自然堤防B1】

犬塚古墳群 前方後円墳（とやま古墳）1基を含む5基の古墳が確認されている。なお、周辺で埴輪が採集されている地点が数ヶ所あり、他に古墳が存在していた可能性が高い。

とやま古墳（墳長69 m）では、41本の円筒埴輪がほぼ原位置を保った状態で検出された。円筒埴輪にはB種ヨコハケが施される個体もある。出土埴輪と墳丘形態より5世紀後葉に築造されたと考えられる。

【自然堤防B2】

斎条古墳群 酒巻11号墳を含めて8基の古墳が確認されている。斎条7号墳（墳径約24.4 m）は縦穴系の埋葬施設、埴輪列、周溝が検出されている。築造年代は6世紀前葉～中葉と考えられる。斎条5号墳（墳径19 m）は墳丘が削平されていたため埋葬施設は確認されなかったが、埴輪列と周溝は検出されている。築造年代は6世紀前葉～中葉と考えられる。酒巻11号墳は石室の痕跡と埴輪列の一部が確認されただけで、不明確なところが多い。築造年代は6世紀後葉と考えられる。

【自然堤防G】

高畑古墳群 調査によって3基の円墳が確認されている。高畑1～3号墳はともに6世紀後葉段階である可能性が高い。1・3号墳からは埴輪が出土している。

下忍古墳群 調査によって2基の円墳が確認されている。下忍1号墳（墳径約15 m）は6世紀前半、下忍2号墳（墳径20 m）は6世紀中葉の築造と考えられ、2号墳からは円筒埴輪と形象埴輪が出土している。

【自然堤防H】

樋上古墳群 調査によって14基の円墳が確認されている。樋上9号墳（墳径約27～37 m）⁽³⁾からは、円筒埴輪、朝顔形埴輪、複数個体の人物埴輪等が出土している。本古墳群は6世紀前葉から築造が始まり、6世紀代に古墳が造られ続けられる。

3 後・終末期の埼玉古墳群周辺の集落遺跡

次に行田市内を中心に古墳時代後・終末期の各集落遺跡の動向を概観していく。本稿では古墳時代後・終末期の竪穴建物跡・掘立柱建物跡を取り上げて各遺跡を概観する。ただし、当該期の建物跡以外の遺構が確認されていることもある。

【台地A1】

天神遺跡 埼玉古墳群・丸墓山古墳北側に隣接している。竪穴建物跡は5世紀後葉2軒、5世紀末～6世紀初頭1軒、6世紀前半1軒が確認されている。しかしながら、小規模な調査しか行われていないため、遺跡の全容は把握できていない。

陣場遺跡⁽⁴⁾ 後期の竪穴建物跡2軒が確認されており、6世紀代に小規模な集落が営まれていた。

【台地A3】

船原・内郷通遺跡 後期～終末期の竪穴建物跡34軒、掘立柱建物跡1棟などが確認されている。多くの建物跡が発見されているが、遺跡内に広く分布している状況である。また古墳時代後期～平安時代の大溝が検出されているが、遺跡内をどのように走行していたかは把握できていない。

【台地A4】

小針遺跡⁽⁵⁾ 拠点的な集落の一つである。確実な後期～終末期の竪穴建物跡は26軒、他に古墳時代後期～平安時代までの竪穴建物跡186軒以上、掘立柱建物跡10棟以上が確認されている。建物跡は前時代の建物跡を壊しながら、繰り返し同じ場所に建て続けられている。

【台地A5】

神明遺跡 後期の竪穴建物跡が20軒以上確認されており、遺跡内に広く分布している。

【台地A6】

林遺跡 後期～終末期の竪穴建物跡は、遺跡北側で21軒が確認されている。

馬場裏遺跡⁽⁶⁾ 後期～終末期の竪穴建物跡が20軒以上確認されており、遺跡の中央付近に分布している。

【台地B】

北大竹遺跡 拠点的な集落の一つである。後期～終末期の竪穴建物跡は190軒以上確認されている。また特筆すべき遺構として、6世紀中葉～7世紀中葉の子持勾玉45個等が出土した遺物集中地点3ヶ所が確認されている。

【台地C】

屋敷通北遺跡 後期～終末期の竪穴建物跡が4軒確認されており、遺跡内に点々と分布している。

【自然堤防A1】

宅地遺跡 後期の土器が数多く確認されている。土器集中地点は竪穴建物が複数重複していた可能性は高いと考えられるが、現在のところ明確に遺構を捉えきれていない。

【自然堤防C】

池守遺跡 後期・終末期の建物跡は確認されていないが、当該期の溝や土坑があり、特に沼沢地からは、日本最古級の地機の一部品である中筒受け等の紡織具、農具、馬具、容器、下駄など多種多様な木製品や、大量の土師器が出土している。土師器は5世紀末～7世紀後葉のものと考えられ、坏が多数を占める。完形の比率が高く、沼沢地に関わる儀礼行為が行われた可能性が考えられる。

小敷田遺跡 6世紀末～7世紀初頭の竪穴建物跡2軒、後期と思われる小区画水田が確認されている。本遺跡に隣接する池上遺跡（熊谷市・行田市）や鶴巻遺跡（熊谷市）では、7世紀前半～8世紀初め頃までの土坑や溝が多く確認されている。

【自然堤防D】

柳坪遺跡 終末期の竪穴建物跡が2軒確認されている。しかしながら、小規模な調査しか行われていないため、遺跡の全容は把握できていない。

【自然堤防F】

諏訪山遺跡 遺跡中央部南東側で後期の竪穴建物跡が1軒のみ確認されている。当該期には本遺跡を中心に佐間古墳群が展開するが、佐間古墳群の規模に比して、本集落は規模が小さい。

【自然堤防G】

高畑北遺跡 後期の竪穴建物跡1軒が確認されている。

高畑遺跡 5世紀後葉～7世紀前葉の竪穴建物跡12軒以上が確認されている。

【自然堤防I】

築道下遺跡 拠点的な集落の一つである。後期～終末期の竪穴建物跡は613軒確認されている。5世紀後葉に集落の形成が始まり、6世紀中葉～後葉に最盛期を迎える。6世紀後葉には急激に衰退して、6世紀末頃～7世紀初頭に一度終息する。その後、再び7世紀後葉～8世紀初頭には大型掘立柱建物群が出現して、奈良・平安時代から中世まで連綿と集落を営んでいく。

4 まとめ

（1）古墳時代における集落の展開

後・終末期の集落を概観してきたが、古墳時代全時期を通して継続的に集落が続く遺跡は台地上の遺跡にいくつか認められる。まず神明遺跡（台地A5）では前・中期の竪穴建物跡は確認できていないが、当該期の遺物やその他の遺構が確認されており、終末期まで継続的に集落が続くと推測される。次に林遺跡・馬場裏遺跡（台地A6）では、前期は林遺跡、中期は馬場裏遺跡の北側（自然堤防E）、後期は馬場裏遺跡中央～林遺跡北端へと、環境の変化に応じて集落が動いたと推測される。最後に北大竹遺跡（台地B）では台地内で集落が移動しながら、古

墳時代を通して継続的に集落が存続している。北大竹遺跡の集落は後期古墳の造営に伴って移動している様相が判明しており、最後に北大竹遺跡と若小玉古墳群の展開で詳述する。

続いて、古墳時代を通して継続的に続かない遺跡の様相を確認する。自然堤防 G と H・I では、集落域を後期に墓域へ変えて、集落は自然堤防上の別地点へと移る様相が確認できる。高畑北遺跡（自然堤防 G）には前期の竪穴建物があるが、中期には高畑遺跡へ移動して、後・終末期まで存続する。後期の高畑北遺跡には古墳が築造されて墓域に変わる。また武良内遺跡、鴻池遺跡、武良内・中通遺跡（自然堤防 H）は前期から中期まで続く集落であったが、後期には集落が途絶えてしまう。後期には樋上古墳群が展開し、墓域へと変わる。これらの集落遺跡の集団が埼玉古墳群の造営開始に応じて、河川交通の要衝になり得る築道下遺跡（自然堤防 I）に移動した可能性があるのではないかと考える。

またその他の遺跡（台地 A 4、自然堤防 C・D）では前期と後・終末期はあるが、中期で途切れることが多い。中期のみ近くの遺跡に移動して後期に再度戻ってくる様相が考えられる。

最後に利根川右岸の自然堤防 A について、近年、利根川堤防強化対策事業に伴い、新たに立野遺跡、船川遺跡、砂原遺跡が発見されている。令和 3 年度から公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事団によって、宅地遺跡を含めて 4 遺跡の調査が進行しており、今後、利根川右岸の自然堤防における集落の様相が明らかになるであろう。

（２）各古墳・古墳群の展開

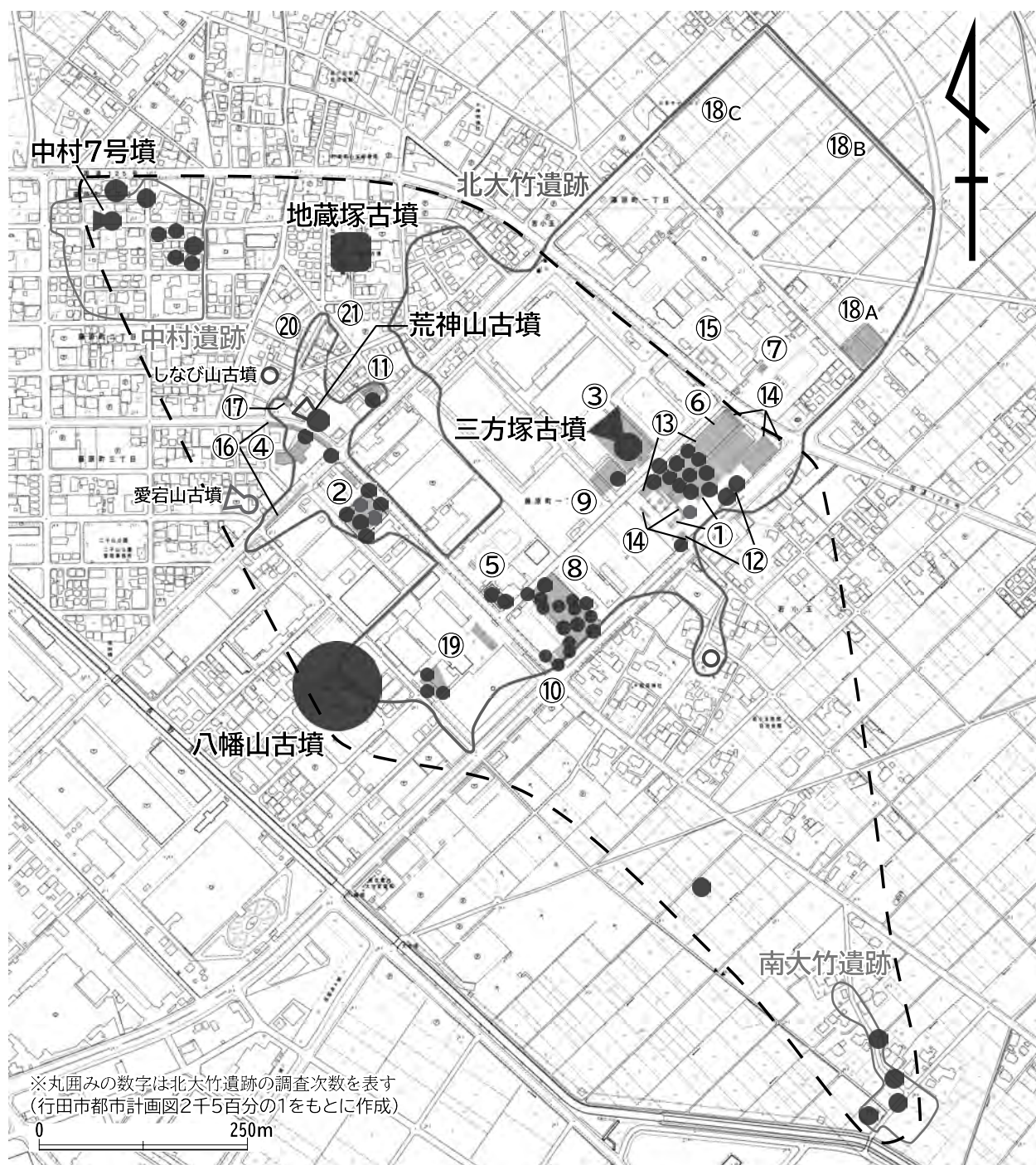
古墳が出現するのは 5 世紀後葉で、埼玉古墳群・稲荷山古墳に相前後する時期に犬塚古墳群・とやま古墳が築造される。また FA を周溝に堆積する小型円墳が若小玉古墳群、佐間古墳群、埼玉古墳群に認められる。6 世紀前葉～中葉には各古墳群で多くの小型円墳が築造される。6 世紀後葉になると、複数の古墳群で前方後円墳が築造されるようになる。特に真名板高山古墳・小見真観寺古墳は、同時期における埼玉古墳群の前方後円墳の規模を凌駕している。7 世紀には前方後円墳の築造が終わる。この時期も埼玉古墳群の規模を凌ぐ、若小玉古墳群の八幡山古墳と地蔵塚古墳が築造され、埼玉政権の権力構造の変化が認められる。

（３）北大竹遺跡と若小玉古墳群の展開

最後に 7 世紀代に埼玉古墳群に代わり台頭する若小玉古墳群と北大竹遺跡の展開を検討する（第 2 図）。

古墳時代前期の竪穴建物跡は約 30 軒確認されている。遺跡の南西から北西にかけて分布しており、この時期の集落は台地の中でも標高が高く、地盤が安定した場所に立地する傾向にある。中期には集落規模が縮小し、遺跡の中央部（1・3・8・12 次調査区）に展開する。5 世紀末～6 世紀初頭には、集落と並行して台地の中でも標高が高い場所を選んで古墳が造られ始まる。そのため、前・中期の集落があった 8 次調査区から竪穴建物を破壊しながら、古墳が築造されていく。5 世紀後葉～6 世紀前葉の竪穴建物は 1・3 次調査区を中心に集落域を形成するが、直後には古墳の築造範囲が北東側の 1・3 次調査区へ広がり、さらに南大竹遺跡、中村遺跡まで及ぶ。数は少ないが、6 世紀前葉の竪穴建物が 18 次調査 B・C 区にまで建てられている。3 次調査区において、6 世紀中葉には 6 世紀前葉の集落の上に三方塚古墳が造られる。6 世紀中

葉以降、竪穴建物を壊して古墳を造っていくため、集落は遺跡北東側へと移動していく様相がうかがえる。6世紀中葉以降の竪穴建物が6・13～15・18次調査区において多く建てられているが、これより北東側に古墳は確認できない。6世紀中葉以降、遺跡北東部は集落域、遺跡南西側・中村遺跡・南大竹遺跡は墓域として展開すると考えられる。後・終末期の竪穴建物は、6・14・15次調査区と18次調査A区において約70～80軒確認されている。さらに18次調査B・C区には6世紀中葉～7世紀代の竪穴建物跡32軒が確認されている。6・14次調査区



第2図 北大竹遺跡と若小玉古墳群の展開

から 18 次調査 A 区の間および、A 区と B・C 区の間には広大な土地があり、その間にも集落が広がっていたと想定すると、より多くの竪穴建物が今後発見される可能性が高い。また 18 次調査 B 区北西側で 6 世紀中葉～7 世紀中葉の遺物集中地点 3 ヶ所が発見され、3 時期に渡って何らかの儀礼行為が執り行われたと考えられる。この儀礼行為に埼玉古墳群や若小玉古墳群の首長層が関わっていたことは間違いない。7 世紀前葉に古墳群南東端の台地縁辺に八幡山古墳が、7 世紀中葉に古墳群北端に地蔵塚古墳が築造されて、古墳の造営は終焉を迎える。古墳造営終了後も、集落は奈良時代、平安時代と連綿と継続する。

おわりに

行田市内における後・終末期の集落遺跡と古墳群を概観して、現在まで判明しているそれらの動向と展開をまとめた。しかし、本稿では行田市内という狭い範囲にしか焦点を当てられず、埼玉古墳群を考える際にはより広い範囲で遺跡・古墳群を捉えて検討することが必要であろう。また市内の遺跡・古墳についても、詳細な報告・分析がなされていない調査があり不確定な部分が多い。今後も整理報告を進めて、さらに集落遺跡と古墳群の分析に努めていきたい。

【註】

- (1) 台地 A 2 は北西方向に佐間古墳群の範囲付近まで延びていると考えられるが、その台地の上には沖積土が堆積し、自然堤防 F を形成している。その自然堤防 F 上に古墳時代の遺構（佐間古墳群・諏訪山遺跡）が立地する。
- (2) 酒巻 6 号墳は報告書で帆立貝形古墳と想定されているが、調査範囲が極めて限定的なため今回は墳形不明としておく。また酒巻 11 号墳は本古墳群の範囲からやや離れた場所に位置しているため、より近い範囲にある斎条古墳群に含める。
- (3) 樋上 9 号墳は帆立貝形古墳と想定されているが、造り出し部分が墳丘の大きさに対して短いと思われるため、本稿では造出付円墳としておく。
- (4) 陣場遺跡は、『行田市史資料編考古』刊行後、東西に分かれていた遺跡を 2 つの遺跡に分離した。西側は陣場遺跡、東側を陣場 2 遺跡とした。
- (5) 小針遺跡について、第 1 図上の細点線は行政上の埋蔵文化財包蔵地である。しかし、調査によって明らかにされている部分は極めて限定的であるため、本稿ではその範囲を太点線で示した。
- (6) 馬場裏遺跡において、古墳時代中期の集落が台地 A 6 北側に形成された自然堤防 E に進出している。

【主な参考文献】

- 行田市 2022 『行田市史』資料編 考古
草野潤平 2016 『東国古墳の終焉と横穴式石室』雄山閣
熊谷市 2015 『熊谷市史』資料編 1 考古
熊谷市教育委員会 2021 『池上遺跡・鶴巻遺跡』埼玉県熊谷市埋蔵文化財調査報告書第 40 集
公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2022 『北大竹遺跡』事業団報告書第 477 集
塩野博 2004 『埼玉の古墳 北埼玉・南埼玉・北葛飾』さきたま出版会
篠田泰輔 2022 「北大竹遺跡とその周辺の遺跡について」『遺跡・遺物が語る いのり』公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
城倉正祥 2011 『北武蔵の埴輪生産と埼玉古墳群』2008(平成 20)年度～2010(平成 22)年度科学研究費補助金若手研究(B)研究成果報告書

※紙幅の都合上、各遺跡の報告書は省略したため、行田市 2022 を参照されたい。

馬具からみた将軍山古墳の歴史的意義

神 啓崇

(福岡市経済観光文化局文化財活用部史跡整備活用課)

要旨

将軍山古墳出土馬具は、「外来系」と「倭系」の2組の飾馬具と馬冑、蛇行状鉄器がある。特に外来系の馬装は、華美な装飾に加えて鈴を多用しており、被葬者（・馬）の性格を聴く馬装でも表していることに特徴がある。出土馬具からみれば、将軍山古墳の被葬者は倭王権の下で対外交渉を担うとともに、陸上交通やそれに関わる水上交通との深い関連を想定できる。

1. はじめに

- ①将軍山古墳出土馬具について、総体を確認し組合せとその系譜を明らかにする。
- ②「外来系」飾馬具が聴く馬装であることに注目し、交通との関係について考える。

2. 将軍山古墳の発掘と馬具の内訳

将軍山古墳は、1894年に地元住民により発掘され、出土品は複数の個人や機関に分散所有されている。岡本健一による出土品の内訳や所在の整理確認後も（岡本 1996、岡本編 1997）、心葉形十字文鏡板（宮代 2013a）や心葉形三葉文杏葉、銀象嵌円頭大刀など（山田ほか 2017）が新たに将軍山古墳出土品と判明している。

発掘した地元住民に聞き取りを行った柴田常恵によれば、1894年発掘出土馬具は「小鈴 六？、大鈴 五？、舌鈴 四？、轡 二、轡のかじみ 一、鐙 二、杏葉 四、雲珠 一〇、十字形銅器 三、其他泥障等の類」である（柴田 1905:p.376）。ただし、これらの種類と数量はあくまで柴田が確認できたもので、実際の点数は異なるようである。例えば棘葉形杏葉は、柴田の記録では4点だが、現在判明している数は、所在不明資料も含めれば6点である。これまでに判明した将軍山古墳出土馬具を改めて整理すると、表1の通りで、「外来系」と「倭系」の飾馬具に分別できる。「外来系」は、中国・朝鮮半島で主に出土する一群、「倭系」は日本列島で主に出土する一群である。倭で新たに創出されたものに加え、中国・朝鮮半島に系譜を求めることができるものでも、変容して日本列島で多く出土するものは「倭系」として扱う。

表1 将軍山古墳出土馬具の内訳

A	種 類	点数	B	種 類	点数
	心葉形十字文鏡板轡	1		大型矩形環状鏡板轡	1
	棘葉形杏葉	6		心葉形三葉文杏葉	1
	金銅製鉢状雲珠	1		金属装鞍（洲浜・磯分離）	1
	金銅製鉢状辻金具	14+		鉄製輪鐙	1 対
	金銅製飾金具	4		鉄地金銅張繫金具	7
	金属装鞍（洲浜・磯一体）	1			
	鉄製輪鐙（板状踏込）	1 対		種 類	点数
	青銅製鈴	4 ？		馬冑	1
	青銅製大型鈴	5 ？		蛇行状鉄器	2

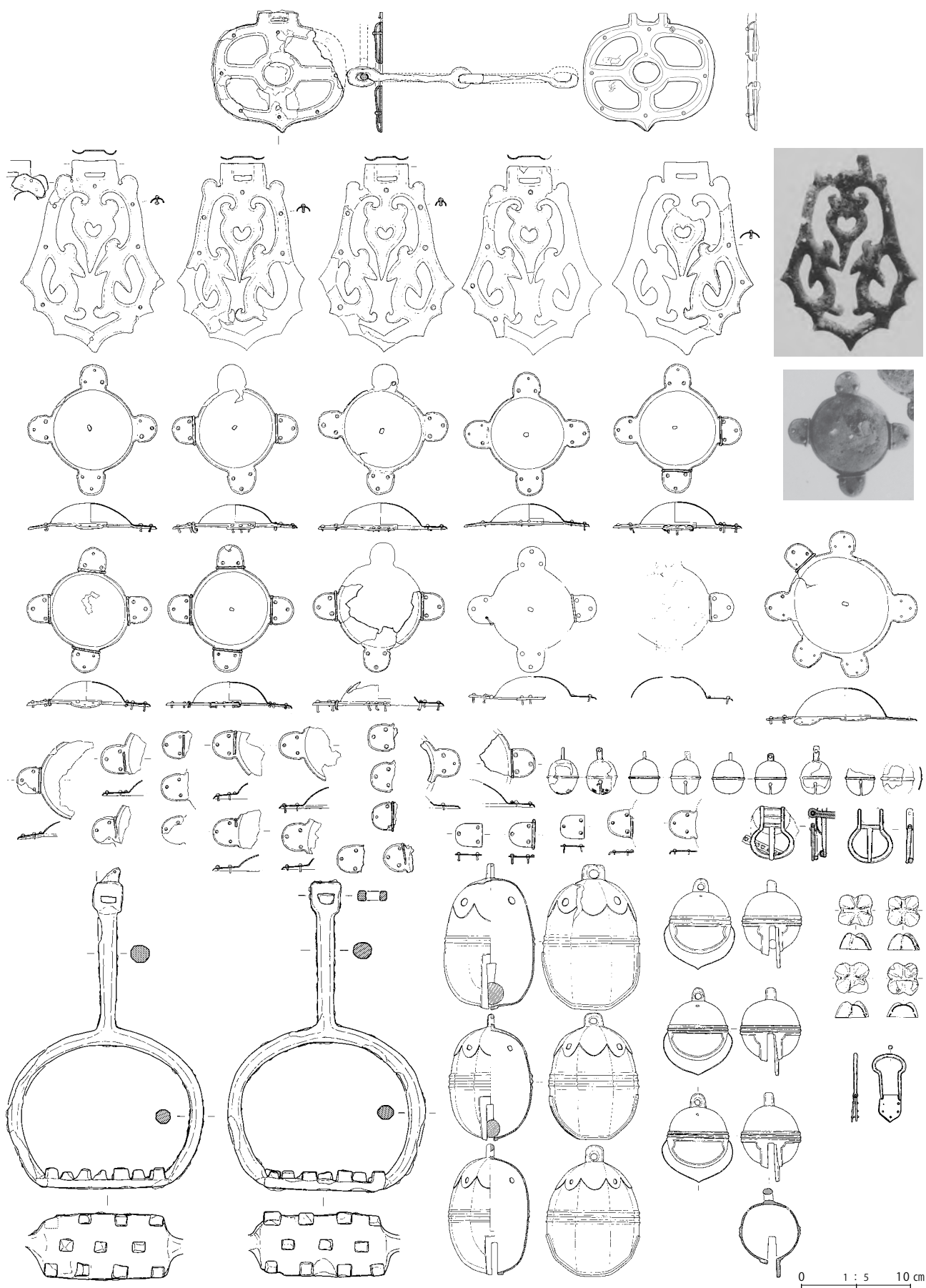


図1 将軍山古墳出土馬具Aセット

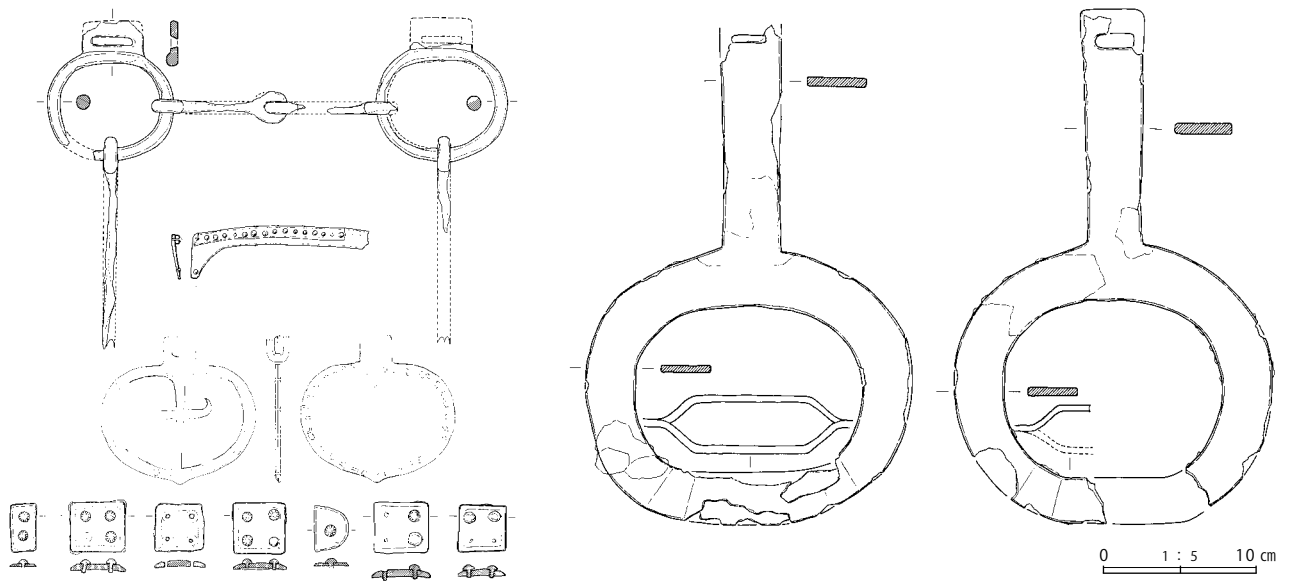


図2 将軍山古墳出土馬具Bセット

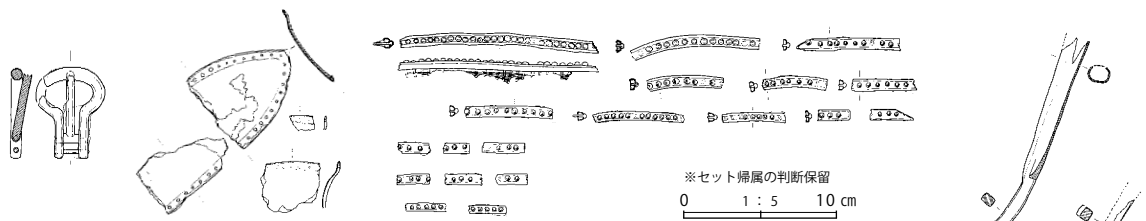


図3 将軍山古墳出土馬具

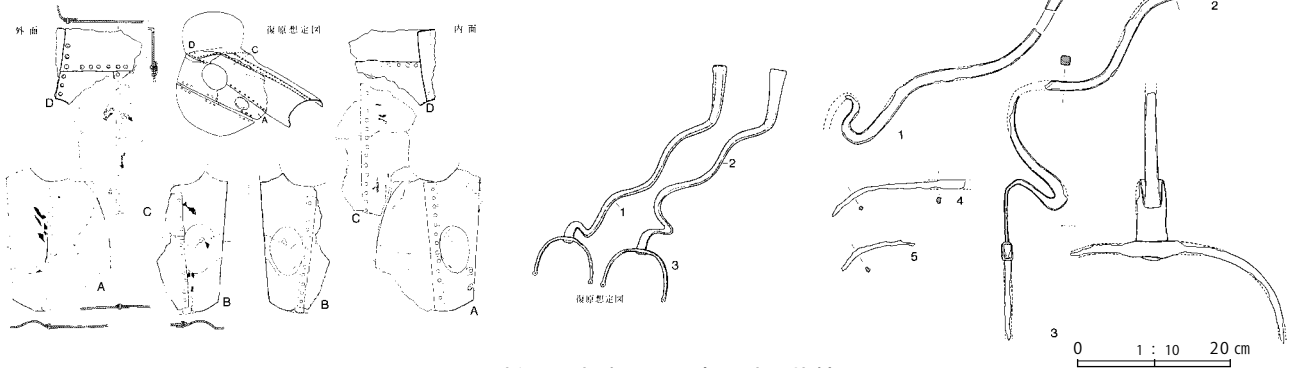


図4 将軍山古墳出土馬具・蛇行状鉄器

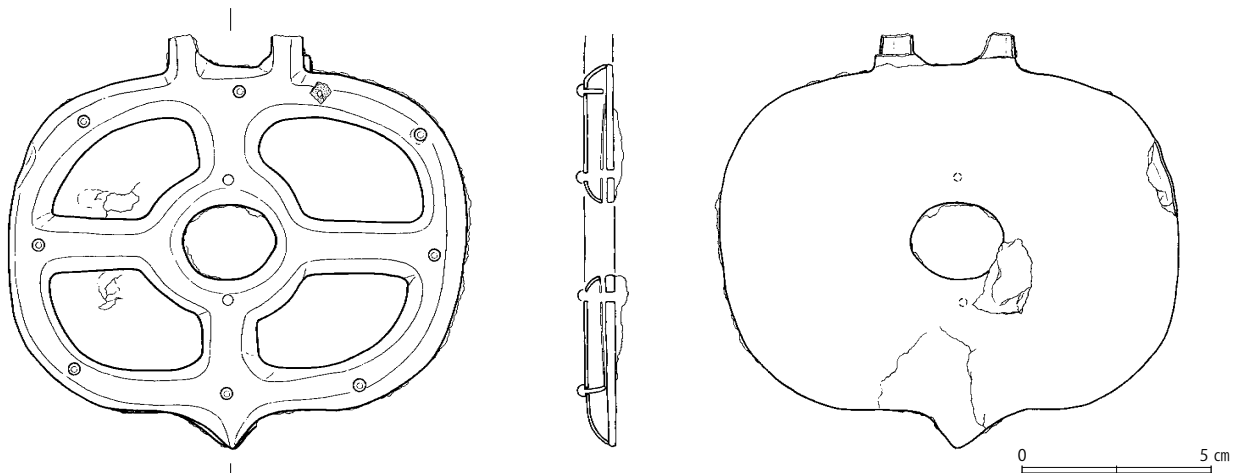


図5 将軍山古墳出土土葉形十字文鏡板（南山大学人類学博物館蔵）

3. 将軍山古墳出土馬具の検討

(1) 外来系飾馬具 (A セット)

古墳時代後期後半は、古墳時代を通じて朝鮮半島系の馬具・甲冑・装飾付大刀・装身具が最も濃密に認められることから、「舶載品ラッシュ」と呼ばれる時期である（内山 2003:pp.45-46）。この時期にもたらされた将軍山古墳の外来系馬具は、心葉形十字文鏡板轡、棘葉形杏葉、鉢状雲珠・辻金具、鉄製輪鐙、金銅製鞍鉸具を伴う鞍、鍔銅製鈴である。

1) 心葉形十字文鏡板轡・棘葉形杏葉

鏡板・杏葉の縁金文様板は、金銅板を打ち出して中空にする「中空縁金」技法である（桃崎 2001:pp.16-17）。破損していれば断面観察で認識できるが、完形品の場合は X 線画像が無いと判断はやや難しい。断面は半円形で、稜線が無く丸みを帯びているのが特徴である。縁金と文様板を一体で中空にするものが先行し（岩原 2012:p.354）、縁金のみ中空で別造りの文様板を重ねるものが新しい。よって将軍山古墳出土品は、縁金と文様板を一体で中空にする古相に位置付けられる。類例は、慶州皇吾里 16 号墳第 1 槨出土棘葉形杏葉、伝慶州出土棘葉形杏葉（九州国立博物館蔵）、釜山杜邱洞林石遺跡 5 号墳出土心葉形十字文鏡板轡・棘葉形杏葉、伝高霊池山洞出土棘葉形杏葉、高霊池山洞 518 号墳出土楕円形鏡板・心葉形二葉文杏葉、福岡県竹原古墳出土心葉形十字文杏葉、熊本県才園古墳 B セット心葉形十字文鏡板・棘葉形杏葉などがあり、朝鮮半島の新羅・大加耶地域に多い。その上で、轡から系譜を絞り込みたい。将軍山古墳出土鏡板轡の特徴は、銜端覆金具が無く、鏡板外側に引手がある構造で、新羅に見られる轡と共通する。池山洞 518 号墳など大加耶の轡は、銜端覆金具があり、鏡板内側に引手を連結するので構造は異なる（神 2022:pp.11-12）。轡の特徴を踏まえれば、将軍山古墳出土品は新羅に系譜がある。なお、棘葉形杏葉の地板鉄板や金銅板は、現存する 5 枚全てに無く、その破片も確認できていないので、地板は有機質の可能性はある（桃崎 2001:p.17）。

2) 鉢状雲珠・辻金具

辻金具本体の形態は、慶州天馬塚、伝慶州出土（九州国立博物館蔵）、熊本県才園古墳 B セットの辻金具に類似する。将軍山古墳出土品の特徴は、すべての雲珠・辻金具の鉢頂部に方形孔を有することである。これは歩揺付立飾や鈴を付けるための孔だが、将軍山古墳では金銅製鈴が出土しているので、鉢頂部に鈴が付いた雲珠・辻金具が想定できる（宮代 2003:p.48）。

鈴付馬具は、古墳時代中期後半を主体とする鍔銅鈴付馬具（鈴付鏡板轡・鈴杏葉）が顕著だが、古墳時代後期には、別造りの鍔銅鈴や金銅鈴を装着した雲珠・辻金具・繫飾金具が認められる。金銅鈴付雲珠・辻金具は、昌寧校洞 10 号墳、伝慶州出土（九州国立博物館蔵）、静岡県藤谷 A 6 号横穴墓、静岡県宇洞ヶ谷横穴、静岡県別所 1 号墳、静岡県蜷塚 1 号墳、群馬県綿貫観音山 A セットなどに類例がある。鈴付雲珠・辻金具・繫飾金具は、新羅・加耶地域の影響を受けて古墳時代後期後半以降に倭製化していくが、個体差が大きく個性が強い。

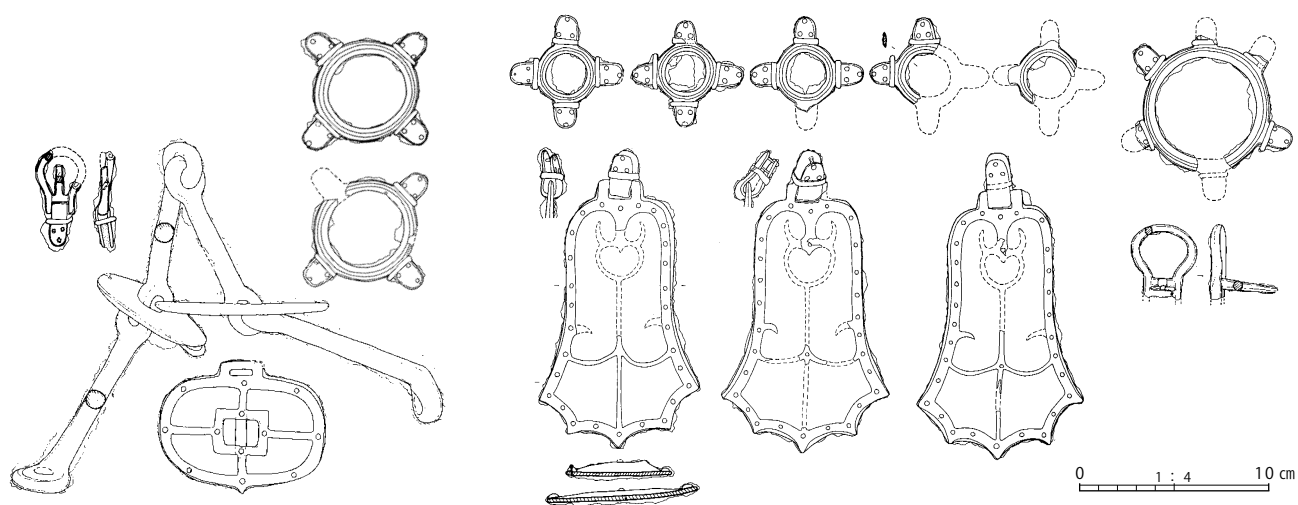
3) 鉄製輪鐙

鉄製輪鐙は、古墳時代並行期の東アジアでは 100 基以上の古墳や墓から出土している。特に新羅・慶州では 20 基以上の古墳から 30 セット以上が出土しており、最密集地域である（桃崎

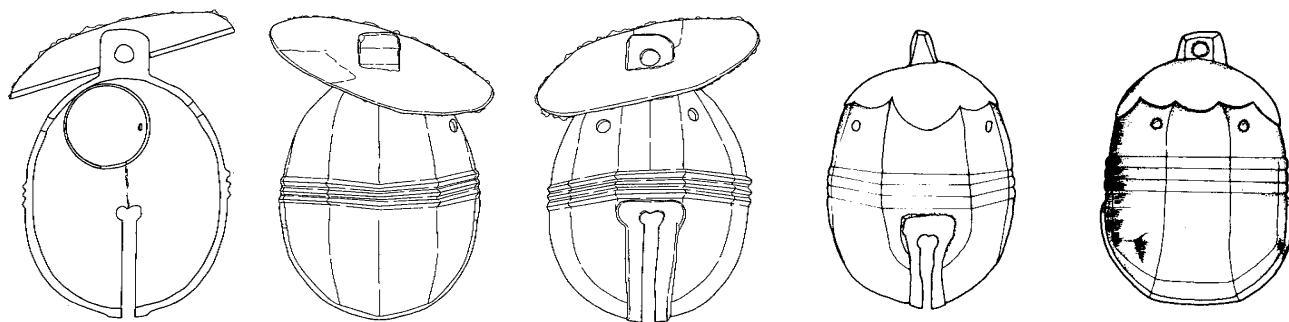
2009)。將軍山古墳出土品には2組の鉄製輪鐙がある。いずれも新羅に類例があるのでどちらがAセットに伴うか判断が難しいが、踏込幅広でスパイク状突起のある鉄製輪鐙は、奈良県珠城山3号墳（外来系飾馬具）、断面板状の鉄製輪鐙は福岡県石ヶ元8号墳（倭系馬具）に伴う事例などから判断すれば、Aセットには踏込幅広でスパイク状突起のある鉄製輪鐙が伴うと考える。

4) 鞍

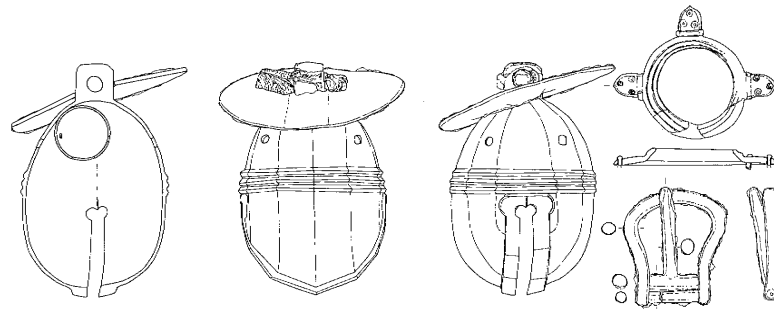
將軍山古墳出土の鞍金具には、磯金具片、洲浜金具片、金銅製鞍鉸具片がある。金銅製鞍鉸具を伴う鞍は、奈良県藤ノ木古墳Aセット、静岡県院内甲古墳、静岡県賤機山古墳Aセット、千葉県金鈴塚古墳Aセット、茨城県風返稻荷山古墳Aセットなどにあり、いずれも「新羅系」（千賀2003）の洲浜・磯一体鞍である。洲浜金具片は、左端部は欠損していないので、「非新羅系」の洲浜・磯分離鞍の部品であることがわかる。よって、將軍山古墳出土品には2組の鞍がある



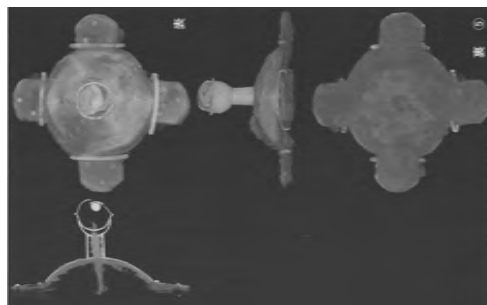
1. 釜山 杜邱洞 林石遺跡5号墳



3. 釜山 徳川洞古墳C地区21号墳



2. 義城 鶴尾里古墳1号横穴式石室



4. 佐慶州出土（九州国立博物館蔵）※縮尺不同

図6 朝鮮半島出土の將軍山古墳出土馬具対比資料

といえる。その上で、A セットに伴う鞍金具は、「新羅系」の金銅製鞍鉸具（東京国立博物館蔵）であろう。

5) 鋳銅製鈴

鋳銅製鈴は大型八角形鈴 3 点、中型鈴 3 点出土した。10 cm 以上の大型八角形鈴は朝鮮半島及び日本列島で 20 例程度あり（桃崎 2019）、朝鮮半島では義城鶴尾里古墳 1 号横穴式石室、釜山徳川洞古墳 C 地区 21 号墳など、新羅地域に類例がある。日本列島出土事例は、基本的に倭系馬具に伴い、大型品は 1 個の場合が多い。

(2) 倭系飾馬具（B セット）

2012 年新発見資料の心葉形三葉文杏葉を主とするセットである。現時点では、矩形立聞環状鏡板轡+心葉形三葉文杏葉+繫飾金具+洲浜・磯分離鞍+鉄製輪鐙を構成すると考える。

心葉形三葉文杏葉は新羅や大加耶に系譜がある。ただし、それらと製作技法や材質が異なることから、鉄地金銅・銀張に材質転換した初期倭製品の可能性がある。將軍山古墳の杏葉は寡鋳・小型化する以前のもので、茨城県玉里舟塚古墳や埼玉県一夜塚古墳など、北関東に類例がある。どちらも轡は楕円形十字文鏡板轡である。「出来合いの馬具を組み合わせで構成した…との印象が否めない」（宮代 2013a：p.26）と宮代栄一が指摘するように、組み合わせに疑問が残る。類例を踏まえれば、楕円形十字文鏡板轡と組み合っていた可能性も排除できない。また、現状で雲珠・辻金具が無いのも気になる。

3) 馬冑

將軍山古墳の馬冑は、面覆部の上板を左右分割する 1 個体の馬冑として復元されている（若松 1991）。李尚律は 1 個体に復元された資料群に A 類（上板分割有）・B 類（上板分割無）の破片があると考え、2 組の馬冑の副葬を想定している（李 2016:pp.122-123）。李尚律（1999）の A 類・B 類の系譜や両者の関係性については議論が継続しており、単系統の型式組列とみるか、複数系統の型式組列とみるかは、伝世をめぐる議論（若松 1991、太田 1994 など）にもつながる（諫早 2020）。

4) 蛇行状鉄器

蛇行状鉄器は、朝鮮半島南部 20 遺跡以上、日本列島 9 遺跡で出土しており、朝鮮半島では 5 世紀後葉から 6 世紀中葉、日本列島が 6 世紀後葉で盛行時期に差がある（諫早 2015:p.47）。蛇行状鉄器は朝鮮半島に多く外来系馬具に位置付けられるが、福岡県手光南 2 号墳では倭系馬具と組み合うし、酒巻 14 号墳の馬形埴輪も環状鏡板轡で倭系馬装の表現であることから、倭系馬具とも組み合うことがわかる。

5) 小結

以上の検討から、A セットの外来系馬具は新羅に系譜があるといえる。また、鈴を多用することも A セットの大きな特徴である。華美な装飾（見る馬装）に加えて、被葬者（・馬）の性格を音で表す⁽¹⁾馬装（聴く馬装）が重要だったことがわかる。聴く馬装自体は、鈴杏葉などの鋳銅製鈴付馬具が古墳時代中期後半からあるので新しい要素ではないが、鋳銅製大型多角形鈴を複数個用いた馬装は日本列島では將軍山古墳に限られるので特筆される。B セットは、現

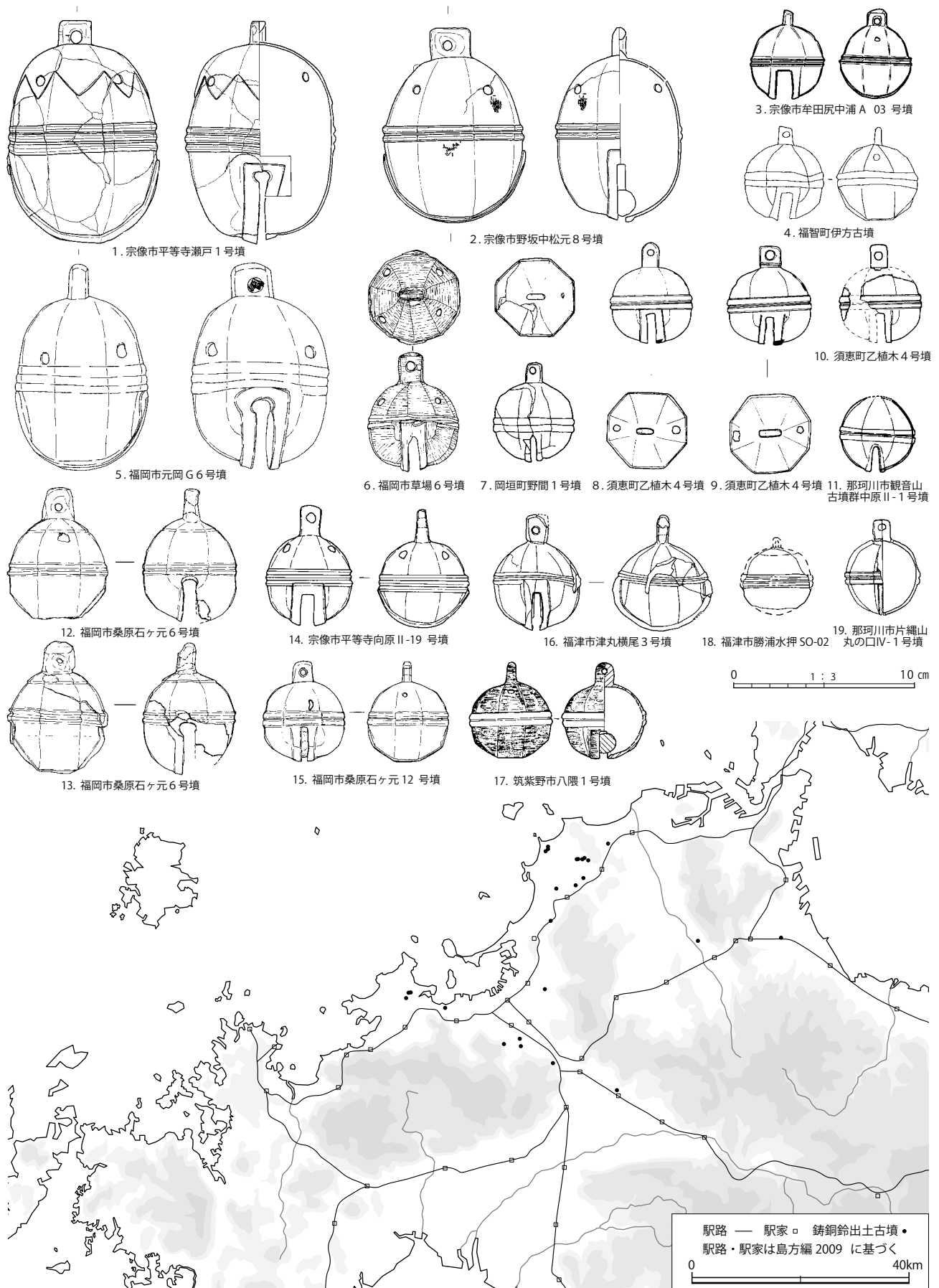


図 7 九州北部の銅鈴出土古墳と古代駅路

時点では矩形立聞環状鏡板轡に心葉形杏葉が組み合うと考えるが、類例を踏まえれば轡などに疑問が残り、検討の余地がある。

4. 聴く馬装と交通

將軍山古墳 A セットにもある鑄銅製多角形鈴について、古代駅制の駅鈴に先行する「プレ駅鈴」だと考える意見がある（桃崎 2019：pp.400-406）。鑄銅製多角形鈴が集中して出土する九州の分布をみると、古代駅路や海路の要衝に近い古墳や横穴墓から出土する傾向は認められるので、陸上交通とそれに関わる水上交通との深い関連性を推定できる。海路の要衝については、「船で送る／届く品物は、人や馬で集荷／仕分け出荷するので、港（津）は、陸路の集散地にもなる」という指摘が参考になる（内山 2024:p.265）。品物に加えて、人や馬も輸送対象になったであろう。例えば、福岡市元岡・桑原遺跡群では、元岡 G 6 号墳（大型 1 個）、桑原石ヶ元 6 号墳（中型 2 個）・12 号墳（中型 1 個）で鑄銅鈴が出土し、まとまって分布する。元岡・桑原遺跡群は古代の志麻郡にあたり、糸島半島の東岸に立地する。志麻郡は、『日本書紀』推古 10（602）年記事にある、来目皇子が撃新羅將軍に任命されて 2 万 5 千の軍衆とともに駐屯した場所で、海上交通の要衝かつ軍事的拠点として重要な位置を占めている。將軍山古墳を含む埼玉古墳群については、東山道武蔵路に近接することや（右島 2020:p.148）、内水面交通の要衝に位置づけられること（関 2018:pp.316-320）が指摘されている。鑄銅製多角形鈴を伴う聴く馬装が、陸上・水上交通の掌握と関連するとみてよさそうである。

5. 結語

將軍山古墳では、外来系に加えて倭系の飾馬具が出土することから、倭王権と無関係な環境下で対外交渉を行っていたとは考えにくい（太田 2013）。出土馬具からみれば、倭王権下で対外交渉を担うとともに、陸上交通やそれに関わる水上交通に深く関連する被葬者像がうかがえる。

【謝辞】

資料調査及び図面掲載にあたり、南山大学人類学博物館の井原瑠梨氏・鈴木康二氏・高橋佳子氏、宗像市世界遺産課の太田智氏・西依由里香氏にご高配を賜りました。記して深謝します。

【註】

（1）尻繫を「金銅装杏葉（見る杏葉）」から「鑄銅製鈴杏葉（聴く杏葉）」に置換したことが、「乗馬者の性格を音で示す目的を備えた馬装」であるという理解を参考にしている（内山 2011:p.64）。

【参考・引用文献】

安部裕久編 1992『平等寺向原 I』（宗像市文化財調査報告書第 37 集）

李 尚律 1999「加耶の馬冑」『加耶の対外交渉』金海市 pp.103-142

李 尚律 2016「古代東アジアと日本列島の馬具」白石太一郎ほか編『騎馬文化と古代のイノベーション』（発見・検証 日本の古代 II）KADOKAWA pp.108-125

- 李 白圭ほか 2002『鶴尾里古墳』（慶北大学校博物館 学術叢書 28）
- 井浦 一編 1997『津丸横尾遺跡』（福岡町文化財調査報告書 第 11 集）
- 諫早直人 2015「飛鳥寺塔心礎出土馬具」脇谷草一郎ほか編『奈良文化財研究所紀要 2015』 pp.46-49
- 諫早直人 2020「日韓における馬冑・馬甲研究の現状と課題」『柳本照男さん古稀紀年論集－忘年之交の考古学－』 pp.151-160
- 諫早直人 2024「7 馬による交通・流通」日高慎編『古墳時代の交通と流通』（考古調査ハンドブック 25）ニューサイエンス社 pp.184-214
- 石山 勲編 1977『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』 X
- 井上勇也編 2007『県指定史跡 伊方古墳』（福智町文化財調査報告書 第 1 集）
- 岩原 剛 2012「2. 出土遺物から見た馬越長火塚古墳群」岩原剛編『馬越長火塚古墳群』（豊橋市埋蔵文化財調査報告書 第 120 集） pp.354-362
- 内山敏行 2003「古墳時代後期の諸段階と甲冑・馬具」『第 8 回東北・関東前方後円墳研究会大会《シンポジウム》後期古墳の諸段階 発表要旨資料』 pp.43-58
- 内山敏行 2011「中期後半から後期前半の下毛野」右島和夫・若狭徹・内山敏行編『古墳時代毛野の実像』（季刊考古学・別冊 17） pp.57-66
- 内山敏行 2012「6. 裝飾付武器・馬具の受容と展開」岩原剛編『馬越長火塚古墳群』（豊橋市埋蔵文化財調査報告書 第 120 集） pp.313-324
- 内山敏行 2021「1 地域間関係と交通を考える馬具研究」佐々木虔一・川尻秋生・黒済和彦編『馬と古代社会』八木書店 pp.159-175
- 内山敏行 2024「古墳時代後期の首長層拠点と北関東地域」『地域と交流の考古学』（日本考古学協会 2024 年度島根大会研究発表資料集） pp.265-276
- 太田博之 1994「埼玉将軍山古墳出土馬冑資料の基礎研究」『日本考古学』 1 pp.103-125
- 太田博之 2013「東日本における古墳時代後期の朝鮮半島系遺物と首長層の動向」『国立歴史民俗博物館研究報告』 179 pp.167-196
- 大塚紀宜編 2013『元岡・桑原遺跡群 22』（福岡市埋蔵文化財調査報告書 第 1210 集）
- 岡本健一 1996「将軍山古墳石室出土遺物の所在について」『調査研究報告』 9 埼玉県立さきたま資料館 pp.15-24
- 岡本健一編 1997『将軍山古墳』（史跡埼玉古墳群整備事業報告書－史跡等活用特別事業－）
- 加藤良彦編 1992『草場古墳群』（福岡市埋蔵文化財調査報告書 第 301 集）
- 河野一隆 2013「館蔵「新羅古墳資料」の馬具～鞍橋・杏葉・雲珠・辻金具の紹介と二・三の考察～」『東風西 声』 8 pp.1-14
- 齊藤大輔 2024「古墳時代後期の武装と玄界灘沿岸の首長権構造」『地域と交流の考古学』（日本考古学協会 2024 年度島根大会研究発表資料集） pp.231-242
- 酒井仁夫・松村一良編 1976『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』 VII
- 澤田康夫編 1982『観音山古墳群』（那珂川町文化財調査報告書 第 8 集）
- 柴田常恵 1905「○武蔵北埼玉郡埼玉村将軍塚」『東京人類学会雑誌』 231 pp.375-379
- 島方洸一編 2009『地図でみる西日本の古代』平凡社
- 神 啓崇 2022「新羅の影響を受けた大加耶製飾馬具」『月刊 考古学ジャーナル』 767 pp.11-14
- 神 啓崇 2023「古墳時代後期後半の外來系飾馬具－金銅製辻金具の紹介と埼玉将軍山古墳馬具の検討－」『Archaeo-Clio』 20 pp.75-86
- 関 義則 2018「第 2 章 総括－埼玉古墳群の学術的評価と歴史的意義－」埼玉県立さきたま史跡の博物館編『史跡埼玉古墳群 総括報告書 I』埼玉県教育委員会 pp.279-326

- 千賀 久 2003「日本出土の「新羅系」馬装具の系譜」後藤直・茂木雅博編『東アジアと日本の考古学』Ⅲ 同成社 pp.101-127
- 中川潤次編 1993『井堀遺跡』（岡垣町文化財調査報告書 第14集）
- 朴 志明・宋 桂鉉 1990『釜山 杜邱洞 林石遺蹟』（釜山直轄市立博物館 調査報告書 第4冊）
- 釜山直轄市立博物館編 1983『釜山徳川洞古墳』（釜山直轄市立博物館 遺蹟調査報告 第1冊）
- 松浦一之介編 2003『元岡・桑原遺跡群2』（福岡市埋蔵文化財調査報告書 第744集）
- 右島和夫 2020「古墳時代東国のネットワーク化～古墳時代後期における坂東地域圏の成立背景～」右島和夫ほか編『国宝決定記念 第101回企画展 綿貫観音山古墳のすべて』群馬県立歴史博物館 pp.148-155
- 宮代栄一 1999「熊本県才園古墳出土遺物の研究－鍍金鏡と8セットの馬具が出土した小円墳」『人類史研究』11 pp.195-226
- 宮代栄一 2003「古墳時代における尻繫構造の復元－馬装が示すもの－」『HOMINIDS』3 pp.37-64
- 宮代栄一 2004「秘められた黄金の世紀－古墳時代の馬装」『百済武寧王と倭の五王たち 秘められた黄金の世紀展』 pp.130-134
- 宮代栄一 2013a「論考編3 将軍山古墳出土の馬具とその馬装」齋藤修佑編『平成25年度企画展 古代の豪族～将軍山古墳とその時代～』埼玉県立さきたま史跡の博物館 pp.24-27
- 宮代栄一 2013b「日韓古墳時代後期馬装の検討」『第1回共同研究会 日韓交渉の考古学－古墳時代－』 pp.69-80
- 桃崎祐輔 2001「棘葉形杏葉・鏡板の変遷とその意義」『筑波大学 先史学・考古学研究』12 pp.1-36
- 桃崎祐輔 2009「2. 鉄製輪鍔の検討」小嶋篤編『長者の隈古墳 若杉今里窯跡』（福岡大学考古学研究室研究調査報告 第8冊） pp.71-76
- 桃崎祐輔 2019「額田部の馬具と鈴－心葉形十字文透鏡板付轡と虎頭鈴・多角形鈴をめぐって－」吉松大志編『国家形成期の首長権と地域社会構造』（島根県古代文化センター研究論集 第22集） pp.363-414
- 山田琴子ほか 2017「将軍山古墳の新発見資料について」『埼玉県立史跡の博物館紀要』10 pp.43-66
- 八幡一郎 1930『日本考古圖録大成 第五輯 馬具』日東書院
- 若松良一 1991「〈資料報告〉埼玉将軍山古墳出土の馬冑」『調査研究報告』4 埼玉県立さきたま資料館 pp.1-12

【図典拠】

図1: 岡本編 1997、八幡 1930、神 2023、神実測・トレース（心葉形鏡板：南山大学人類学博物館蔵）／図2: 岡本編 1997、山田ほか 2017／図3: 岡本編 1997／図4: 岡本編 1997／図5: 神実測・トレース（南山大学人類学博物館蔵）／図6: 1. 朴・宋 1990、2. 李ほか 2002、3. 釜山直轄市立博物館編 1983、4. 河野 2013／図7: 1・2. 神実測・トレース（宗像市教育委員会蔵）、3. 齋藤 2024、4. 井上編 2007、5. 大塚編 2013、6. 加藤編 1992、7. 中川 1993、8～10. 石山編 1977、11. 澤田編 1982、12・13. 松浦編 2003、14. 安部編 1992、15. 松浦編 2003、16. 井浦編 1997、17. 酒井・松村編 1976、分布図. 神作成

古墳時代終末期以降の選択的受容と地域社会

青笹 基史

(埼玉県教育局教育総務部文化財・博物館課)

はじめに

律令制度や仏教が地域社会に与えた影響は多大である。しかし、その影響は地域の地理的条件等により一律ではない。本論では、東日本における地域社会の動向を考究するため埼玉領域（以下「県域」と略記する）における古墳時代終末期以降の地域社会を取り上げる。古墳・石室・副葬品の動向を概観したうえで古墳築造終焉と仏教関連遺構としての寺院の築造といった動向を整理する。

地域社会におけるこれらの動向の異同が小地域における情報の選択的受容を示すものと捉えた。地域間の情報ネットワークのなかで各地域が自律的に情報を選択している可能性を検討する。

1 埼玉領域における古墳時代終末期以降の研究の現状と課題

本論の組み立てに先立ち、まず県域における古墳時代終末期以降の研究を整理する。

研究の現状 県域における古墳時代副葬品の研究史は既に整理している（青笹 2024、2025b）。それを踏まえて古墳時代終末期の研究状況を概観すれば、遺物・遺構のコンテクストに応じた研究は深化した一方で総論的な議論は低調といえる。各論では副葬品組成（小久保 2001、青笹 2024^等）・須恵器（藤野 2024^等）・横穴式石室（小林 2014、草野 2016、青木 2024^等）・古墳（大谷 1996、太田 2007^等）で議論が展開し、東山道武蔵路と関連付ける議論（小野本 2008、広瀬 2012^等）、地域内における動向を整理する議論（酒井・寺前ほか 2021^等）がみられる（表 1）。

研究の課題 各論にも課題がある。遺物研究の場合、一例として副葬品では武装具や馬具といった各器物の編年研究が等閑視された総論先行のきらいがある。遺構研究の場合は、古墳を構築する諸要素が属性分析のために分解されて議論が展開し、総体としての古墳を対象とする研究はみられない。各論の精緻化は無論不可欠だが、同時に横断的な総論も必要となる（青笹 2025b）。

2 分析視角

こうした研究の課題への取り組みとして、本論では次の 3 点の視角から分析を試みる。

各論の整理 各論を網羅しえないため、特に古墳・横穴式石室・副葬品に限定して既往の研究を整理し、それぞれの研究成果を紐解く過程で見出される異同について素描する。

地域別の検討 県域内の行政界ごとにわけて各論の論点に準じて記述する。併せて、祭祀遺構の明確な実例があれば、加えて検討する。

総論の試行 前述の 2 項目での分析を踏まえ、各論（時間）と地域（空間）の展開を捕捉したうえで、地域社会の動向に論及する。ただし、考古学以外の関連領域には立ち入らない。以上の 3 点で論を構成し、関連領域を含む横断的な論考へ至る整理を図る。

3 対象資料の分析

分析視角で示した3点に基づいて記述を進める。

3-1 県域における古墳の動向（図1・上段）

これまでの議論は大きく2点に収斂する。すなわち、終末期における埼玉古墳群の造営停止と（関 2012）、東山道武蔵路沿いに大型古墳の分布が集中する点である（小野本 2008）。いずれも古墳から律令への要素の転換、それを示す端境期という理解が底流する。一方で、群集墳の展開は実例の検討や 県域における各地の様相の消長の整理（杉崎 1992、青木 2016^等）が図られてきた。

大型古墳の築造動向 関義則は古墳時代後期後半に埼玉古墳群の周辺 13km に大型前方後円墳が集中することを指摘し（関 2012）、埼玉古墳群単独築造から、その周辺へと大型古墳が拡散する動向を明らかにした。それは埼玉古墳群を起点とする距離の同心円を用いた図に端的に表される。その背景として関は物流と内水面交通の要衝と眺望性から墓域が選定されたと捉えた（関 2012）。

こうした議論の理解にあたり参照できるのは、関東地方における大型古墳被葬者を単なる領域支配者として捉えることができないとする白石太一郎の指摘であろう（白石 1992）。栃木県域の動向を整理し、陸路の移動距離を加味した内山敏行は、古墳時代後期後半の首長墳築造地域の統合・集約説を紹介した（広瀬 2011、小森 2019、内山 2024）。北関東内陸の最上位の中心地の分布を 40 (30-50) km とみて、馬を使えば無理なく到達できることを併せて示し（近江 2016）、陸上交通による地域間交流の存在可能性を指摘している（内山 2024）。内水面交通とそのランドスケープとしての意義に重点を置いた関の指摘と（関 2012）、内山が陸上交通の存在を示唆するとおり（内山 2024）、県域での研究では、今後水上・陸上の交通の両面を想定することが必要であろう。交通の想定に加え、古墳群周辺の集落遺跡の動向の検討を要するが、埼玉古墳群は内山が想定するように統合・集約された首長墓である可能性が高い（内山 2024）。こうした視点での研究の深化が望まれる。

また、終末期には前方後円墳から円墳へと墳形が転換し、築造範囲は拡散する。加えて、上円下方墳の出現は地域内の文脈では読み取ることのできない現象であり、外来的な要素であることは疑いない。その出現は、終末期前半の最終段階で、大型円墳が各地で出現するタイミングと重なる。当該期に大型古墳の造営は停止することと併せ、今後の検討が必要である。

墳形の変遷と群集墳の築造動向 群集墳中の墳形は、大型古墳の動向と軌を一にして、終末期には前方後円墳から円墳へと転換し、地域内の文脈とは異なる外的な影響により、上円下方墳と多角形墳がもたらされる。こうした墳形の変遷とは別に群集墳の築造動向には3パターンの展開が青木弘により指摘される。すなわち、継続型群集墳（後期以降終末期後半まで造墓活動を継続する青柳古墳群、旭・小島古墳群、三ヶ尻古墳群^等）、新興型群集墳（後期以降終末期前半まで造墓活動を継続する帯刀古墳群、川田谷古墳群、側ヶ谷戸古墳群^等）、続新興型群集墳（後期末以降終末期に造墓活動を継続する塚本山古墳群^等）である（青木 2016）。複数パターンの群集墳が近接して存在することから、現在の郡域よりもさらに細かい単位の錯綜した地域性が読み取れる。

構築技法にみる情報 青木が指摘するとおり、古墳構築技法の系譜と寺院構築技法から展開する系譜の整理は容易ではなく、単純に古墳と寺院が構築技法を共有するという単純な図式では理解できない（青木 2009）。

表1 埼玉県域における古墳時代後・終末期副葬品の研究略史

県域内の基礎資料	研究略史	特記事項	時期
1634? ~ 1867 年 近世 郷土史の胎動・研究への萌芽			I 期
1634 ? 小見真観寺古墳 第1主体部	▽探訪録・地誌・寺伝・伝承収集 渡邊崋山・福島東儀・大野玄鶴・洞李香齋		
1804 『新編武蔵風土記稿』	▽昌平坂学問所地理局による地誌編纂 林述齋・間宮士信	1867 大政奉還	
1868 ~ 1945 年 近代~第二次世界大戦 学術的関心の高まり			II 期
1880 小見真観寺古墳 第2主体部	▽地誌編纂の継続 郷土史家・行政組織等 ▽東京人類學會の記録 八木装三郎・大野延太郎 和田千吉・原田正彦・ 坪井正五郎	1919 史跡名勝天然 記念物法	
1907 『北武八志』	▽好古家の蒐集 根岸武香		
1924 『埼玉縣秩父郡誌』	▽内務省の調査 町田久成・柴田常恵		
1935 八幡山古墳	▽皇室博物館の列品 後藤守一・神林淳雄	1941-1945 太平洋戦争	
1946 ~ 1977 年 副葬品研究の停滞			III 期
1951 『埼玉縣史』		1950 文化財保護法	
1964 冑塚古墳（馬具ほか）	▽金井塚良一の研究		
1968 柏崎古墳群	1975 『吉見百穴横穴墓群の研究』	1973 『論集 終末期古墳』	
1976 西原古墳群			
1978 ~ 1997 年 研究基盤の整備			IV 期
「『埼玉考古学』における〈1978年〉は、『埼玉稲荷山古墳出土鉄剣における金象嵌銘文の発見』及び『川西編年の受容と検証』という二つの大きなエポックによって銘記されるべき年」（犬木 2022）			
1980 八幡山古墳（銅鏡ほか）	▽研究基盤の整備		
1982 新編『埼玉県史』資料編2	小久保ほか 1983 関・宮代 1988	1986 PHALANX	
1991 小針鎧塚古墳（小札ほか）	田中・大谷 1989,1993	1992 東国における 古墳の終末	
1993 柳瀬1号墳（鞍ほか）	瀧瀬 1991		
1994 『埼玉県古墳詳細 分布調査報告書』	瀧瀬・野中 1995		
1997 開拓1号墳（鈐帯金具）			
1997 將軍山古墳（武装具）			
1998 ~ 2025 年 基礎研究の蓄積と総論の展開			V 期
1999 穴八幡古墳（刀装具）	▽組成論への言及 小久保 2001	▽墳形・分布に基づく総論 小久保 2000 田中 2004 太田 2007 小野本 2008	大学合同考古学 シンポジウム 2004 古墳から 寺院へ 東北・関東 前方後円墳研究会 2005 前方後円墳 以後と 古墳の終末
2001 諏訪林古墳（頭椎ほか）			
2004 『埼玉の古墳』シリーズ			
2005 立野12号墳（棘葉形杏葉）			
副葬品全体を対象とした研究 県域内の実例の引用			
個別事例報告 の蓄積			
2017 樋詰6号墳（遊環付足金具）	▽石室等からの総論 小林 2014 草野 2016 青木 2024 藤野 2024	▽「古墳から古代」 広瀬 2012 川越市立博物館 2015,2019 酒井・寺前ほか 2021	2015 部分から 全体へ 2016 群集墳展開 の共通性と 地域性 2024 副葬品から 考える 古墳時代終末期
2018 小鹿野小学校（鈴）			
2019 南塚原72号墳（小札）			
2021 下塚居古墳（刀子ほか）			
2021 稲荷塚古墳（単鳳）			
2022 北大竹遺跡（単鳳ほか）			
2023 伝生野山（頭椎）	青笹 2024		
※個別資料検討論考は後・終末期の実例を対象として、基礎資料側に掲載した。 表中の文献は、別途詳述しているため（青笹 2025b）、引用文献については割愛する。			

3-2 横穴式石室の動向（図1・中段）

県域を対象とした議論と、関東地方での議論では当初から議論の前提が異なり単純な比較は困難だが、ここでは青木弘の論考を参照して県域における横穴式石室の動向の把握を試みたい（青木2024）。石材と技術に立脚した青木の論考では、凝灰岩削石積石室・角閃石安山岩削石積石室・自然石模様積石室の3系統が主体となることが示される。この3系統がそれぞれ、比企郡域・北埼玉郡域・児玉郡域に分布し、ほかに緑泥石片岩板石組石室が少数存在する。ここでは青木が示した各系統の動向を紹介し、最後に本論の他の項目と組み合わせよう若干の整理をおこなう。

凝灰岩削石積石室 比企郡域を中心に分布する石室の系統で、後期後半には北足立郡域まで分布が拡散する。この石室を採用する古墳では40 m級の前方後円墳・30 m級の円墳・20 m級の円墳の3階層がみられる。一方で石室は前方後円墳では小さく（大境南古墳例）、30 m級の円墳では大きい（冑塚古墳例^等）。終末期前半では30 m級と10 m級の円墳で2階層がみられるが、後期後半と同様に大型石室採用古墳の規模が小さく（附川8号墳例^等）、大型古墳であっても石室が大きいとは限らない（柏崎古墳例^等）。他方、終末期後半には大型古墳がなくなるなかであって、概ね墳丘と石室の規模が対応する。このようにこの系統では、終末期前半まで石室と墳丘の規模は対応せず、後半になると石室と墳丘の規模が対応するようになる。

角閃石安山岩削石積石室 北埼玉郡域を中心に分布する石室の系統である。後期後半には、60 m超級（鉄砲山古墳例）・40 m級の前方後円墳（千手堂御手長山古墳例）・40 m級（小島御手長山古墳例^等）・20 m級以下の円墳（小針鎧塚古墳例^等）と4階層がみられる。終末期前半においても40 m級（中条大塚古墳例）・10 m級の円墳の2階層がみられ、いずれも石室と墳丘の規模が概ね対応する。終末期後半においても同様の傾向である。また、この系統は石室の大型化が最も顕著にみられ、八幡山古墳の技術的な母体となっている。八幡山古墳は石材としては凝灰岩・緑泥石片岩・輝石安山岩を採用し、技術的な統合もなされた、地域を結集した石室といえる。

自然石模様積石室 児玉郡域を中心に分布する石室の系統で、後期後半以降大型の前方後円墳の調査実例が少ないため、円墳を中心に議論が展開する。この石室を採用する古墳では、30-40 m級（一本松古墳例^等）・10-20 m級の円墳の2階層がみられる。終末期前半も同様の階層構造がみられ、30-40 m級（鹿島8号墳例）・10-20 m級の円墳となる。いずれの時期においても大型古墳で小型の石室、小型古墳に大型の石室がみられるため、石室の構造と墳丘規模は対応しない。

終末期後半の動向は墳丘規模が小さくなるため、捕捉が容易ではないものの、旭・小島古墳群や塚本山古墳群のように造墓活動を終末期後半に継続する実例から考える限りでは、石室と墳丘の規模は概ね対応する。このようにこの系統では、終末期前半まで石室の構造と墳丘規模は対応せず、後半になると石室と墳丘の規模が対応する。ここまで青木の論考に依拠した。

緑泥石片岩板石組石室 系統的な石室ではなく、実例が少ない。小見真観寺古墳と、穴八幡古墳でみられ、地域内において点的に導入されていることがうかがえる石室である。また、こうした点的な導入にあっては同時期の地域最大の大型古墳に導入されることは見逃せない。他地域との情報交流を通じてもたらされた外来的な石室が、地域最大の古墳に単発で導入されたことを示すものであり、地域間交流という点では將軍山古墳における磯石と同様の文脈で理解できるかもしれない。

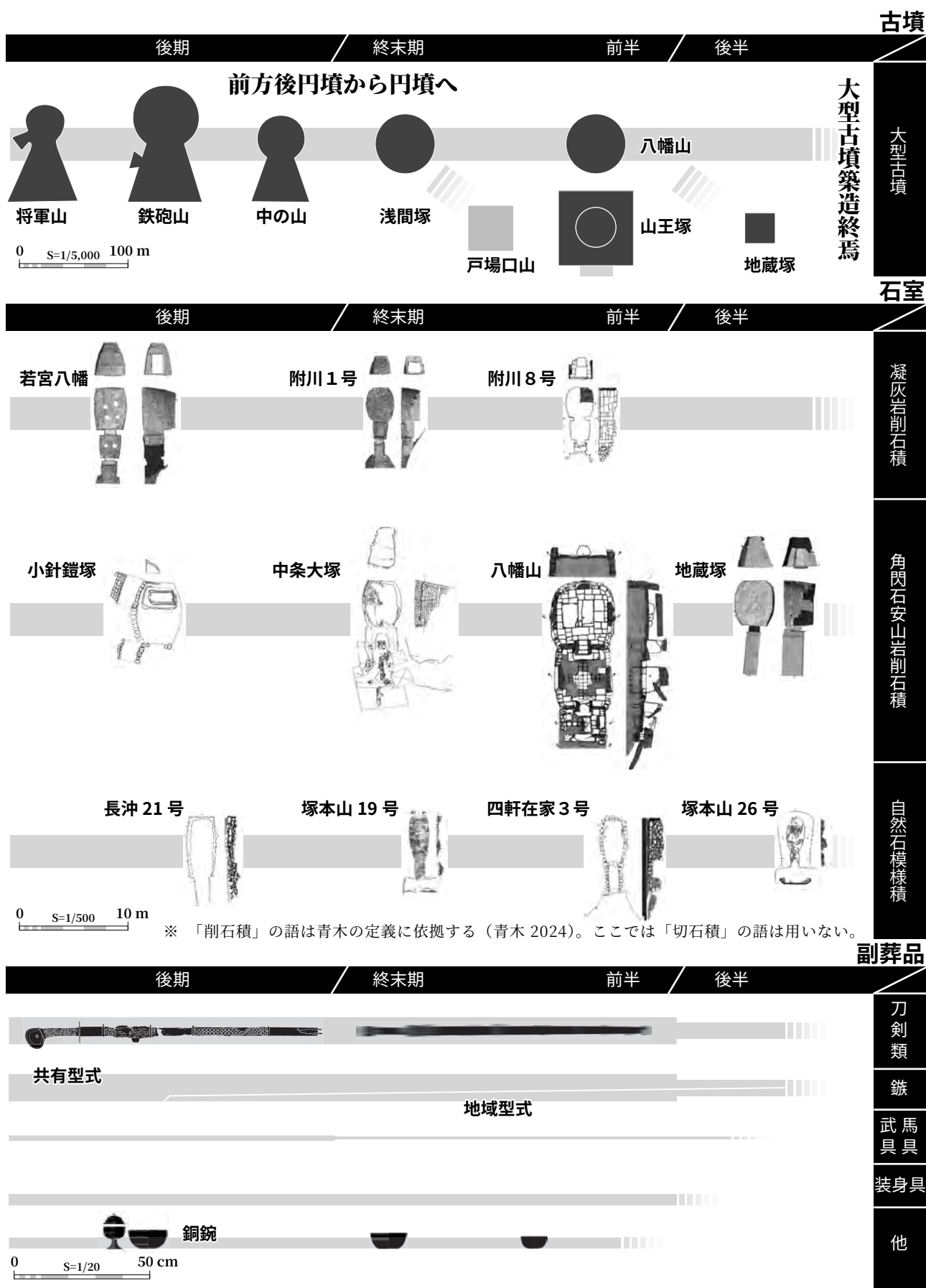


図1 古墳・横穴式石室・副葬品の時間的遷移の動向

古墳と横穴式石室の非対応が示す地域性 こうした局所的な交流以外では、上述した八幡山古墳例が最も画期的な現象である。複数石材と技術が結集された石室であること、大型複室構造をもつこと、など地域におけるその影響は大きい。ただし、こうした技術的な結集は単発で終わり、その後再び共立されることはなかった。こうした現象の背景として、石室の構造と墳丘規模の非対応は興味深い。さらに、墳形の転換と規模の変遷といった古墳築造の動向の画期と、石室の複室化や八幡山古墳例でみられる技術統合といった画期は完全には一致しないことを加味すれば八幡山古墳例の特異性が際立つ。こうした現象は、墳丘と石室の構築集団が一致しないことを示唆している。この非対応は県域一律の現象ではなく、石室の各系統の中にあっても、錯綜した動向を示す。そして、これこそが地域社会の重層的な構造を示す一端といえよう。

3-3 副葬品の動向（図1・下段）

副葬品は各器物の副葬に至るモノの履歴が異なり、総体としての位置付けは容易ではない。ここでは以前に副葬品組成の特性をまとめているので、その成果を概観する（青笹 2024）。県域における副葬品組成は、武具・馬具が乏しく、主体となるのは武器のうち刀・鏃となる。

組成からみる副葬品 武具・馬具が乏しい要因としては大型古墳の調査実例が少ないこともあげられる。ただし、近接する都県域では群集墳でも武具・馬具の実例は確認されるので、実態として鉄製の武具・馬具の副葬が低調であった可能性も棄却しえない。また、組成の主体を占める刀のうち、金属製柄頭の装飾付大刀や金属装の鞘は少なく、刀装具を伴う場合も鏢付大刀が大半である。

こうした組成のパターンに加え、特徴的な器物の消長に着目して、終末期を前後半に区分した（青笹 2024）。副葬品の主たるパターン（刀＋鏃）は時期にかかわらず、一貫して存続する。画期となるのは少数副葬される銅鏡・金銅装大刀といった器物の有無である。そのため、当初からその器物をもたない古墳にあっては、従来どおりの刀や鏃の型式学的な位置付けから検討するほかない。こうした手続き上の限界を措くとして、組成上の変遷からは、終末期前半には後期よりも装飾付大刀の副葬が拡大し、銅鏡が副葬されるようになり、終末期後半には実質的に装身具が組成から脱落し、馬具・武具が減少するという傾向がみられる。

副葬品の自律的な選択 終末期古墳の造営主体は、奢侈品としてのピカピカな器物（金銅装大刀・馬具・銅鏡）を入手できたが、それは地域内の階層や職掌を示す器物としてではなかった。自律的な選択による入手された器物を副葬している地域性の存在を示唆する（青笹 2024）。現時点では組成の特徴のみに立脚する粒度の低い把握に基づいた論立てとなっている。向後の議論に向けては、古墳単位や古墳群単位といった各レベルで、モノの履歴を丹念に解析する必要があるだろう。こうした積み上げを通じてのみ建設的な議論が果たされるものと期待する。

副葬品組成と古墳築造動向の異同 副葬品組成を論じるにあたって各器物の分析の精緻化が不可欠であることは言を俟たないが、総論への指向という点にあって、重要となるのは他の要素との異同の検証にある。古墳造営主体による副葬品の自律的な選択と古墳築造の動向との異同がみられることを既に指摘している（青笹 2024）。ただし、石室と副葬品の異同の検証は容易ではない。開口している石室も多く、現状把握される範囲では、単純に横穴式石室の大小と副葬品の質量差が有意に相関する、といったデータは読み取りがたい。

4 埼玉県域の古墳時代終末期における古墳と寺院の築造動向

ここでは、県域内を現在の行政界における郡ごとに捉え、古墳・石室・副葬品と特記事項として祭祀遺跡を加えて、地域内の動向を整理する（図2）。そのため、律令期における郡とは一致しない。

北足立郡域 古墳築造は終末期前半に停止する。横穴式石室の導入は遅く、凝灰岩削石積石室が後期後半になると新たに導入される。また導入後に埋葬施設が一律に変化することもなく、部分的な導入に留まる。本論からは脱線するが、側ヶ谷戸古墳群では後期前半以降、埴輪も複数地域から供給されており、かつ群内一律で樹立されない。ここでは、埋葬施設・埴輪の部分的導入が観測できる点を確認しておきたい。なお、副葬品の動向は実例が少ないため、明確には論じがたい。

北足立郡域は、このように後期後半から複数系統の技術が入り乱れた地域といえる。終末期前半には古墳の造営が停止し、寺院とされる大久保領家遺跡の成立との間には断絶がある。

入間郡域 古墳築造が奈良時代直前まで継続する。横穴式石室は凝灰岩削石積である。郡域内では上円下方墳の山王塚古墳と初期寺院の勝呂廃寺が時期的にはほとんど並行するが、山王塚古墳の所在する南大塚古墳群はそののち寺院や官衙関連遺構につながらず、勝呂廃寺周辺では新町古墳群が初期寺院創建の直前に造墓活動を停止する。他方、西戸古墳群や苦林古墳群のように大型古墳はなくとも、奈良時代直前まで造墓活動を継続する地域もみられる。郡域内でも複数の小地域で異なる動向が看取され、律令的な要素の導入時期も異なる。

比企郡域 古墳築造は断続的に奈良時代直前まで継続する。横穴式石室は凝灰岩削石積で、副葬品は刀・鏃を主体とする組成を示し、銅鏡や装飾付大刀がみられる。郡域内では西原古墳群のように造墓活動が継続する実例がある一方、穴八幡古墳は単独で出現する。いずれも律令的な要素は後続しない。滑川町では点的な造墓活動ののちに寺谷廃寺が出現し以降は造墓活動は停止する。寺谷廃寺の性格や位置付けには慎重な判断を要するが、終末期前半の点的な寺院の導入と以降の古墳築造終焉は、他地域と異なる特質である。

大里郡域 古墳築造は断続的に終末期後半まで継続する。横穴式石室は凝灰岩削石積と自然石模様積で、副葬品は刀・鏃を主体とする組成を示す。西別府祭祀遺跡では古墳時代的な祭祀行為から始まり、律令期以降に次第にその内容が変化していることが判明している。

児玉郡域 古墳築造は奈良時代直前まで継続する。横穴式石室は自然石模様積と角閃石安山岩削石積で、副葬品は刀・鏃・ガラス玉を主体とする組成を示す。青柳古墳群や旭・小島古墳群では後期から一貫して、終末期後半に至るまで造墓活動が継続し、寺院の有無で差異がある。また、塚本山古墳群のように後期後半から始まり、終末期を中心に造墓活動が営まれる実例もある。ただし、寺院は奈良時代に入るまで創建されず、古墳時代の要素が長く保たれた。

北埼玉郡域 古墳築造は断続的に終末期後半まで継続する。横穴式石室は角閃石安山岩削石積と自然石模様積で、副葬行為は終末期前半まで武器を中心として継続し、銅鏡もみられる。大型古墳が集中する地域だが、終末期に継続的な造墓活動は営まれず、八幡山古墳は大きなインパクトとなっている。その後、律令的な動向の導入の間には断絶がある。北大竹遺跡では古墳時代的な祭祀行為が連続し、緩やかに変性しながら奈良時代まで存続する。

秩父郡域 古墳築造は後期に始まり、終末期前半には急速に終焉し、寺院はみられない。

5 埼玉県域における古墳時代終末期の地域社会の動向

以上のように終末期の展開を整理した。これを踏まえ本論では以下の4点を確認した。各項目自体は概ね既往の論考を追認する内容だが、一覧したことを本論における成果として強調したい。

- ① 寺院創建以降、その小地域では古墳の造墓活動が停止すること
- ② 古墳築造終焉と律令的要素の受容の間に断絶のある地域がみられること
- ③ 古墳時代以降の伝統的な祭祀が律令的要素の受容後に漸次的に変容する地域がみられること
- ④ 小地域間で連動する斉一的な事象が乏しいこと

これらの動向からは、古墳築造の終焉と寺院造営といった構造物の造営の連続・非連続に現れるように情報が斉一的にもたらされておらず、各地への情報到達は差異がある。墓と寺院を並列に論じる妥当性を措くとしても、地域社会は情報に対する自律的な選択が可能で、こうした自律性に基づいて各種の情報を選択的に受容した可能性がある。

情報の選択的受容 こうした情報の選択的受容は地域性を示す。古墳時代終末期以降の地域社会は、小地域ごとの緩やかな情報ネットワークが構築され、各地域が情報を取捨選択し、受容あるいは拒絶することができる社会と考えられる。こうした地域社会における情報の選択的受容こそが、小地域性を核とする埼玉県域の特色ある性質といえる。こうした割拠ともいふべき性質は、少なくとも古墳時代終末期には存在したものといえよう。この性質は、奈良時代以降の東日本に蟠踞する在地勢力として記録に残るようになる。後代の県域における特性は古墳時代からみられた。

自律的信息ネットワークの傍証 同様の自律性は後期における形象埴輪配置でもみられ（青笹 2025a）、配置の思想や規制といった情報が埴輪生産の地域性とは分布が異なり、製作に関する技術よりも広い情報ネットワークが存在することが想定できる。副葬品も終末期に埴丘や埋葬施設といった古墳を構成する諸要素と非対応の関係にあるが（青笹 2024）、後期時点でも非対応関係はみられ、各器物の示すモノの履歴は一樣ではない。

モザイク状の地域性 県域では、古墳と寺院の断絶のある地域・比較的連続する地域・つながらない地域といったモザイク状の地域性が発露する。それ自体が古墳・律令の地域における受容の在り方の多様性を示す。つまり、律令が斉一的に地域に導入されない東国の特殊性を示す実例としての埼玉県域の特性がここに現れている。

総論その先に 今回の分析結果を歴史的事象への論及へと昇華させるためには、歴史的事象を参照していく必要がある。分析の精緻化は当然だが、加えて文献の記録と気候変動等の当時の諸現象へと迫りうる。考古学以外の関連領域への注視と参照が向後の議論には不可欠になるだろう。

おわりに

本論では、東日本における地域社会の動向を考究するため、埼玉県域の古墳時代終末期を取り上げた。遺物と遺構の動向を地域での動向を踏まえて分析した結果、埼玉県域における古墳時代終末期の地域社会が構造物の造営や器物入手といった場面で、選択的に受容できる自律性を有していたことを明らかにした。小地域を核として、仏教や律令といった外部からの多様な情報を取捨した結果、地域内でも錯綜した状況が現れる。こうした地域社会の構造が埼玉県域における特質であると捉えた。

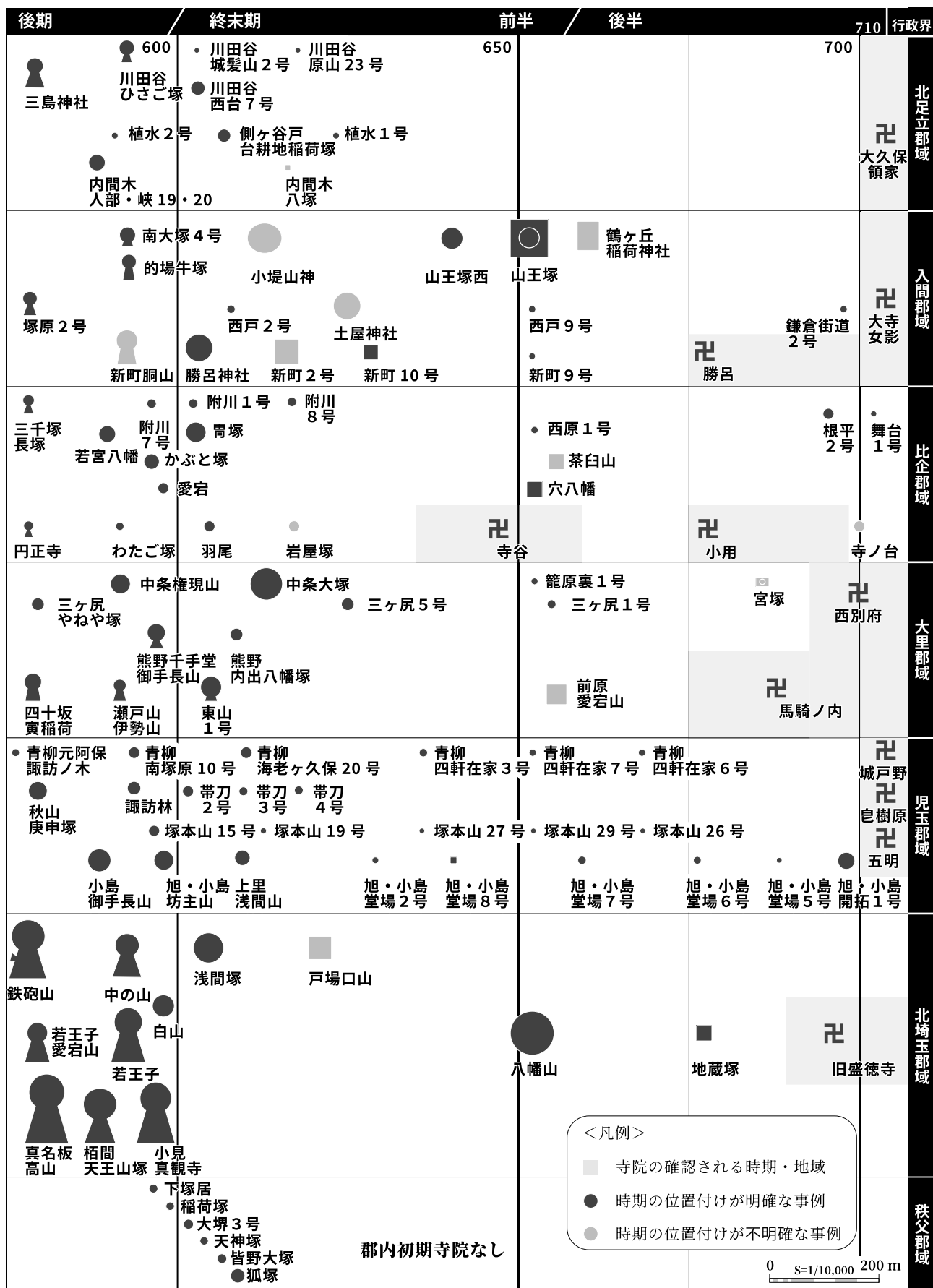


図2 古墳時代終末期以降の古墳と寺院

引用文献

- 青笹基史 2024「埼玉県域における古墳時代終末期の副葬品」『副葬品から考える古墳時代終末期』第27回東北・関東前方後円墳研究会研究大会発表要旨資料 東北・関東前方後円墳研究会 仙台 pp.107-120
- 青笹基史 2025a「埼玉県の形象埴輪配置（3）」『埴輪研究会誌』第28号 埴輪研究会 小金井 pp.86-105
- 青笹基史 2025b「埼玉県域における副葬品研究略史—近現代の武装具研究と戦争の関わり—」『埼玉県地域研究発表会』埼玉県地方史研究会・埼玉地理学会・埼玉考古学会 さいたま pp.1-21（別途近刊予定）
- 青木 弘 2009「古墳における掘込地業の分析試論—7世紀の武蔵地域を中心に—」『溯航』早稲田大学大学院文学研究科考古談話会 新宿 pp.1-22
- 青木 弘 2016「埼玉県における群集墳の展開」『群集墳展開の共通性と地域性』第21回東北・関東前方後円墳研究会大会発表要旨資料 東北・関東前方後円墳研究会 宇都宮 pp.95-114
- 青木 弘 2024『横穴式石室の築造技術と造墓集団』早稲田大学エウプラクシス叢書 44 早稲田大学出版部 新宿
- 内山敏行 2024「古墳時代後期の首長墓拠点と北関東地域」『地域と交流の考古学』日本考古学協会 2024 年度島根大会研究発表資料集 日本考古学協会 松江 pp.265-276
- 近江俊秀 2016『古代日本の情報戦略』朝日新聞出版 中央
- 太田博之 2007「武蔵北部の首長墓」『武蔵と相模の考古学』季刊考古学・別冊 15 雄山閣 千代田 pp.17-30
- 大谷 徹 1996「関東における終末期古墳」『飛鳥・白鳳時代の諸問題 I』国際古代史シンポジウム実行委員会
- 小野本敦 2008「流通路から見た武蔵の後・終末期古墳」『東京考古』26 東京考古談話会 武蔵野 pp.15-26
- 草野潤平 2016『東国古墳の終焉と横穴式石室』雄山閣 千代田
- 小久保徹 2001「終末期の副葬品組成について—『埼玉県古墳群詳細分布調査報告書』を基礎資料として—」『調査研究報告』第13号 埼玉県立さきたま資料館 行田 pp.1-6
- 小林孝秀 2014『横穴式石室と東国社会の原像』雄山閣 千代田
- 小森哲也 2019「古墳時代後期における首長墓造営域集約の背景—下野南部と出雲東部を中心として—」『考古学雑誌』第101巻第2号 日本考古学会 江戸川 pp.61-86
- 酒井清治・寺前直人ほか 2021『勝呂廃寺G地区第2次発掘調査概報』駒澤大学考古学研究室・坂戸市教育委員会 世田谷
- 白石太一郎 1992「関東の後期大型前方後円墳」『国立歴史民俗博物館研究報告』第44集 国立歴史民俗博物館 佐倉 pp.21-51
- 杉崎茂樹 1992「北武蔵における古墳時代後・終末期の諸様相」『国立歴史民俗博物館研究報告』第44集 国立歴史民俗博物館 佐倉 pp.285-327
- 関 義則 2012「埼玉古墳群の構成原理」『埼玉県立史跡の博物館紀要』第6号 埼玉県立史跡の博物館 行田 pp.53-94
- 藤野一之 2024「武蔵地域における古墳時代の陸上交通網」『古墳時代の交通と流通』考古調査ハンドブック 25 ニュー・サイエンス社 目黒 pp.121-152
- 広瀬和雄 2011「下野地域の後・終末期古墳の歴史的意義」『国立歴史民俗博物館研究報告』第163集 国立歴史民俗博物館 佐倉 pp.177-242
- 広瀬和雄 2012「多摩川流域の後・終末期古墳：7世紀における東国地域の一動態」『国立歴史民俗博物館研究報告』第170集 国立歴史民俗博物館 佐倉 pp.19-67

図表出典

図表はすべて筆者作成。下図と墳丘規模は報告書等に依り、Adobe Illustrator 2025(29.6.1)を用いて作成。

北武蔵における古代寺院造営動向

宇高 美友子

(埼玉県立さきたま史跡の博物館)

はじめに

倭国に仏教が伝来したのは欽明天皇・戊午年(538)と欽明天皇・壬申年(552)というふたつの説がある。前者は『元興寺伽藍縁起并流記資財帳』および『上宮聖徳法王帝説』によって伝えられ、後者は『日本書紀』によって伝えられている。新しい宗教が伝来したことにより、崇仏派の蘇我氏と排仏派の物部氏で対立することになる。勝利した崇仏派の蘇我馬子は、崇峻天皇即位前紀(587)年に寺院の建立を発願した。この寺院こそが、わが国初の本格的な伽藍をもつ飛鳥寺である。推古天皇が即位すると氏族らに寺院の建立を推奨し、畿内を中心に仏教寺院の数が増加する。このことから、国が仏教を公式に受け入れたことがうかがえる。このように、畿内では6世紀後半には寺院の造営が始まる一方で、古墳の築造もまた継続されており、古墳と寺院が同時につくられるまさに古代国家の成立におけるひとつの画期である。

それでは、現在の埼玉県域である北武蔵ではどのような様相が見られるのか。埼玉古墳群では7世紀前半に最後の前方後円墳である中の山古墳の築造が終了し、戸場口山古墳や浅間塚古墳といった方墳・円墳が築造される。稲荷山古墳出土の金錯銘鉄剣に見られるように全盛期にはヤマト王権との密接な関係がうかがえるが、古墳の造営終焉後はどのような動向がみられるのか。北武蔵の古墳の終焉から寺院造営の造営動向について考えてみる。

1 古墳から寺院へ

古墳の築造が終焉を迎え、日本に仏教文化が導入され始めたころに建立された寺院を「初期寺院」と呼称し、これまで様々な研究会や書籍で扱われてきた。畿内では飛鳥寺をはじめ、豊浦寺や斑鳩寺などがこれにあたる。東国では、畿内の初期寺院と比較して少し遅れての出現となるが、寺谷廃寺(埼玉県比企郡滑川町)や山王廃寺(群馬県前橋市)、龍角寺(千葉県印旛郡栄町)、浄法寺廃寺(栃木県那須郡那珂川町)などがあげられる。飛鳥寺のように畿内の寺院では寺院建立の発願者やその背景が判明しているものもあるが、地方寺院においては不明な点が多い。このような中で、上野の総社古墳群と山王廃寺、下総の岩屋古墳と龍角寺は「古墳から寺院へ」を考える上で重要な要素を含んでいる。ここでは、古墳と寺院の密接な関係が指摘されている総社古墳群と山王廃寺についてとりあげ、飛鳥寺塔心礎埋納品についても触れてみたい。さらに、本稿で取り扱う瓦について、畿内における軒瓦の伝播についてまとめ本論につなげる。

(1) 上野 総社古墳群と山王廃寺

現在の群馬県前橋市総社町総社に山王廃寺という古代寺院がある。これまでの調査によって、中門と講堂を回廊が結び、その中の東に塔、西に金堂を配する、いわゆる法起寺式伽藍配置であることが判明している。遺跡からは、塔心礎をはじめ石製鴟尾や根巻石などの石造品、塑

像、大量の瓦が確認されている。創建期の軒丸瓦として素弁八葉蓮華文があげられ(図1-1)、製作技法の検討により7世紀第Ⅲ四半期末と指摘されている(滝沢2025)⁽¹⁾。また、山王廃寺からは「放光寺」と書かれた文字瓦が出土している(図1-2)。一方、高崎市にある山ノ上碑の碑文にも「放光寺」との記載がみられ、山王廃寺が放光寺であるということがほぼ



1



2

図1 山王廃寺出土素弁八葉蓮華文軒丸瓦と「放光寺」文字瓦 (S=1/6)

確定された(松田2012)。山ノ上碑が建立された年は辛巳(681)年であり、これまでには放光寺の僧が居住できるほどに整備されていたことが考えられることから、瓦の年代観とも矛盾しない。

それでは、寺院建立以前はどのような土地であったのか。山王廃寺の東に総社古墳群という5世紀後半から7世紀にかけて築造された古墳群がある(図2)。上野では多くの古墳が築造されるが、総社古墳群は各地で古墳の築造が停止する7世紀に入っても大型方墳を築造していることが特筆され、7世紀前半に愛宕山古墳、後半に宝塔山古墳、蛇穴山古墳が築造される。宝塔山古墳や蛇穴山古墳には7世紀中葉以降に成立した硬質安山岩を加工して構築する「載石切組積石室」が採用されるが、右島和夫氏は、この石室を首長墓にふさわしいもののひとつとし、大和を中心として成立した切石積み石室の技術的影響を少なからず受けているものとしている。

尾崎喜左雄氏は、宝塔山古墳の石棺の石材加工技法が山王廃寺の根巻石と共通する点を指摘している(尾崎1966)。右島氏は、山王廃寺と総社古墳群の位置と時期や尾崎氏らが指摘するような石材加工技術の共通性からも上野地域において古墳と寺院とが一体として捉えられる唯一のものとし、大和政権の大幅な技術的援助の存在を指摘している。その上で、山王廃寺の建立を単なる宗教的施設と考えるより、大和政権による新たな支配体制の実現を目指した政治的一大モニュメントとも指摘している(右島1995)。



図2 山王廃寺と総社古墳群の位置

(2) 飛鳥寺塔心礎埋納品

先述したように、飛鳥寺はわが国初の本格的な伽藍をもつ寺院である。しかしながら、飛鳥寺の塔心礎からは、勾玉、管玉、ガラスのトンボ玉、小刀、金銅製の耳飾り、銅製の馬の鈴、蛇行状鉄器などといった、古墳の副葬品を思わせる出土品が数多く確認されており、一部を除いて創建期の埋納物であるとの見解がある(諫早2017)。一方で、金銀の小粒や延板など、後の寺院で基壇築造時の祭儀に用いる荘厳具や鎮壇具などと同様のものも含まれており、古

墳時代を想起される品と仏教の導入を想起される品が混在していることが特徴である。

(3) 畿内における軒瓦の変遷

『日本書紀』には 588 年に百済から寺工 2 名、鑪盤博士 1 名、瓦博士 4 名、画工 1 名が渡来したことが記されている。上記の工人たちが渡来したことで飛鳥寺の造営が始まることになる。飛鳥寺創建時につくられた軒丸瓦の瓦当文様は百済の瓦当文様と酷似しており、この面からも百済から瓦づくりの技術が伝わったことがうかがえる。

飛鳥寺創建期の軒丸瓦は蓮弁の中に装飾を持たない文様であり、「素弁」蓮華文や「無子葉単弁」蓮華文と表現される。日本に寺院が建立されはじめた 7 世紀第 I 四半期から第 II 四半期にかけての頃は素弁蓮華文が主流であり、百済系（式）と呼ばれる。一方、高句麗系（式）と呼ばれる細長い蓮弁の中央に鎬をもち、弁間に珠文や楔状の間弁が置かれる文様をもつ瓦が豊浦寺などで確認される。

7 世紀半ば近くになると、花卉内に子葉をもつ瓦当文様である「単弁」蓮華文が出現する。この文様構成を持つ資料としては山田寺創建時のものが知られている。蓮弁内に子葉を持ち外縁に重圏を伴うことが特徴で、山田寺式と呼ばれる。7 世紀第 III 四半期の半ばになると「複弁」蓮華文が出現する。川原寺出土の瓦に代表され、川原寺式と呼ばれる。文様は、弁間の界線が中房まで達し、外縁に面違鋸歯文をめぐらすものである。また中房の蓮子は二重にめぐらされている。7 世紀第 IV 四半期になると、外区が内縁と外縁に分けられ、内縁に珠文、外縁に鋸歯文を巡らすものが出現する。この文様は本薬師寺造営を契機として現れ、藤原宮造営時にも用いられた。8 世紀に入ると、基本的に内区に複弁蓮華文、外区内縁に珠文、外縁に鋸歯文をめぐらし、中房には中心に 1 個の蓮子を置き、まわりにいくつかの蓮子をめぐらすものが主流になる。しかしながら、蓮子や珠文、鋸歯文の数は多様で蓮弁や間弁の形も様々で、8 世紀に各国で造営が始まった国分寺で出土する軒丸瓦の瓦当文様も多彩である。

一方、軒平瓦が本格的につくられるようになるのは、重弧文軒平瓦であり山田寺での出土例が代表的である。重弧文の出現は 7 世紀第 II 四半期の半ばと指摘されている（森 2012）。なお、重弧文軒平瓦は東北地方から九州地方と広い範囲にも見られ、8 世紀代の軒平瓦にも見られる。8 世紀には均整唐草文が主流を占めるようになるが、日本各地で寺院の造営が進み、寺院以外でも宮殿や地方官衙でも瓦葺建物が増えたことなどから、軒丸瓦同様に文様の種類が多様化される。

2. 北武蔵の古代寺院

かつて武蔵国は 22 郡あり、北武蔵にはそのうちの 15 郡が存在した。現在のところ古代寺院が確認されていないのは、新座郡・横見郡・大里郡・秩父郡である。埼玉古墳群の位置する埼玉郡については後述するため、ここではこれを除く北武蔵の古代寺院と周辺遺跡の状況を整理し、寺院成立の背景についてみていく。なお、対象とする寺院は、全国で国分寺の造営が始まるとされる 8 世紀第 II 四半期までに建立が始まったと想定されるものに限るため一部の寺院については触れていない。

(1) 北武蔵の寺院造営年代⁽²⁾

武蔵国で最も古い寺院とされるのは、現在の滑川町に位置する寺谷廃寺（比企郡）である（図 3-1）。平成 22 年に寺谷廃寺の第 1 次調査が行われたが、明確な建物遺構は確認されていない。寺谷廃寺が武蔵国、ひいては東国最古級の寺院と考えられている理由には、素弁八葉蓮華文軒丸瓦の出土によるところが大きい。瓦当文様からみると飛鳥寺や百済系の軒丸瓦の特徴を示しているが、技法も含め一致しているものは現在のところ確認されていない。飛鳥寺の瓦と比べると後出的な要素があるものの、山田寺系や川原寺系が全国的に流布する 7 世紀中葉まで下がることはできないとし、7 世紀前半に位置づけられるとの指摘がある（藤原 1982）。一方で、近年の研究では、瓦の様相と平谷窯跡の調査成果から 7 世紀中葉に位置づけるとの指摘がある（酒井 2011、2025）。寺谷廃寺では遺構が確認されていないことや、軒丸瓦の系譜が不明なことから今後も検討が必要であるが、いずれにしても現段階では北武蔵（武蔵国）で最古の寺院と位置付けてよいだろう。

7 世紀後半には、馬騎の内廃寺（榛沢郡）、勝呂廃寺（入間郡）、小用廃寺（比企郡）、が建立されたと考えられる。

馬騎の内廃寺は現在の寄居町に位置する寺院（図 3-2）で、天沼川の源流近くの尾根上にある 16 の平場から構成されている。最高所では標高 256.5 m、最も低いところでは標高 208 m と標高差がある。基壇上の盛り上がりや礎石があること、そして多量の瓦が分布することから、瓦葺の寺院であると考えられている。軒丸瓦は素弁十葉蓮華文、複弁七葉蓮華文、複弁八葉蓮華文、軒平瓦は重弧文が出土している。創建期の瓦は、瓦当面が厚く、素弁としては後出的な素弁十葉蓮華文軒丸瓦と考えられている。現在のところ県内で他に類例がなく年代設定が難しいとされているものの、複弁七葉軒丸瓦⁽³⁾には先行するとみられており、7 世紀後半に求められている。特筆すべき瓦として、平瓦の凹面に青海波文や同心円文、凸面に平行叩きという須恵器工人が使用する工具が用いられたものがある。馬騎の内廃寺の南西に位置する末野窯跡群との関係が指摘されている。

勝呂廃寺は現在の坂戸市に位置する古代寺院である（図 3-3）。これまでの調査で瓦葺の基壇建物が確認されたほか、銅製の塔相輪片や「寺」と書かれた墨書土器が出土したことから、寺院跡であると考えられている。出土瓦には単弁蓮華文軒丸瓦や三重弧文軒平瓦などがある。勝呂廃寺出土の創建期の軒丸瓦は細長い子葉（棒状子葉）を持つことが特徴で、この特徴を持つ瓦は後述する小用廃寺や大谷瓦窯、赤沼古代瓦窯など比企地域に広がっている。創建瓦の分析は、生産窯である赤沼古代瓦窯跡での灰原の出土状況や共伴する須恵器編年などから前後関係が指摘されており、7 世紀第 IV 四半期と考えられている（渡辺 1997）。

小用廃寺は、鳩山町にある古代寺院である（図 3-4）。比企郡の南端中央部に位置し、入間郡との郡境に建立され、越辺川を南に見下ろす台地に存在する。瓦は出土しているものの分布範囲は散漫で、基壇など遺構は確認されていない。そのため、創建時期を定めることは難しいが、勝呂廃寺と同範で赤沼窯跡から供給されたものと考えられる単弁十二葉軒丸瓦（図 4-4）が出土していることから、7 世紀第 IV 四半期との指摘されている。

8 世紀初頭から 8 世紀第 II 四半期までには、西別府廃寺（幡羅郡）、城戸野廃寺（賀美郡）、女影廃寺（高麗郡）、大久保領家廃寺（足立郡）、五明廃寺（賀美郡）、梶樹原廃寺（賀美郡）が

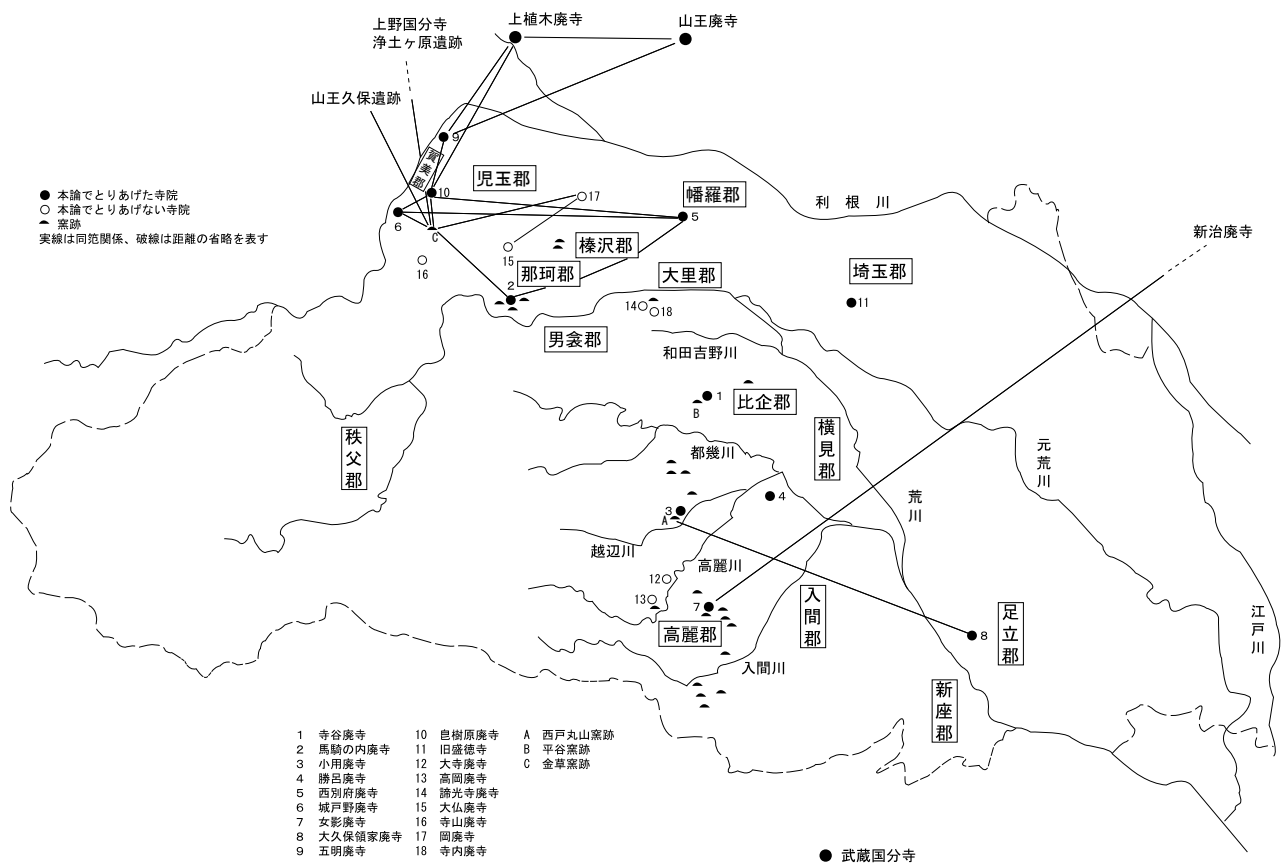
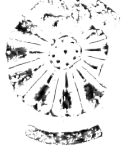
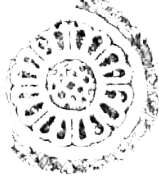
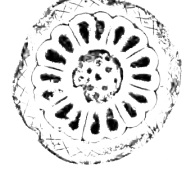


図3 北武蔵における古代寺院の位置図

郡域	(7C中葉)	7C後半	8C 初頭から 8C 第Ⅱ四半期
児玉・幡羅			 9. 五明廃寺
賀美・那珂・榛沢・大里・埼玉・男衾		 2. 馬騎の内廃寺	 5. 西別府廃寺
秩父・比企・入間・横見	 1. 寺谷廃寺	 3. 小用廃寺	 6. 城戸野廃寺
高麗・足立・新座		 4. 勝呂廃寺	 10. 邑樹原廃寺
			 7. 女影廃寺
			 8. 大久保領家廃寺

第4図 北武蔵における各寺院の創建瓦 (S=1/8)

建立される。

西別府廃寺は現在の熊谷市に位置する寺院である（図 3-5）。利根川と荒川に挟まれた台地上の北端に立地する。これまで 4 回の調査が行われており、寺院地を区画する溝跡と基壇跡が確認されている。本遺跡は、西別府遺跡、西別府祭祀遺跡、隣接する幡羅官衙遺跡も合わせて幡羅官衙遺跡群として扱われ、幡羅郡家とこれに付随する施設としての寺院と祭祀場と 3 つの要素をもっている。よって、西別府廃寺は幡羅郡家の郡寺としての機能を持っていたと考えられている。創建瓦は複弁八葉蓮華文軒丸瓦と三重弧文軒平瓦と指摘されており、8 世紀初頭に創建されたと考えられている。

城戸野廃寺は、神川町に所在する寺院である（図 3-6）。発掘調査が行われているものの遺構が確認されていないため推定地であるが、かつて礎石とみられる石が存在していたとされることや瓦類が出土していることから寺院跡である可能性が高い。また、『続日本後紀』にある緑野寺が城戸野廃寺であるとの指摘もある。創建瓦としては、複弁八葉蓮華文軒丸瓦及び単弁八葉蓮華文軒丸瓦、があげられる。複弁八葉蓮華文は、寺院跡から東約 1 km に立地する金草窯跡から供給されたと考えられ、同範瓦が馬騎の内廃寺などの北武蔵の遺跡や上野国の遺跡でも確認されている。これら瓦の出土状況から、城戸野廃寺の創建時期は 8 世紀前半と考えられている。

女影廃寺は、通称三十三間堂跡ともいわれる日高市に位置する寺院である（図 3-7）。北は小畔川、南は南小畔川に挟まれた東西に長い台地上に立地している。若宮遺跡として、女影廃寺推定地を含む広い範囲で調査が行われたが、寺院地を明確に示す遺構は確認されていない。平安時代の遺構が多い中、常陸国新治廃寺の創建瓦と同範と考えられる面違鋸歯文複弁八葉蓮華文が確認されている。この瓦当文様は茨城県で主体的につくられたが、範がそれほど傷んでいないことから、時を経ずして女影廃寺にもたらされたと考えられている。8 世紀第 I 四半期に位置づけられている（酒井 1987）。

大久保領家廃寺は現在のさいたま市に位置する寺院である（図 3-8）。荒川の支流である鴨川左岸の自然堤防上に立地している。大久保領家片町遺跡、大久保領家遺跡、道場寺院跡を合わせて寺院推定地としており調査が行われているが、現在のところ基壇などは確認されていない。しかしながら瓦類が多量に出土しており、寺院跡の可能性はきわめて高いとされる。複弁八葉蓮華文軒丸瓦と三重弧文軒平瓦が出土しており、共伴遺物から 8 世紀第 II 四半期と考えられている。なお、複弁八葉蓮華文軒丸瓦の同範瓦が西別府廃寺でも確認されている。

五明廃寺は、上里町に所在する寺院である（図 3-9）。昭和 56 年に発掘調査が行われ、溝状遺構と瓦類が確認されている。瓦類等の散布状況から寺院地は 150 m 四方と推定されており、中央部西よりに基壇状の高まりが確認されている。創建瓦は単弁十六葉蓮華文軒丸瓦と考えられており、同範瓦が上野国上植木廃寺や寺井廃寺から出土している。このことから、五明廃寺の創建年代は 8 世紀第 II 四半期ごろと指摘されている。

臼樹原廃寺は、神川町に位置する寺院である（図 3-10）。本寺院は、昭和 58 年から 62 年及び平成 21 年の 5 次にわたる発掘調査で確認された奈良・平安時代の大規模集落や鍛冶工房跡である臼樹原遺跡の一部である。遺跡の北部から瓦が集中して出土したものの、建物の痕跡は確

認されていない。しかしながら、およそ 4000 個体の瓦が出土していることから寺院が存在していたことは明らかと考えられる。出土瓦には、城戸野廃寺や西別府廃寺と同範の複弁八葉蓮華文軒丸瓦や、複弁七葉蓮華文軒丸瓦、単弁十六葉蓮華文軒丸瓦、重弧文軒平瓦、流水文風軒平瓦、五明廃寺と同範の花菱文軒平瓦がある。寺院の立地や同範瓦からみると城戸野廃寺や五明廃寺との関連性が想定され、梶原廃寺も 8 世紀前半には建立されたと考えられる。

（２）寺院の成立背景

以上、7 郡 10 遺跡についてとりあげた。北武蔵の寺院の成立について、上野国総社古墳群と山王廃寺のように、直接的に古墳と寺院を結びつけるような関係性は現在のところ確認されていない。しかしながら、寺院周辺の地理的・歴史的状況からその成立背景について考えてみると、北武蔵の寺院の成立背景に 3 つの様相がみえてきた。1 つ目は有力氏族との関係、2 つめは須恵器生産との関係、3 つめは高麗郡建郡に関わるものである。

【有力氏族との関係】

有力氏族と関係がある寺院として、寺谷廃寺、勝呂廃寺、西別府廃寺、城戸野廃寺、梶原廃寺、五明廃寺、大久保領家廃寺をあげる。これらの寺院の特徴としては、周辺に古墳時代後期の古墳群が形成されていることである。寺谷廃寺の周辺では、北に大谷古墳群が位置し、わたご塚（愛宕塚）古墳の調査が行われている。複室構造で胴張りの横穴式石室であることが判明しており（東京大学考古学研究室 1964）、比企地方の古墳群の検討によると、胴張りの横穴式石室は横穴墓とともに 6 世紀末から 7 世紀の初頭にこの地方に伝来したと考えられ、この出現の契機を渡来系氏族である壬生吉士との関係でとらえるといった考えもある（金井塚 1975）。勝呂廃寺においては、寺院の立地する台地の北縁一帯に雷電塚古墳や勝呂古墳群など、6 世紀前半から 7 世紀後半までの古墳が存在し、胴張りの横穴式石室を有する古墳も確認されている。また、奈良時代には遺跡の南約 2km に、若葉台遺跡や、宮町遺跡などの大型掘立柱建物跡を伴う大集落が形成されており、前者は帯金具や奈良三彩、硯など一般の集落ではあまり出土しない遺物が確認されていることから、官衙や豪族居館などといった見解がある。西別府廃寺の周辺には、古墳時代以降遺跡数が増加し、後期には古墳群が形成される。特筆すべき古墳群として、籠原裏古墳群があげられる。寺院跡の南方に位置し、川原石乱石積の胴張り横穴式石室を有する古墳群であり、7 世紀末の築造と考えられる八角形の墳形をもつ古墳の存在が知られている。また、さらに南には広瀬古墳群があり、その中にある宮塚古墳は上円下方墳という特異な墳形であることが推定されている。墳形の特徴からも 7 世紀末から 8 世紀初頭に築造されたと考えられている。城戸野廃寺においては、寺院を囲むようにして城戸野古墳群が形成されており、そのなかで遺存状況の良い円墳が 2 基確認され、ともに袖無型の横穴式石室であることが判明し、7 世紀中ごろ以降の築造年代が考えられている（増田 1973）。大久保領家廃寺の周辺にはいくつかの古墳群が形成されるが、側ヶ谷古墳群の中にある台耕地稲荷塚古墳は、凝灰岩の切石で構成される胴張りの横穴石室である。この古墳は埴輪を持たず、7 世紀前半の築造と考えられている。梶原廃寺の周辺には、元阿保古墳群や大御堂古墳群など古墳時代後期を中心とした大規模な古墳群が点在している。五明廃寺周辺には遺跡の分布が多く、寺院跡東には 6 世紀中ごろ

ろから 7 世紀後半と考えられる古墳を含む帯刀古墳群がある。

これらの寺院に共通するのは、寺院の周辺に古墳時代後期の古墳群が形成されていたことである。周辺古墳と寺院に直接的関係があるかは不明だが、寺院を建立できるだけの有力氏族がその地に存在していたことは確実といえる。ただし、既に高橋一夫氏によって指摘されているが、7 世紀に胴張りの横穴式石室といった新しい墓制が導入され、畿内から派遣された氏族が古墳を形成している可能性も考えられ、古墳群が継続して存在していても在地勢力によるものとは限らないとしている。よって、在地勢力によるものと畿内から派遣された氏族の建立との 2 形態が存在すると指摘している（高橋 1982）。また、勝呂廃寺と西別府廃寺については、周辺から寺院以外の官衙的要素を含む遺跡が確認されていることから、創建段階では氏寺的要素があったものの、後に郡寺的性格を帯びるようになったのではないかと指摘されている。

【須恵器生産との関わり】

2 つめの須恵器生産との関わりが深いものとして、寺谷廃寺、小用廃寺、馬騎の内廃寺をあげる。寺谷廃寺は有力氏族との関わりとしても取り上げたが、西側に位置する平谷窯跡や南東斜面に位置する羽尾窯跡、東方約 4 km に位置する大谷瓦窯などの生産遺跡との関係も無視できない。同じく比企地域の小用廃寺の周辺には他の寺院と比べあまり遺跡が分布しない。越辺川流域に築造された西戸古墳群と川角古墳群では、胴張りの横穴式石室が確認されており、前者は 7 世紀末（田中 1973）、後者は 7 世紀中葉以降の築造と考えられている（塩野 1980）。寺院跡の周辺には奈良時代以降の集落遺跡も少ないが、遺跡の立地する南比企丘陵は奈良時代から平安時代の須恵器や瓦を焼成した窯跡が集中している。馬騎の内廃寺の周辺は山地のため隣接する遺跡はないが、西方の円良田湖周辺には 6 世紀末から 10 世紀初めにかけての須恵器窯跡が確認された末野窯跡が分布する。荒川北岸の河岸段丘面では、小前田古墳群や寄居古墳群などの後期古墳群が数多く存在しており、小前田古墳群では、末野窯跡産と考えられる須恵器も出土している。

これらの寺院は、須恵器や瓦を焼成した窯跡が周辺にあることが共通する。周辺に古墳などの遺跡が少ないのは、地理的問題も考えられる。末野窯跡は、6 世紀末より須恵器の生産が行われており、朝鮮半島より伝来した新しい技術での須恵器生産の背景には、在地首長層の存在は否定できない。大きな括りとしては先述の有力氏族とのかかわりの中で捉えられるが、特に窯業生産に関わる氏族の存在が想定される寺院として考えた。

【高麗郡建郡との関わり】

3 つ目の高麗郡建郡と関わるものは、女影廃寺である。高麗郡は、霊亀 2（716）年に関東各地に居住していた「高麗人」1,799 人が武蔵国に集められてできた郡である。高麗郡に比定できる地域には、高麗郡設置以前の遺跡がほとんどなく、郡の設置後に遺跡が出現する。女影廃寺の創建年代については先述したとおり、新治廃寺出土瓦との同範関係から 8 世紀第 I 四半期と考えられている。このことから、女影廃寺は高麗郡設置とともに建立された寺院と考えられ、郡寺的性格を持つ寺として位置づけられている（高橋 1987）。創建段階では氏寺的要素を持っていた勝呂廃寺や西別府廃寺と異なり、女影廃寺は創建段階から律令国家的要素を持っていた

などが確認されており、最低3度の葺替えが想定できるとされている（酒井 1982）。これら当時の瓦の年代観から旧盛徳寺の創建年代は上限を8世紀第IV四半期と位置づけられ、現在もこの年代観で考えられている。しかしながら、改めて丸・平瓦について検討したところ、寺院の創建年代が7世紀末まで遡る可能性が出てきた（宮原 2025c）。

（3）旧盛徳寺の瓦と創建年代

旧盛徳寺の瓦は表採資料であるが、さきたま史跡の博物館でも24点所蔵している。今回改めて資料を検討し、平瓦の製作技法に桶巻づくりが含まれることに注目した。平瓦の製作技法は、大きく桶巻づくりと1枚づくりがある。前者は、桶に布をかぶせ、そこに粘土の板（または紐）を巻き付ける。その後、叩き具で形を整え桶から抜く。布を外し乾燥させたら3枚から4枚に分割させ、最後に乾燥させて仕上げる。後者は、細長い湾曲した板で台をつくり、その台に布をかぶせて粘土板を置いて叩く。1枚分の大きさに形を整え、布を外し乾燥させ完成となる。桶巻づくりの場合、桶の側板痕跡や叩き締め円弧がみられることが特徴である。さきたま史跡の博物館所蔵の平瓦は19点あるが、その内7点にこの痕跡が認められ、桶巻きづくりであることが明らかになった。その他の内訳としては、7点が一枚づくり、5点が不明である。また、行田市所蔵の平瓦についてもすべてを確認できていないが、複数の瓦にこの痕跡がみられた。

ここで論点になるのが、地方において、平瓦の製作技法は一般的に国分寺創建前後の8世紀中頃に桶巻づくりから一枚づくりに変わっていくというものである（有吉 2018）。このことから、旧盛徳寺出土の平瓦から検討すると、8世紀前半に瓦の需要が認められることになる。もちろん、桶巻づくりから一枚づくりの変化は一斉に行われるわけではなく、単純に製作技法だけで断言することはできないため、叩きや丸瓦との総合的な検討が必要である。また、須恵器や土師器といった土器類や遺構、軒瓦には奈良時代の要素が現在のところ確認されていないことも確かである。

一方、宮原正樹氏の報告では、7世紀第III四半期と考えられている大谷瓦窯の平瓦に見られる特徴と近似する資料（p.66 第6図1・2、p.67 第7図5）も確認された。さらに、旧盛徳寺の北側に位置する愛宕通遺跡では、旧盛徳寺跡から運ばれたと想定される瓦が出土しているが、その中でも大谷瓦窯と類似する平瓦（p.69 第10図1・2）のほか、凸面斜格子叩きの平瓦が数点確認された（p.69 第10図3・4）。斜格子叩きは寺谷廃寺において最終段階に当たる7世紀第IV四半期の格子13類と同じもので、胎土も近似することから、旧盛徳寺跡は寺谷廃寺と同じ窯から同時期に瓦の供給が認められ、旧盛徳寺跡の創建年代を7世紀第IV四半期から7世紀末まで遡るのではないかと指摘している（宮原 2025c）。以上、これまで軒瓦でしか検討されてこなかった旧盛徳寺の瓦について平瓦の製作技法において、新たな見解が見いだされた。なお、検討の詳細や図面については、本資料集59頁～70頁の宮原正樹氏による紙上報告を参照されたい。

まとめ

北武蔵の寺院造営動向についてみてきたが、高麗郡を除く古代寺院の立地するところの周辺に

は、終末期段階の有力氏族のものと考えられる古墳群が形成されており、それら有力氏族が寺院建立に関わると考えられる。この状況から考えると、埼玉古墳群や若小玉古墳群が形成される埼玉郡に古墳に取ってかわる古代寺院が建立されるのは自然な流れと考える。さらに、これらの古墳群の規模から考えても、その他の寺院と同規模、または凌駕するような古代寺院があっても不思議ではない。それが旧盛徳寺であると断定はできないが、現在のところ埼玉郡で古代寺院は旧盛徳寺しか確認されていない。旧盛徳寺の瓦についての分析はまだ十分とは言えず、製作技法、叩き、生産地、供給関係など総合的に判断する必要がある、埼玉古墳群と旧盛徳寺の関係性は今後検討すべき課題と考える。また、本稿では寺院にのみ焦点を当てたが、山中敏史氏は地方寺院の成立は郡衙の成立と有機的関連があり、律令制国家の地方支配の一環として郡衙とともに成立したと指摘（山中 2005）するように、郡衙との関係性も考える必要があり、今後の課題としたい。

【註】

- （１）ここであげた素弁八葉蓮華文軒丸瓦は、山王廃寺下層建物群に伴うとされる（須田 2012）。
- （２）寺院築造年代については、特段の記載がない限り、昼間 1997 に従った。
- （３）上野国山王廃寺にて複弁七葉蓮華文軒丸瓦が出土しており、馬騎の内廃寺出土の瓦は同系瓦である。

【引用・参考文献】

- 有吉重蔵 2018『古瓦の考古学』ニューサイエンス社
- 諫早直人 2017「飛鳥寺の発掘と塔心礎埋納品－飛鳥寺発掘 60 年－」『飛鳥・藤原京を読み解く 古代国家誕生の軌跡』クバプロ
- 諫早直人 2025「飛鳥寺塔心礎埋納品の考古学」『京都府立大学考古学論集－考古学研究室 30 周年記念－』
- 岡本東三 1996『東国の古代寺院と瓦』吉川弘文館
- 尾崎喜左雄 1966「横穴式古墳の研究」『考古学雑誌』52 巻 1 号 日本考古学会
- 川尻秋生 2025「地方寺院の成立－初期寺院と地方豪族」新古代史の会『歩いて学ぶ日本古代史 2 律令国家の成立と天平の世』吉川弘文館
- 金井塚良一 1975「第 6 章 吉見百穴横穴墓群の歴史的検討 第 3 節 吉見百穴横穴墓群被葬者層の問題」『吉見百穴』吉見町史編纂委員会
- 木津博明 1997「上野国の初期寺院」関東古瓦研究会『関東の初期寺院』
- 行田市教育委員会 2024「八幡山古墳」「旧盛徳寺跡」『行田市史 資料編 考古』
- 熊谷市教育委員会 2004『籠原裏古墳群』
- 熊谷市教育委員会 2013『西別府祭祀遺跡、西別府廃寺、西別府遺跡 総括報告書』
- 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2011『皂樹原・檜下遺跡』
- 酒井清治 1982「行田市 旧盛徳寺」『埼玉県古代寺院跡調査報告書』埼玉県県史編さん室
- 酒井清治 2011「寺谷廃寺・平谷窯跡出土の須恵器と瓦について」『寺谷廃寺・平谷窯跡 I』駒澤大学考古学研究室・滑川町教育委員会
- 酒井清治 2025「埼玉県滑川町寺谷廃寺・平谷窯跡遺物出土状況の覚書」『駒澤考古』第 51 号駒澤大学考古学研究室
- 坂戸市教育委員会 1981『勝呂廃寺－坂戸市勝呂廃寺跡範囲確認調査概報－』
- 坂戸市遺跡発掘調査団 1989『勝呂廃寺－勝呂廃寺 F 地区（西入間警察署勝呂駐屯所）発掘調査報告書－』
- 佐藤信編 2017『古代東国の地方官衙と寺院』株式会社山川出版社
- 塩野博 1980「埼玉の古墳」『埼玉の文化財』埼玉県文化財保護協会

須田勉 2012「山王廃寺と下層遺跡」『山王廃寺～平成 22 年度調査報告書』前橋市教育委員会

高井佳弘 2013「上野国における寺院建立の開始」『古墳から寺院へ～関東の 7 世紀を考える～』

高橋一夫他 1979「埼玉における古代影向の発達（1）Ⅱ馬騎の内廃寺の調査」『埼玉県歴史資料館研究紀要』
第 1 号 埼玉県立歴史資料館

高橋一夫 1982「古代寺院成立の背景と性格」『埼玉県古代寺院跡調査報告書』埼玉県県史編さん室

高橋一夫 1987「北武蔵における古代寺院の成立と展開」『埼玉の考古学』新人物往来社

滝沢匡 2025「上野国 山王廃寺の創建瓦」『シンポジウム坂東の初期寺院－創建瓦の系譜と伝播－』資料集 関
東古瓦研究会・国史学会

塚本敏夫 2020「法興寺塔心礎埋納品が語る古代史」『日本仏教はじまりの寺 元興寺』吉川弘文館

東京大学考古学研究室 1964「埼玉県宮前村の古墳調査」『考古学雑誌』49 巻 4 号 日本考古学会

福田聖ほか 2007「第 5 章 古墳時代の川島」『川島町史 通史編 上巻』川島町

前原豊 2024「総社古墳群と山王廃寺」広瀬和雄編『日本考古学の論点 上』雄山閣

松田猛 2014「山王廃寺は定額寺の放光寺」『山王廃寺－平成 22 年度調査報告－』前橋市教育委員会

右島和夫 1995『東国古墳時代の研究』学生社

三舟隆之 2024『日本古代寺院の成立（オンデマンド版）』吉川弘文館

宮原正樹 2025a「武蔵国 寺谷廃寺の創建瓦」『シンポジウム坂東の初期寺院－創建瓦の系譜と伝播－』資料集
関東古瓦 研究会・国史学会

宮原正樹 2025b「武蔵国 勝呂廃寺の創建瓦」『シンポジウム坂東の初期寺院－創建瓦の系譜と伝播－』資料集
関東古瓦 研究会・国史学会

宮原正樹 2025c「旧盛徳寺跡出土の瓦について」『シンポジウム埼玉古墳群と古代国家成立前夜』資料集 さきたま史
跡の博物館

森郁夫 2012『瓦』法政大学出版社

昼間孝志 1997「武蔵国の初期寺院」関東古瓦研究会『関東の初期寺院』

山中敏史 2005『地方郡衙と寺院－郡衙周辺寺院を中心として－』奈良文化財研究所

渡辺一 1997『町内遺跡Ⅰ－県指定史跡赤沼古代瓦窯跡灰原範囲確認調査報告書－』鳩山町教育委員会

【図版出典】

- 図 1 木津博明 1997「上野国の初期寺院」関東古瓦研究会『関東の初期寺院』p.45・46 を基に作成
- 図 2 前原豊 2024「総社古墳群と山王廃寺」広瀬和雄編『日本考古学の論点 上』雄山閣 p.322 引用
- 図 3 高橋一夫 1982「古代寺院成立の背景と性格」埼玉県県史編さん室『埼玉県古代寺院跡調査報告書』第 106
図を基に作成
- 図 4 拓本は関東古瓦研究会 1997『関東の初期寺院』よりそれぞれ引用して作成
- 図 5 行田市教育委員会 2024『行田市史 資料編 考古』p.484 を基に作成

旧盛徳寺跡出土の瓦について

宮原 正樹

(埼玉県立さきたま史跡の博物館)

はじめに

特別史跡埼玉古墳群の東約 1.3km に位置し、稲荷山古墳の墳頂からも望める旧盛徳寺跡は、近世後期の「新編武蔵風土記」や『忍名所図会』にも記された、埼玉県北部でも数少ない古代の寺院跡である。遺跡は埼玉県の重要遺跡に選定され、現在は行田市内最古の古刹である埼玉山若王院盛徳寺が建つ。本稿では、旧盛徳寺跡の創建年代や寺院の性格について、さきたま史跡の博物館が所蔵する資料、及び発掘調査で出土した資料をもとに考えてみたい。

1 旧盛徳寺跡

旧盛徳寺跡は大宮台地北端縁辺部に立地する。遺跡の南側には下埼玉通南遺跡、北側には下埼玉通北遺跡、愛宕通遺跡、また一帯は小針遺跡にも含まれ、遺跡周辺の台地縁辺から低地にかけて集落が展開する(第1・4図)。遺跡の北西約 400m では「矢作□印」が出土し、小針遺跡における大型総柱建物跡の検出や円面硯の出土などとも併せ、旧盛徳寺跡周辺は古墳時代から平安時代における拠点集落であった可能性が指摘されている(行田市 2022:p.483)。

発掘調査は行田市教育委員会や埼玉県立さきたま資料館(当時)により8地点で行われている(第1図)。建物跡は発見されていないが、溝跡や瓦溜まりが確認され、数十箱の瓦が出土した⁽¹⁾。

古代寺院としての認知は、古くは文化7年(1810)に編纂が始まる「新編武蔵風土記」、その後明治17年(1884)に出版された『新篇武蔵風土記稿』でみられる。このなかで盛徳寺は、大同年間(806～810)創建の根拠はないものの、境内の礎石の存在や古瓦が出土するため古代の寺院と想定されることが述べられている。また、文政8年(1825)に洞李香斎がまとめ、これを天保6年(1835)、同11年(1840)に岩崎長容が増補改訂した『忍名所図会』及び『増補忍名所図会』でも取り上げられた。大同元年の文字瓦が出土した記述とともに、盛徳寺で発見された凸面に縄叩き、斜格子叩きと思われる瓦が描かれている。「新編武蔵風土記」の埼玉県域の調査期間が『忍名所図会』の成立と重なること、また大同年間創建について「新編武蔵風土記」でなしとされた根拠が『忍名所図会』で述べられる点は興味深い。

近世から古代寺院として認知された旧盛徳寺跡は、稲村坦元執筆、昭和6年(1931)刊行の『埼玉県史』でも取り上げられ、瓦の散布範囲や境内の礎石が示された(第2・3図)。稲村は小埼玉沼、埼玉津、延喜式内社前玉神社、そして埼玉村内の複数の古墳の存在は遺跡周辺が早くから発展した証とし、その創建は奈良時代まで遡るとした。昭和29年(1963)の『行田市史』では創建年代は礎石や出土瓦は奈良時代様式よりは退化するとして平安時代初期に比定する。昭和57年(1982)の『埼玉県古代寺院跡調査報告書』では当時の瓦の年代観から上限を8世紀第IV四半期とし、以降の発掘調査報告書や令和4年(2020)の『行田市史』でもこれを踏襲している。ただし、瓦研究の進展で桶巻きづくり平瓦の下限が遡ったこともあって、詳細な分析は行われていないが8世紀前半まで遡る可能性が指摘されている(屋間 2014:p.139-140)。

2 さきたま史跡の博物館所蔵資料

埼玉県立さきたま史跡の博物館に寄贈された資料のなかに、旧盛徳寺跡で個人が採集した瓦がある⁽²⁾。総点数は24点⁽³⁾、丸瓦と平瓦のみで軒瓦はない。いずれも「昭三〇. 三. 二〇 盛徳寺」の墨書きがあり、発掘調査で出土した瓦とも特徴が一致することから、旧盛徳寺跡の瓦としてシンポジウムに合わせて本稿で紹介する。

丸瓦は4点である(第7図1～4)。1は凸面縦方向ナデ調整を施す。胎土はやや粗雑で角閃石、赤色粒を含む。生産地は不明である。2は凸面ナデ調整、凹面は粘土紐の痕跡か模骨痕または側板圧痕かは小破片のためわからないが、何らかの痕跡を消すために縦方向の指ナデを施す。胎土は粗雑で、白色針状物質を含む。生産地は南比企窯跡群である。3は凸面に横方向のナデを施し、製作には粘土板を用いる。胎土は粗雑で黒色粒が多く、小石や赤色粒、角閃石を含む。生産地は不明である。4は厚さ1.0～1.5cmで他の資料より薄い。凸面縄叩き後、縦方向のナデ調整、凹面は指ナデで布の合わせ目を消している。製作は粘土紐を用いる。破片のため断定はできないが凹面には側板圧痕とともとれる二条の痕跡がみられ、側板連結模骨づくりの可能性はある。胎土はやや緻密で白色針状物質を含む。生産地は南比企窯跡群である。

平瓦は19点である(第7図5～14、第8図)。5は凸面格子叩き後にナデ調整、側面はケズリを複数入れて面取りし、丸みを帯びる特徴をもつ。粘土板桶巻きづくりで、側板幅は2.2～2.4cmで他に比べて細い。焼成は不良、胎土は砂質で粗雑、白色粒や発泡したような粒が含まれる。生産地は不明であるが、胎土の特徴から比企丘陵の可能性はある。6も粘土板桶巻きづくりで凸面ナデ調整、側面に削りと横方向のナデを施し丸みを帯びる。凹面の側板圧痕は明瞭でないため幅は不明である。胎土は粗く砂質で、白色粒や赤色粒が多く、角閃石が微量含まれる。生産地は不明である。7は粘土板の合わせ目に当たり厚さ2.6～3.0cmと厚手である。粘土板桶巻きづくり、側板圧痕は不明瞭である。凸面はナデ調整、粘土板合わせ目付近が剥離している。8は粘土板桶巻きづくり、凸面長格子叩き後、無文叩き及び横方向のナデ調整を行う。凹面は縦方向に指ナデが入るがこれは側板圧痕を消すためのものと推測される。胎土はやや粗雑で黒色粒を含み、質量があって非常に重い。生産地は不明。9は粘土板桶巻きづくり、側板幅は3.8cm。凸面は整った斜格子叩きを部分的に残す。側面の削りは3度、凹凸面側も削る。胎土はやや粗雑で赤色粒を多く含む。生産地は不明。10は粘土板一枚づくり、凸面は格子叩きで間隔を空けて列状に残し、側面の削りは2度である。胎土は粗雑、やや砂質で白色針状物質を多く含む。生産地は南比企窯跡群である。11は凸面に丁寧なナデ調整の後、花状の特殊な叩きを用いるものである。報告例から五弁の花を表現したものであろう。第4次や第6次調査で出土例がある(第6図8)。側面はナデを施し丸みを帯びる。表面は黒色で煤けている。製作技法は不明。胎土は砂質で粗雑、軟質の赤色粒が多く、その他白色粒、角閃石を含む。生産地は不明。12は凸面調整に平行叩きを用い、狭端部付近は叩きの角度を変え横ナデで整える。第4次調査の出土例とも叩き方が一致する。凹面も端部周辺は強くナデが行われ、側板圧痕等が観察できず製作技法は不明。胎土はやや緻密で、白色粒と角閃石を微量に含む。生産地は不明。13は粘土板桶巻きづくり、凸面はほぼ一方向の縄叩き、凹面には側板圧痕を明瞭に残す。側板の幅は2.8cm、3.7cm。胎土は良質な粘土を用いた緻密なもので、角閃石が含まれる。生産地は不明。14は粘土板

桶巻きづくり、凸面は縄叩き後、横方向のナデ調整。横ナデは板状の工具で行われているようで、ナデが止まる箇所は粘土が寄せられて段状になる。端部は凹面、凸面にケズリが入る。側板幅は 3.2 cm 一定である。胎土は砂質、粗雑で白色粒が多く、短い白色針状物質を含む。生産地は南比企窯跡群。15 は凸面の縄叩きが円弧上になるため粘土板一枚づくりの可能性がある。ケズリは側面 1 回、端部 2 回。胎土は砂質でやや粗雑、角閃石が含まれる。生産地は不明である。16、17 は凸面に細縄の縄叩きで、厚さが 3.5 cm で厚手のものである。小破片のため製作技法は不明。胎土はやや粗雑で白色粒を多く含む。生産地は不明である。18 は一枚づくり、胎土は赤色粒が微量に含まれるが非常に緻密、かつ焼き上がりも硬質である。焼き歪みが強い。端部付近を横方向にナデ調整する。生産地は不明であるが、胎土が東金子窯跡群前内出窯跡で生産された須恵器に類似する。19 は粘土紐一枚づくり、凸面は斜め一方向の細縄の縄叩きである。粘土紐の幅は約 4 cm、横に配置して成形する。胎土は砂質で粗雑、角閃石を微量に含む。生産地は東金子窯跡群の可能性はある。20、21 は一枚づくり、凸面縄叩きである。素材の粘土形状は不明。胎土は緻密、白色針状物質を含む。生産地はともに南比企窯跡群である。22、23 は粘土紐一枚づくり、凸面は円弧状の縄叩きである。粘土紐の幅は約 3 ～ 4 cm、23 は指ナデで粘土紐の跡を消す。胎土はやや粗雑で、白色針状物質を含む。生産地はともに南比企窯跡群である。

本資料だけでも桶巻きづくりの平瓦が一定量存在し、その生産地も複数にわたる。桶巻きづくりの平瓦は、武蔵国では国分寺創建期の 8 世紀第 II 四半期まで製作されるので、これらが確認できる旧盛徳寺跡では 8 世紀前半に瓦の需要が認められる。また、一枚づくりの平瓦も半数を占め、武蔵国分寺創建期の 8 世紀後半のもの（第 7 図 10）や粘土紐を用いた 9 世紀代のもの（第 8 図 18 ～ 23）の少なくとも 2 時期あって、後者は 9 世紀後半の軒瓦（第 5 図 1 ～ 4）に伴うものであろう。このように旧盛徳寺跡の創建については従来よりも遡ることは確実で、創建後も建物の補修もしくは新設や拡張が推測される。

3 寺院の創建年代と性格

旧盛徳寺跡で確認されている軒瓦は、無絞りの縦置き型一本づくりの単弁四弁蓮華文軒丸瓦と格子文軒平瓦である（第 5 図 1 ～ 4）⁽⁴⁾。単弁四弁蓮華文は上野国から武蔵国北部で 9 世紀後半に広く分布し、軒平瓦の顎の形状や粘土紐一枚づくりといった特徴は軒丸瓦同様の年代観を示す。これまでの旧盛徳寺跡の創建年代についてはこれら軒瓦の年代に拠るものであった。

しかし、平瓦には前項で述べたように桶巻きづくりなど 8 世紀前半の特徴をもつ一群が存在しており、なかでも凸面を格子叩き後に横方向にナデ調整し、側面がケズリを多用して面取りし丸みを帯びる平瓦は注目される（第 6 図 1・2、第 7 図 5）。同様の瓦は旧盛徳寺跡の北側の愛宕通遺跡でも出土している（第 10 図 1・2）。これに伴うとみられる丸瓦も凸面は格子叩き後ナデ調整を行い、側面は凹面凸面側にケズリを施す（第 5 図 7・8）。筆者はこの特徴について東松山市大谷瓦窯跡の平瓦などにみられるもので（第 9 図）、武蔵国内でも古い様相と考えている。

大谷瓦窯跡は焼成部床面に段を設けた窖窯の瓦窯 2 基からなり、細い棒状の子葉をもつ単弁十弁蓮華文軒丸瓦、丸瓦、平瓦、塼を焼成しているが、供給先は明らかになっていない。単弁十弁蓮華文については、大谷瓦窯跡から南西 4.3km に位置する滑川町寺谷廃寺で、類似した単弁蓮華文軒丸

瓦が前述の特徴をもつ平瓦とともに出土する(第11図1・2)。また坂戸市勝呂廃寺の創建瓦生産窯である南比企窯跡群赤沼古代瓦窯跡の単弁十二弁蓮華文も子葉など意匠の共通性などからその系譜上であって、両文様は近い時期に軒丸瓦に採用されたと推定できる。寺谷廃寺の単弁蓮華文は素弁八弁蓮華文軒丸瓦との前後関係及び平谷窯跡の須恵器年代から7世紀第Ⅲ四半期後半、単弁十二弁蓮華文軒丸は灰原で出土する須恵器年代から680年を中心とする7世紀第Ⅳ四半期とされる。これらから単弁十弁蓮華文、すなわち大谷瓦窯跡の年代は7世紀第Ⅲ四半期後半から7世紀第Ⅳ四半期初めまでと考える。このように凸面格子叩き後横方向ナデ調整及び側面にケズリを多用する平瓦については7世紀後半の生産品に位置付けられ、こうした瓦が一定量出土する旧盛徳寺跡の創建もこれに近いものになると考えられる。

なお、大谷瓦窯跡の瓦は長さ43.0～45.9cmでこの時期の瓦では大型のものといえるが、旧盛徳寺跡も平瓦は長さ40.0cm、丸瓦も43.0～45.0cmと大型である(第5図7、第9図2)。こうした瓦の寸法は寺院の屋根の設計で定められた規格と推測され、旧盛徳寺跡の規格は、大谷瓦窯跡生産品のいまだ明らかでない供給先の寺院に近い規格が採用されていたといえよう。

また、愛宕通遺跡では9世紀前半から中葉の竪穴建物跡から、凸面斜格子叩き後未調整の平瓦が数点出土する(第10図3・4)。この斜格子叩きは第1次調査出土瓦と同一の叩きで(第6図4)、さらに滑川町寺谷廃寺出土瓦のうち格子13類と同一の叩きで製品の胎土も近似する。寺谷廃寺の瓦は平谷窯跡で焼成された可能性が高いので、旧盛徳寺跡には寺谷廃寺と同時期に平谷窯跡からの供給が認められる。その年代については平谷窯跡の須恵器の盤の7世紀第Ⅳ四半期とする年代が根拠となるが、発掘調査では瓦と須恵器の焼成の新旧関係が明らかとなっていない。従って年代の幅を広く設定することになるが、瓦が先であったならば7世紀第Ⅳ四半期、後であれば7世紀末ということになる。

以上、平瓦を基に旧盛徳寺跡の創建年代を検討してきた。提示した年代は生産遺跡の年代によるところも大きい。研究途中の現段階では寺谷廃寺と共通する斜格子叩きの平瓦の年代をもとに7世紀第Ⅳ四半期を旧盛徳寺跡の創建期としておきたい。なお、瓦の量からして当初は一堂程度の規模であった可能性が高い。また、7世紀後半とすると評や官衙の成立も影響することも検討しなければならないが、旧盛徳寺跡の周辺は発掘調査例も少なく、埼玉古墳群と同じ台地上で近接するという以外、現状では検討材料に乏しい。ただ、立地は台地の縁辺に当たり地域でも目立つ場所である。7世紀第Ⅳ四半期創建で武蔵国でも古いものの官衙には近接しない勝呂廃寺、8世紀前半創建で官衙に隣接する熊谷市西別府廃寺や深谷市岡廃寺といった他の北武蔵の寺院と選地では共通する。いずれにしても旧盛徳寺跡は、前代から続く拠点的な集落に隣接し、創建後においても南比企窯跡群をはじめ複数の窯の瓦を用いて補修がなされ、9世紀後半以降も存続している。この地域の信仰の対象として整備が行き届いた寺院であったといえよう。

おわりに

旧盛徳寺跡は、創建年代が従来よりも遡る可能性が高くなり、寺谷廃寺及び平谷窯跡との関係が明らかになった。旧盛徳寺跡の瓦についてはシンポジウムでの報告に合わせて調査を実施したが、未報告の資料も多数あり、また時間の制約もあったため継続して調査を行っている。生産窯の特定や全

体の出土傾向提示など今後も調査研究を進め、埼玉古墳群を有する埼玉評・埼玉郡の寺院としての旧盛徳寺跡の全体像を明らかにしたい。

【註】

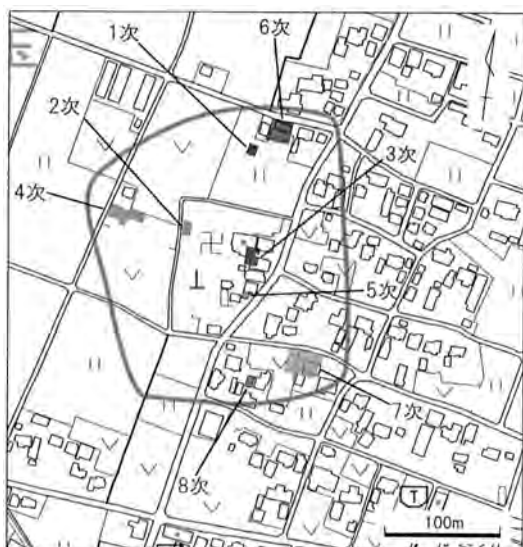
- (1) 本報告に際し、同職宇高美友子学芸員とともに、行田市教育委員会文化財保護課及び行田市郷土博物館の協力を得て関係資料を調査した。発掘調査では第4地点の瓦溜まり以外にも多くの瓦が出土していることを確認した。
- (2) その他にも日本各地の遺跡で採集した瓦や土器などの資料が含まれ、多くに採集場所等の注記がある。
- (3) 第7図7の平瓦2点が接合したため、図化は23点である。
- (4) 第5図4の軒平瓦は長い段頸で、施文も押型であるため時期が異なる可能性がある。第6図6平瓦の格子叩きと比較検討を要する。

【参考文献】

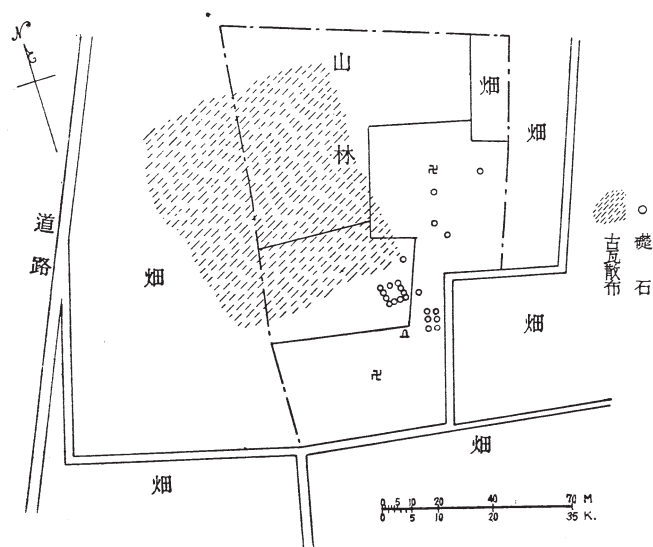
- 稲村担元 1931「第四章仏教 第三節仏教遺跡各説 _ 北埼玉郡埼玉村盛徳寺址」『埼玉縣史』第二卷奈良・平安時代 埼玉県栗原文蔵・金子真土 1977「旧盛徳寺址の発掘調査（第1次調査）」『資料館報』No.8 埼玉県立さきたま資料館
酒井清治 2011「寺谷廃寺・平谷窯跡出土の須恵器と瓦について」『寺谷廃寺・平谷窯跡Ⅰ』駒澤大学考古学研究室・滑川町教育委員会
酒井清治 2025「埼玉県滑川町寺谷廃寺・平谷窯跡遺物出土状況の覚書」『駒澤考古』第51号 駒澤大学考古学研究室
高木豊三郎 1936『史蹟埼玉』
昼間孝志・宮昌之・木戸春夫・赤熊浩一 1988「北武蔵における古瓦の基礎的研究Ⅱ」『研究紀要』第4号 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
昼間孝志・木戸春夫・赤熊浩一 1999「武蔵寺谷廃寺の研究」『研究紀要』第15号 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
昼間孝志 2014「古代瓦葺き寺院の衰退－国分寺創建後の寺院像を瓦から考える－」『研究紀要』第28号 公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
藤島玄治郎 1963「盛徳寺遺跡」山口平八『行田市史』「第9章盛徳寺と、その遺蹟」行田市
宮昌之 1991「東松山市大谷瓦窯跡出土瓦について」『研究紀要』第13号 埼玉県立歴史資料館
宮原正樹 2025「寺谷廃寺の創建瓦」『シンポジウム坂東の初期寺院－創建瓦の系譜と伝播－』資料集 関東古瓦研究会・国史学会
山口平八 1963『行田市史』「第9章 盛徳寺と、その遺蹟」行田市
渡辺一 2006『古代東国の窯業生産の研究』青木書店
行田市 2022『行田市史』資料編考古
行田市教育委員会・栗原文蔵 1975『旧盛徳寺址の発掘調査（第2次調査）』行田市文化財調査報告書第2集
行田市教育委員会 1982「旧盛徳寺址（第3次）」『さきたま古墳群周辺遺跡群発掘調査報告書』行田市文化財調査報告書第13集
行田市教育委員会 1983『旧盛徳寺址周辺遺跡（1次）小敷田遺跡（2次）』行田市文化財報告書第15集
行田市教育委員会 1990「旧盛徳寺址（4次）」『さきたま古墳群周辺遺跡発掘調査報告書』行田市文化財報告書第23集
行田市教育委員会 1991「旧盛徳寺址（5次）」『行田市市内遺跡発掘調査報告書』行田市文化財報告書第24集
行田市教育委員会 1999「旧盛徳寺址確認調査」『市内遺跡確認調査報告書（平成9年度調査）』
行田市郷土博物館 1993『行田市郷土博物館収蔵資料目録』
駒澤大学考古学研究室・滑川町教育委員会 2011『寺谷廃寺・平谷窯跡Ⅰ－飛鳥時代の寺院跡と窯跡の発掘調査報告書－』
埼玉県 1984「旧盛徳寺跡」『新編埼玉県史』資料編3 古代1 奈良・平安
埼玉県史編さん室 1982「8 行田市旧盛徳寺」『埼玉県古代寺院跡調査報告書』
財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1985『愛宕通遺跡』事業団報告書第51集
鳩山町教育委員会 1997『町内遺跡Ⅰ－県指定史跡赤沼古代瓦窯跡灰原範囲確認調査報告書－』

【図版出典】

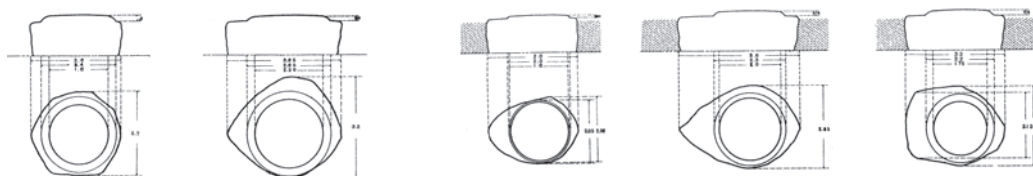
- 第1図 行田市 2022／第2図 稲村 1931／第3図 稲村 1931／第4図 埼玉県立さきたま史跡の博物館提供、行政フライトにて筆者撮影／第5図 1～6 昼間ほか 1988、7・8 栗原ほか 1977／第6図 1・2 行田市教育委員会 1999、3・6～9 行田市教育委員会 1990、4 昼間ほか 1988、5 栗原ほか 1977／第7図 筆者実測、拓本、作成／第8図 筆者実測、拓本、作成／第9図 1・2 宮 1991／第10図 1～4 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1985／第11図 1・2 駒澤大学考古学研究室・滑川町教育委員会 2011、3～5 昼間ほか 1999



第1図 遺跡位置図



第2図 礎石位置・古瓦散布範囲（昭和初期）

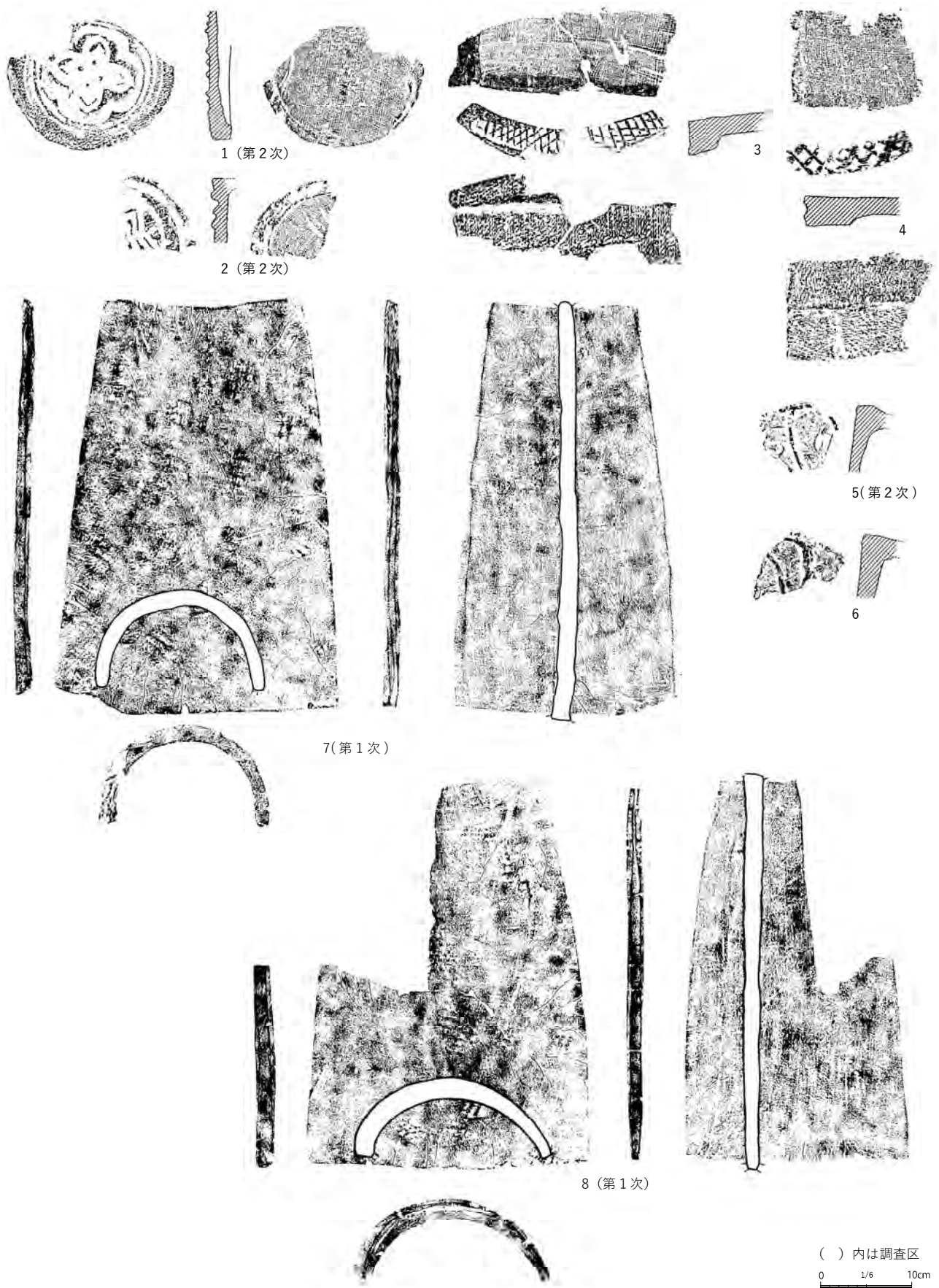


第3図 旧盛徳寺跡礎石実測図

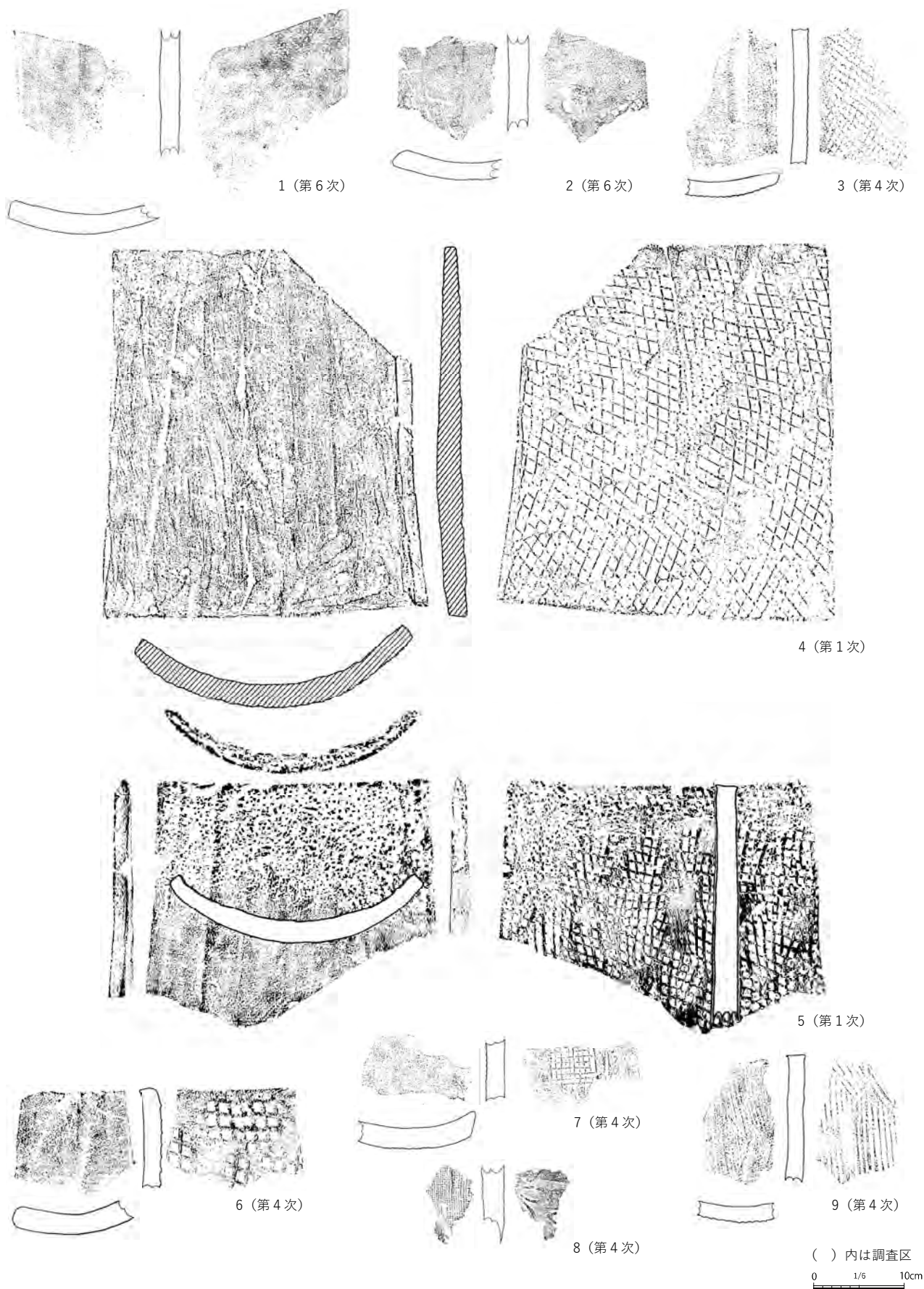


第4図 旧盛徳寺跡

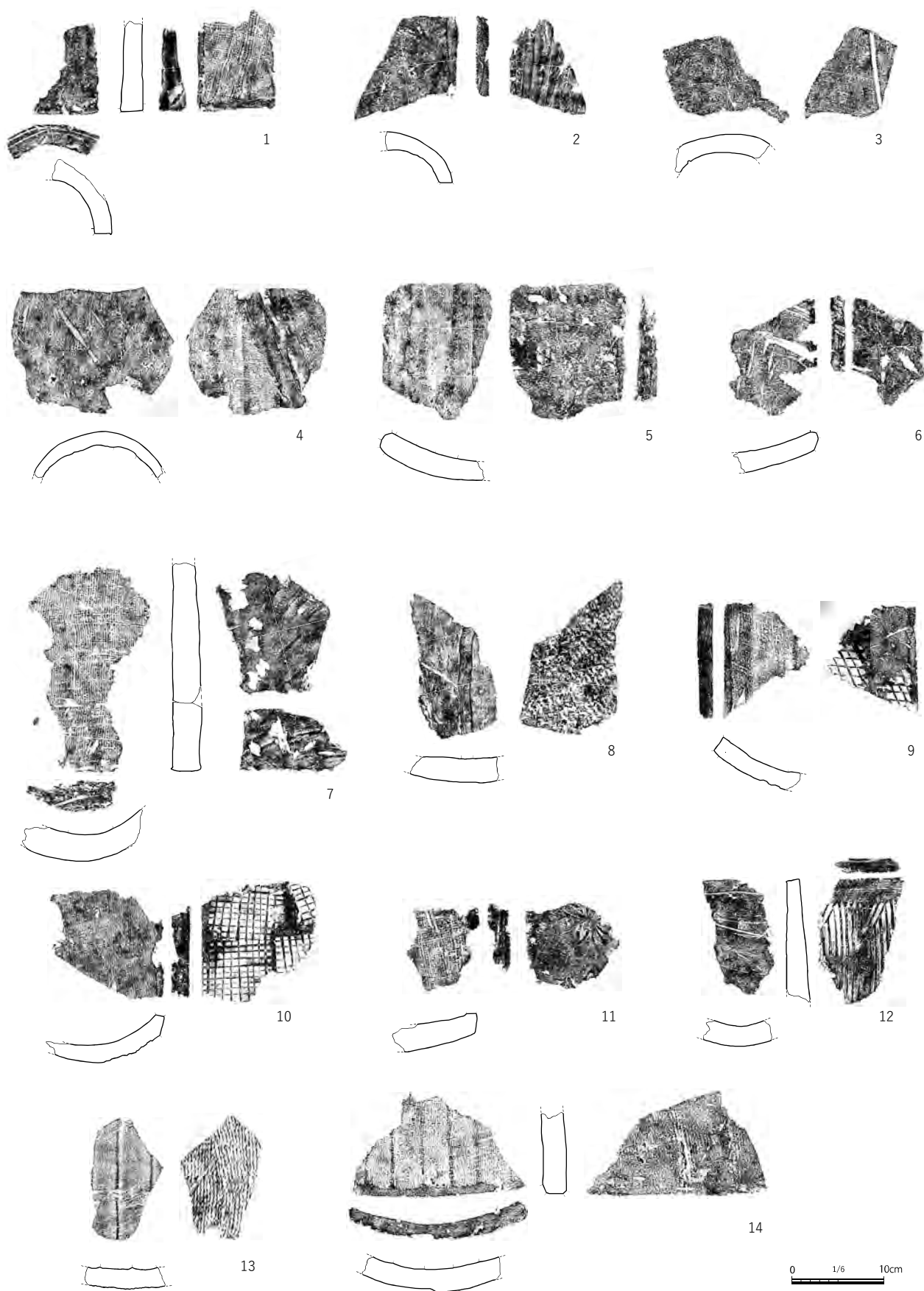
※実線は周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲



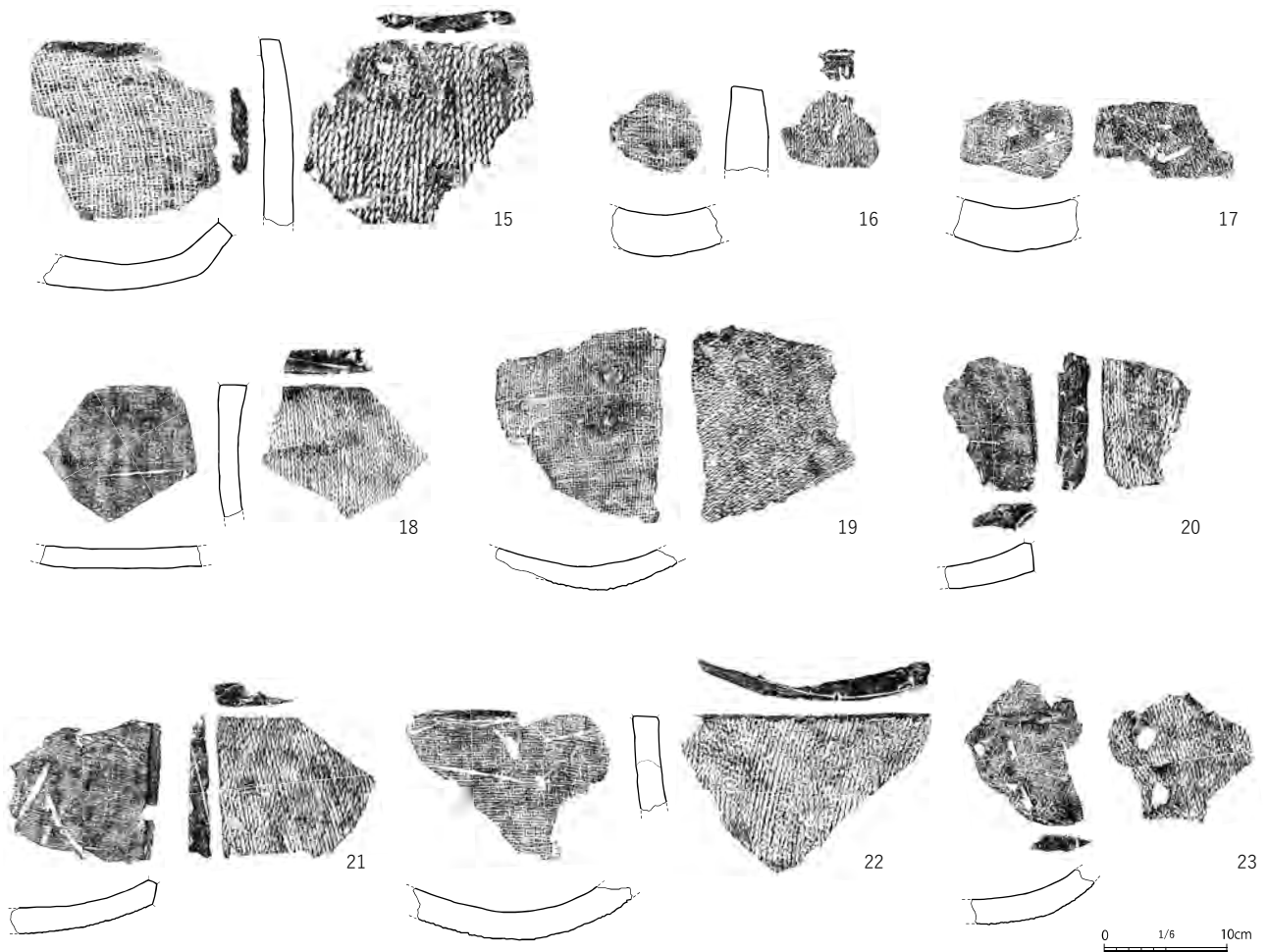
第5図 旧盛徳寺跡出土瓦(1)



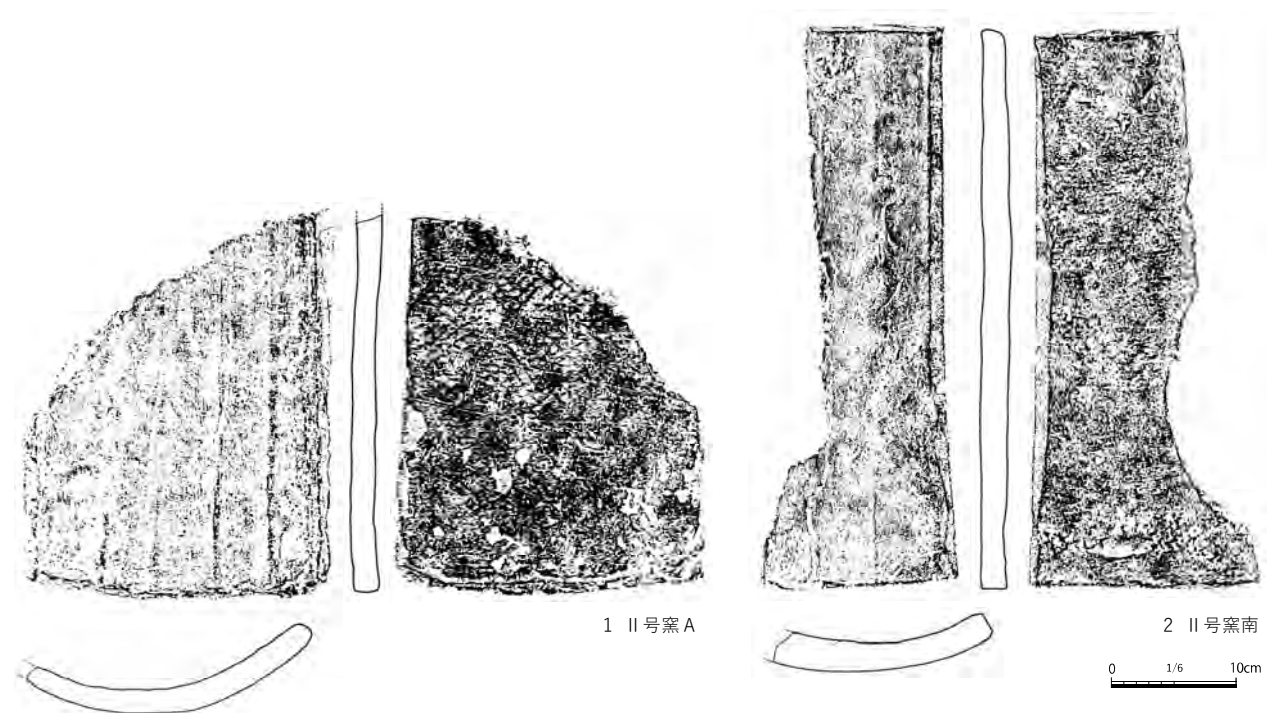
第6図 旧盛徳寺跡出土瓦(2)



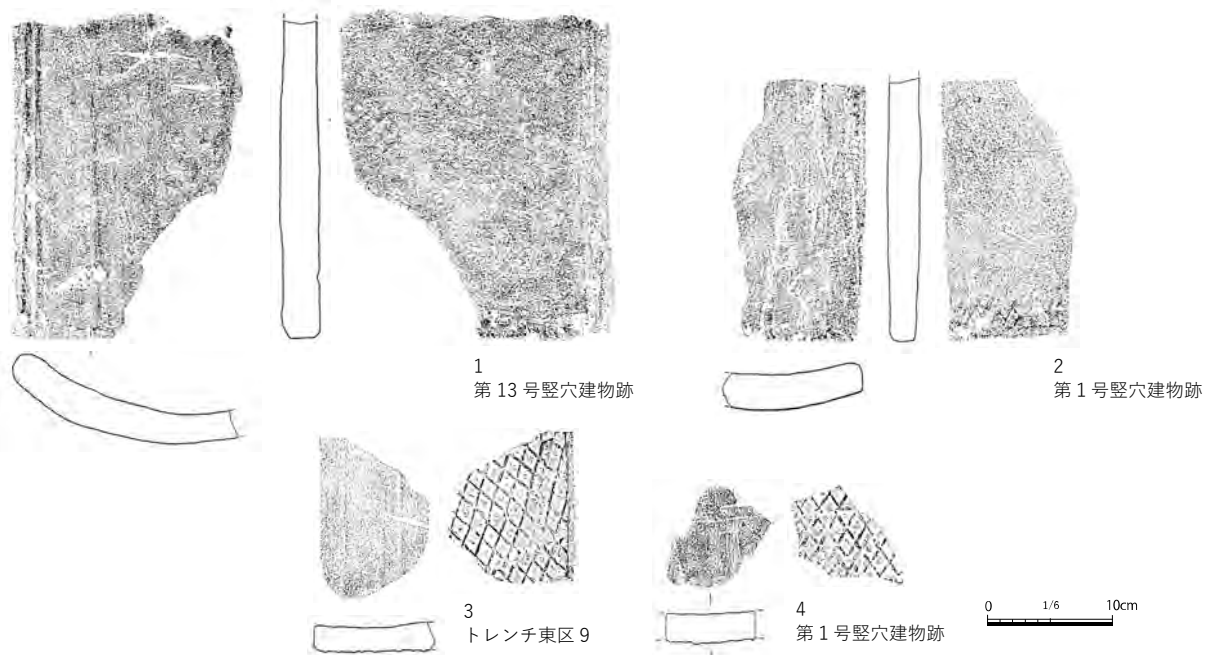
第7図 埼玉県立さきたま史跡の博物館所蔵旧盛徳寺跡採集瓦（1）



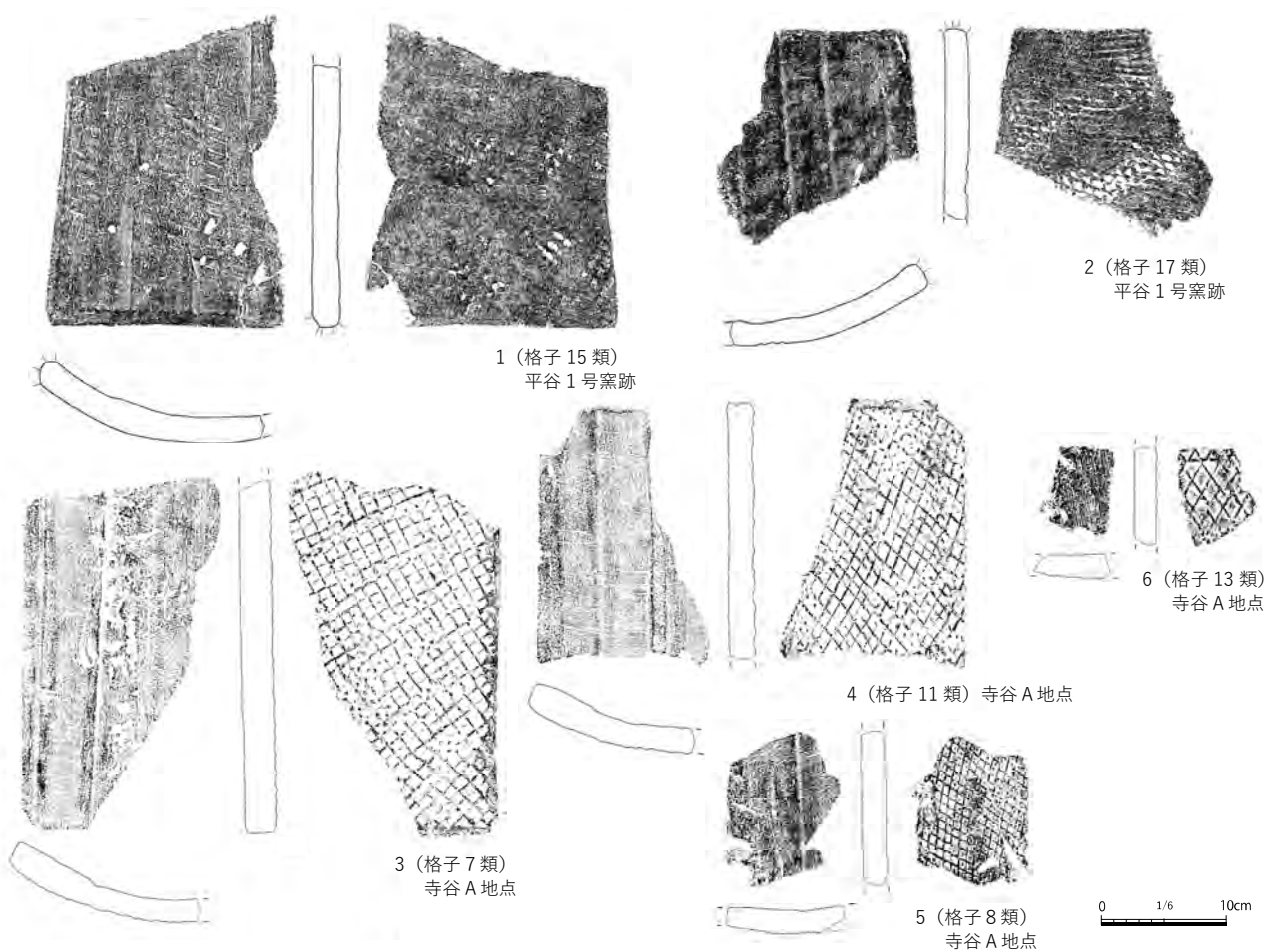
第8図 埼玉県立さきたま史跡の博物館所蔵旧盛徳寺跡採集瓦（2）



第9図 国指定史跡大谷瓦窯跡出土瓦

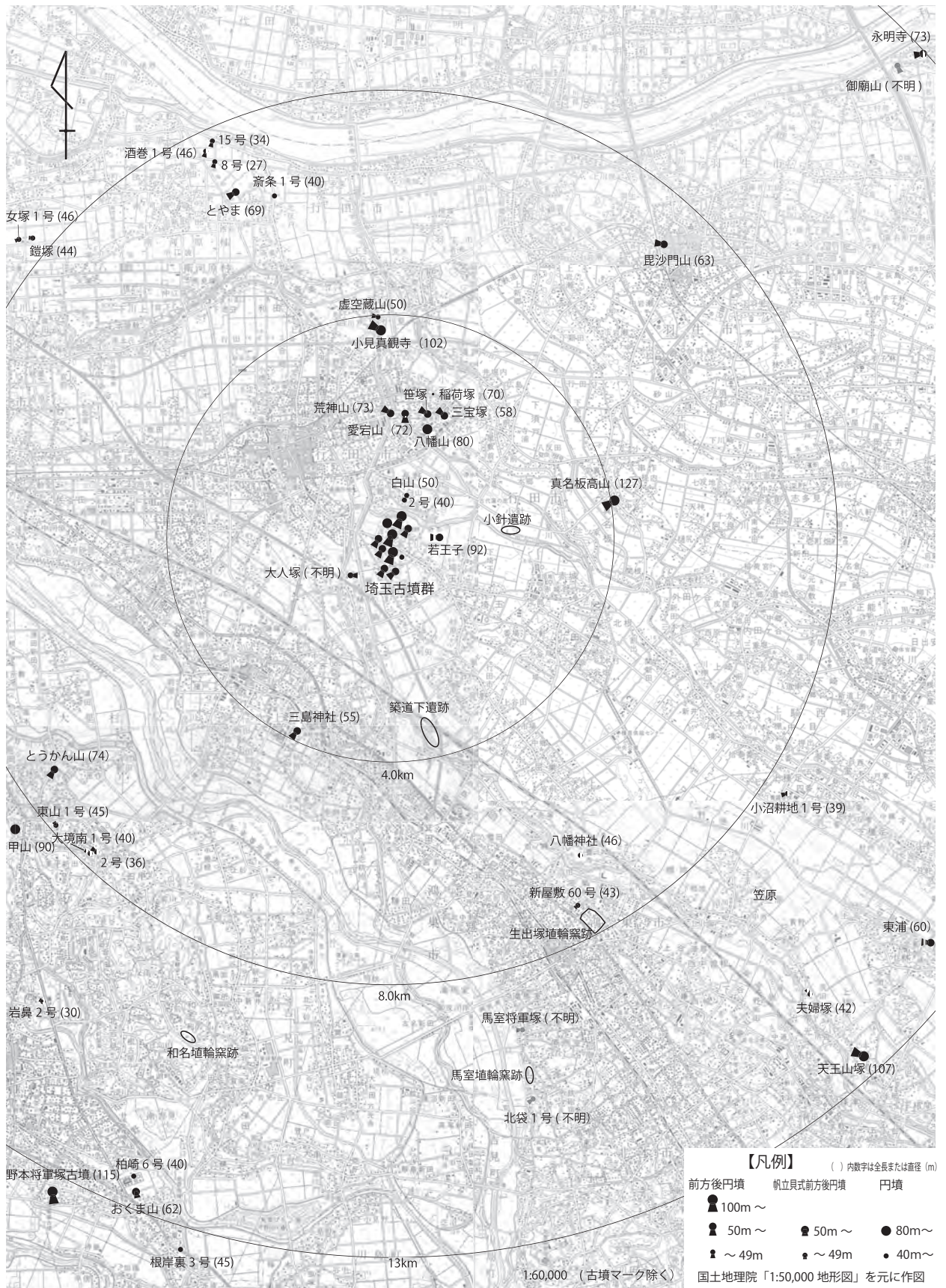


第10図 愛宕通遺跡出土瓦

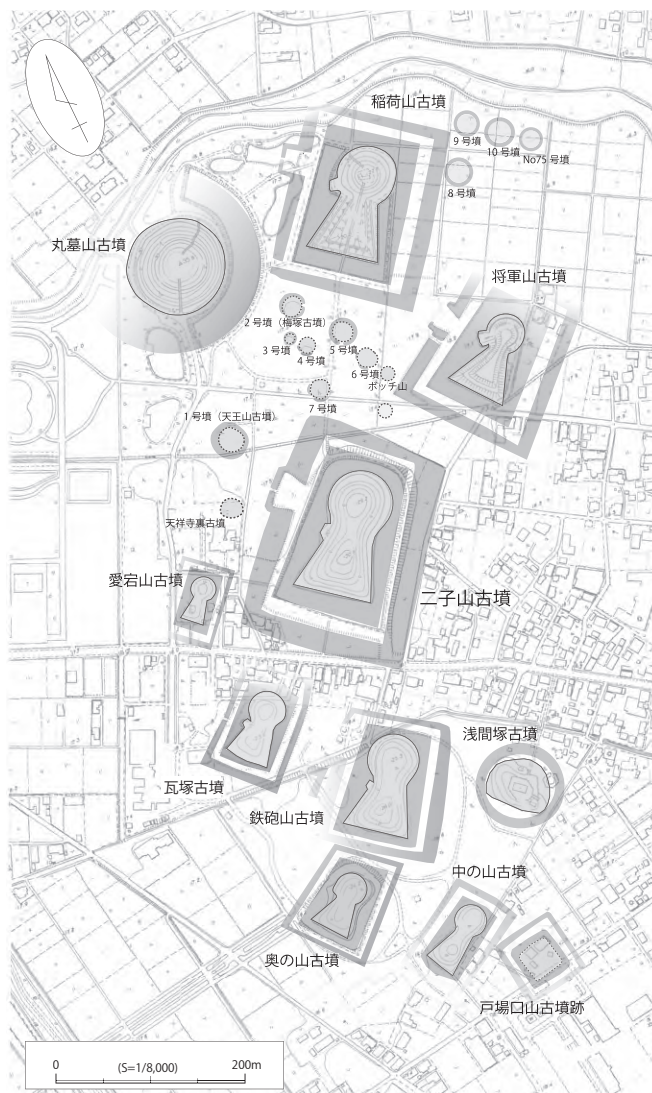


第11図 寺谷廃寺・平谷窯跡出土瓦

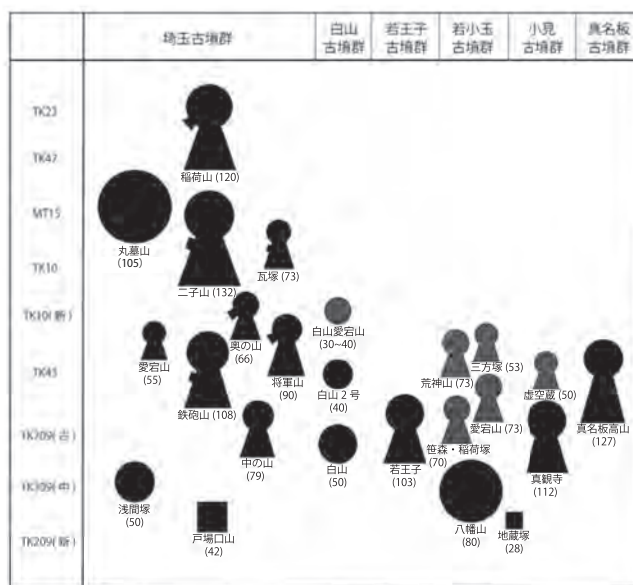
シンポジウム関連資料集



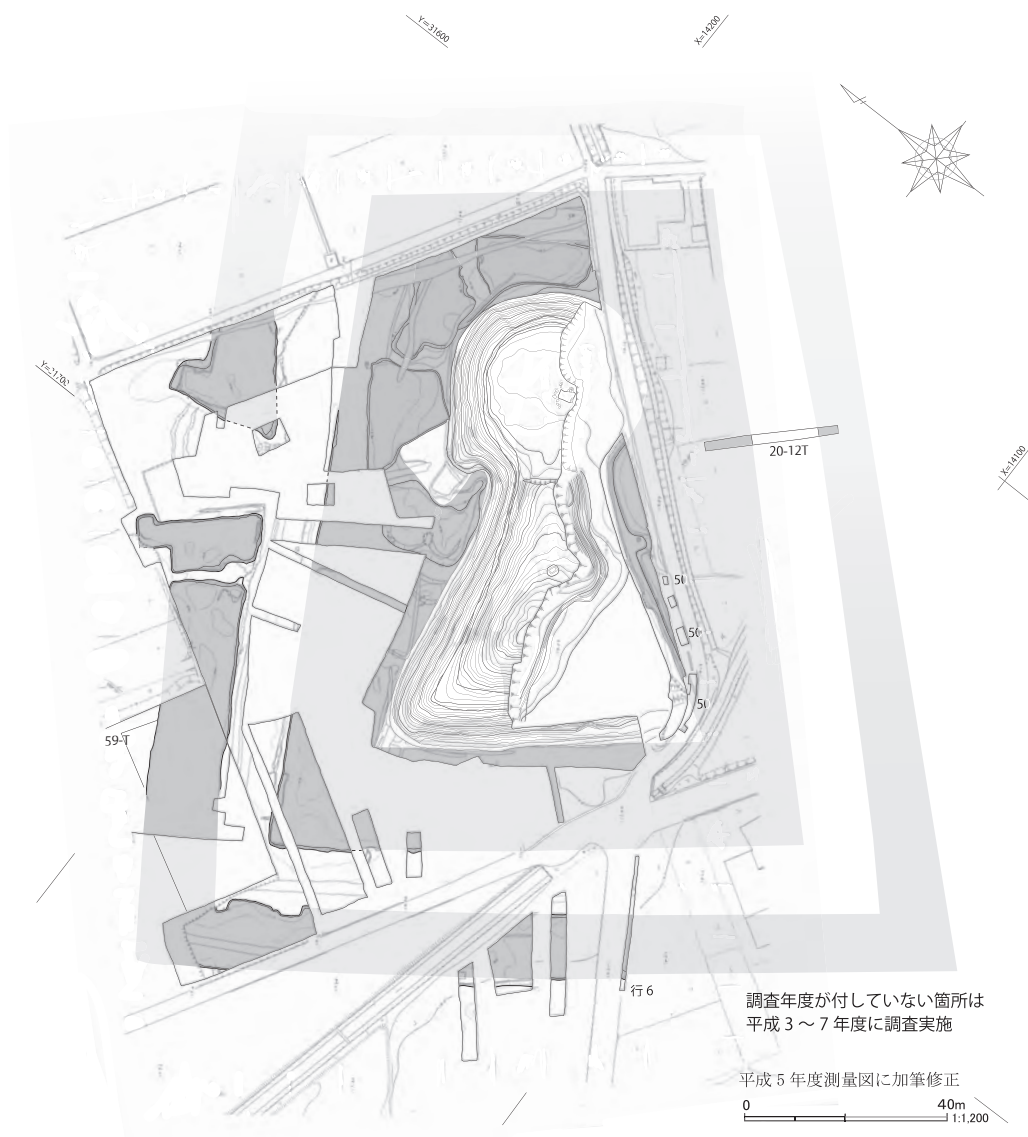
資料 1 埼玉古墳群と周辺の古墳群 (『史跡埼玉古墳群総括報告書 I』より)



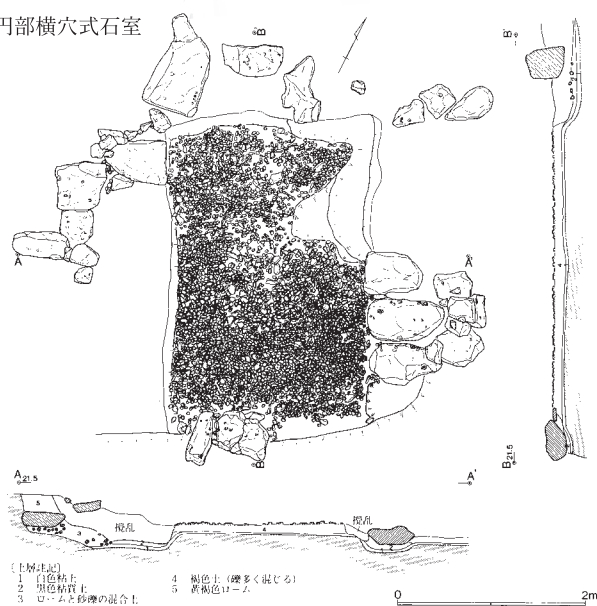
資料2 埼玉古墳群全体図（『特別史跡埼玉古墳群二子山古墳発掘調査報告書』より）



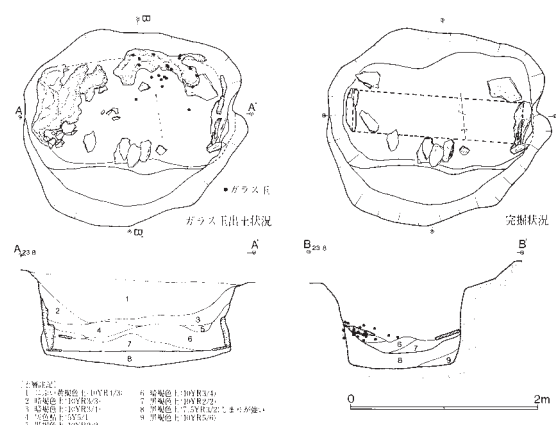
資料3 埼玉古墳群と周辺古墳群の編年（関義則「総括」『史跡埼玉古墳群総括報告書Ⅰ』より一部改変）



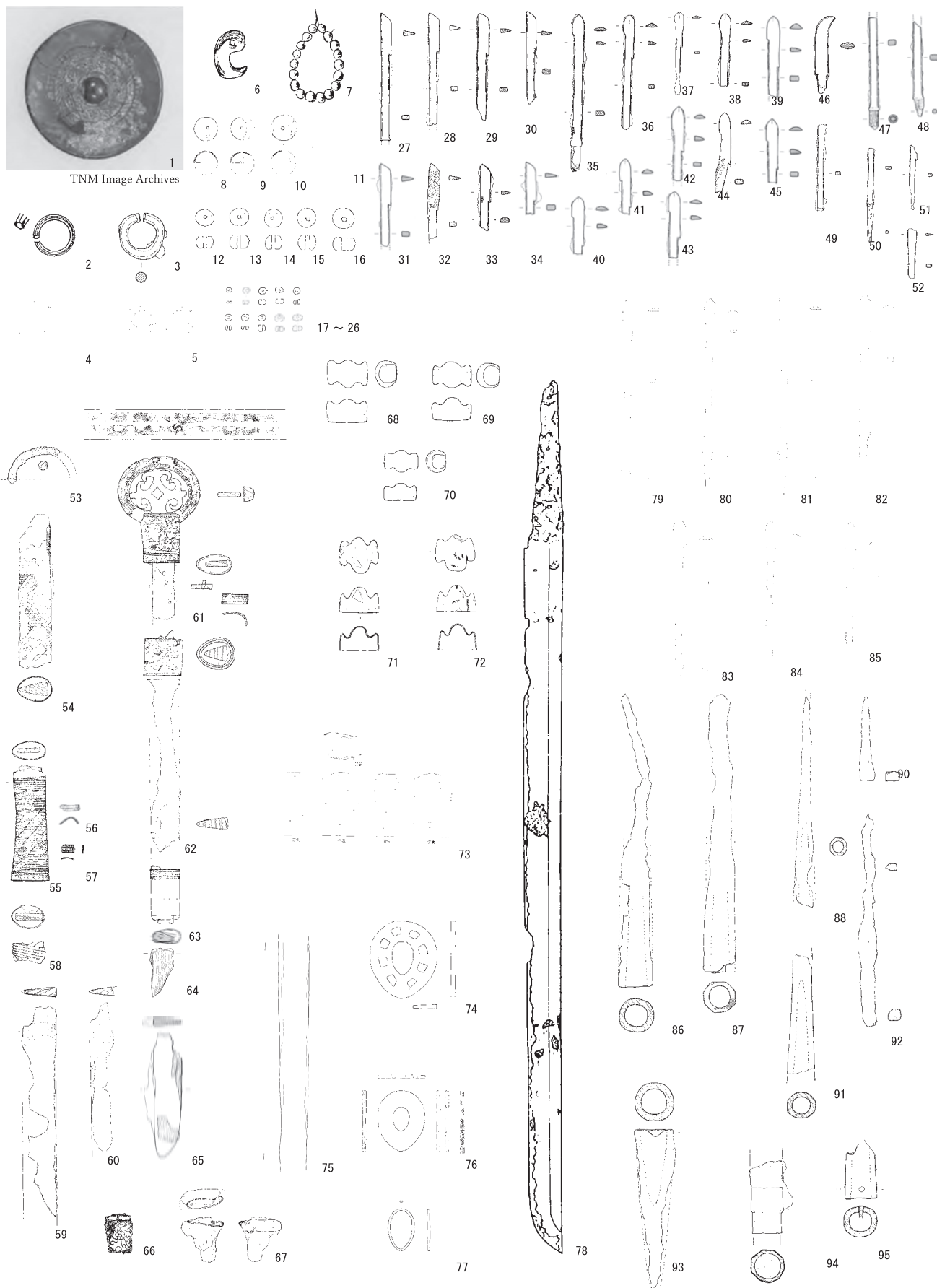
後門部横穴式石室

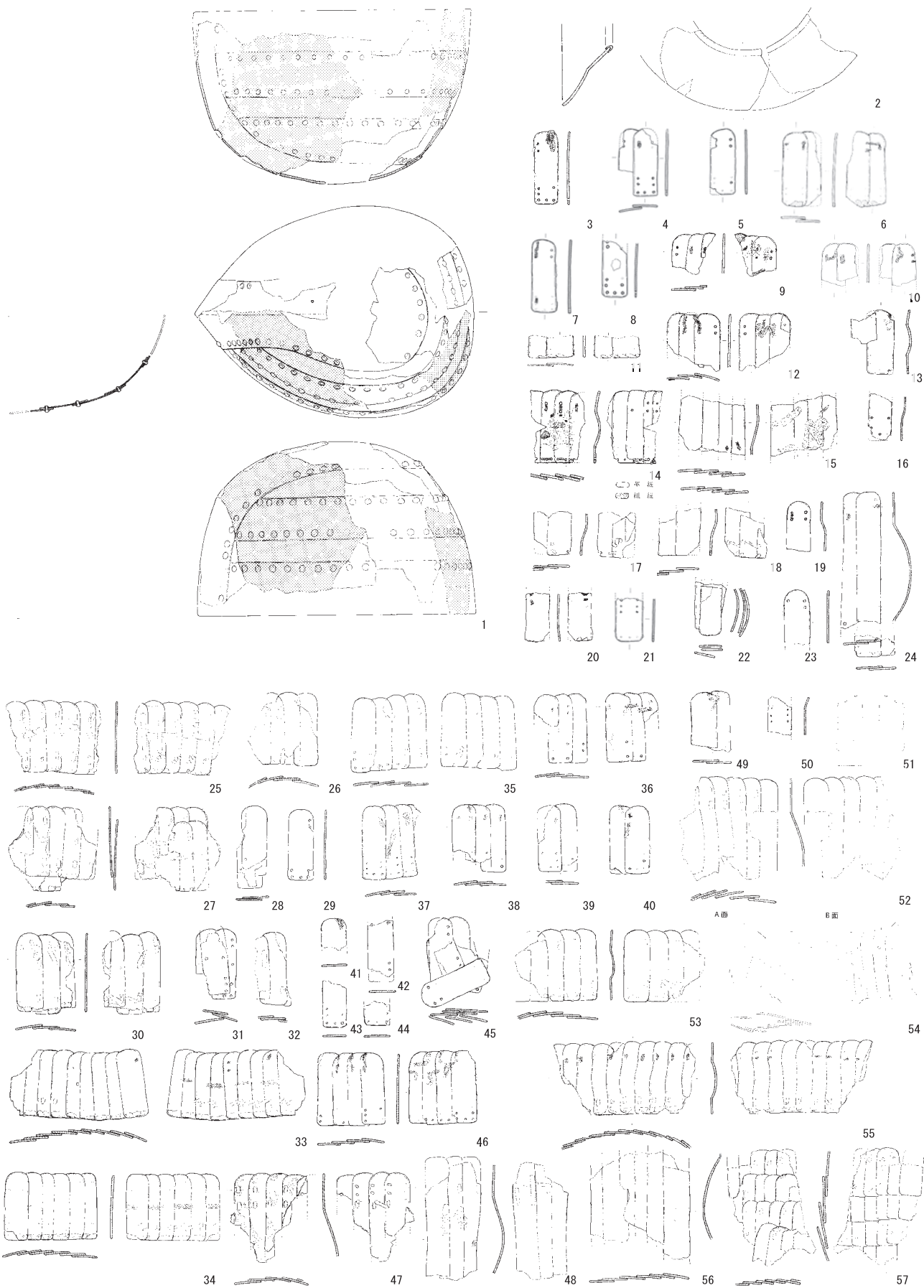


前方部木棺直葬

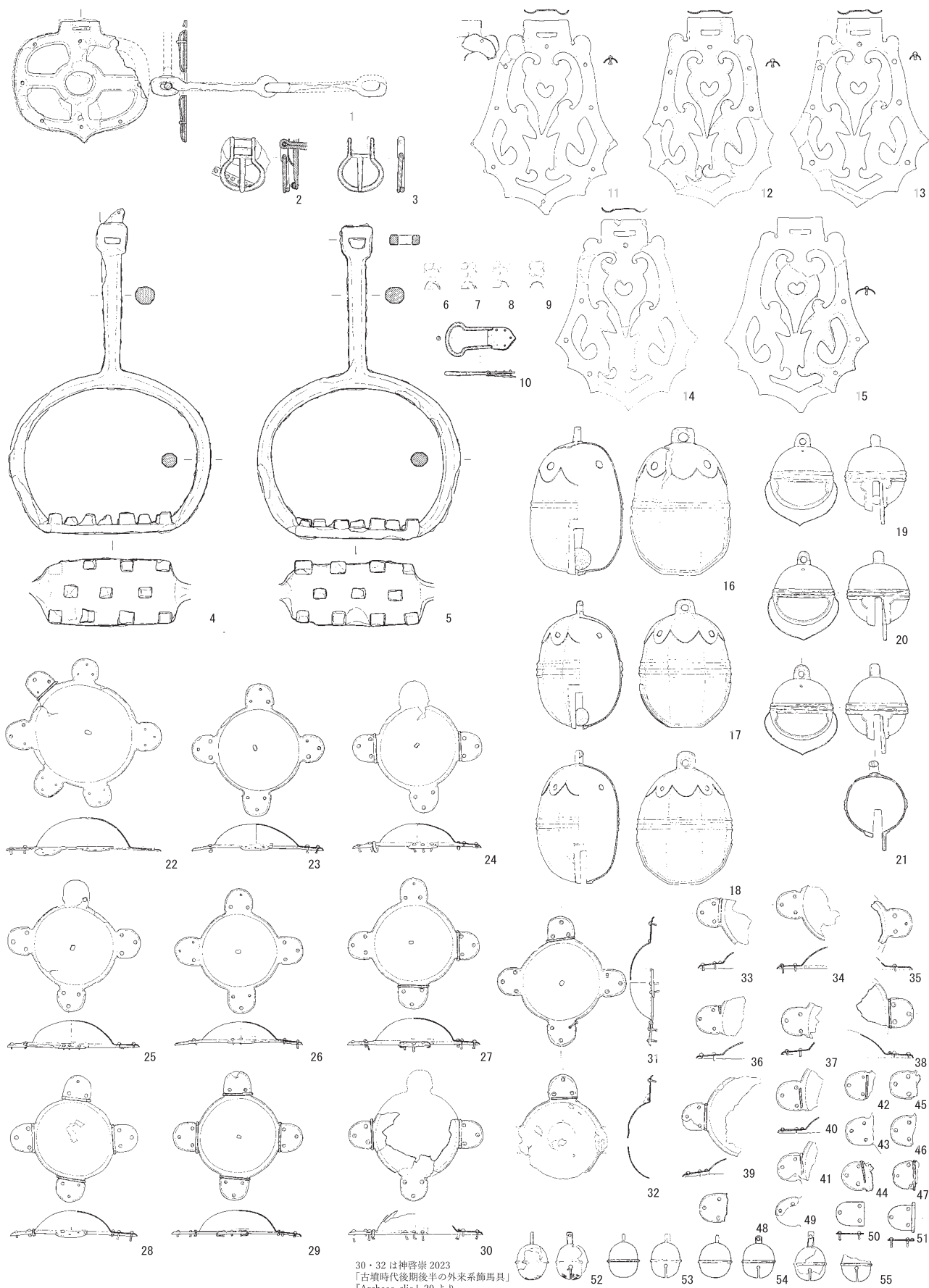


資料4 将軍山古墳の墳丘と埋葬施設（『史跡埼玉古墳群総括報告書Ⅰ』より）

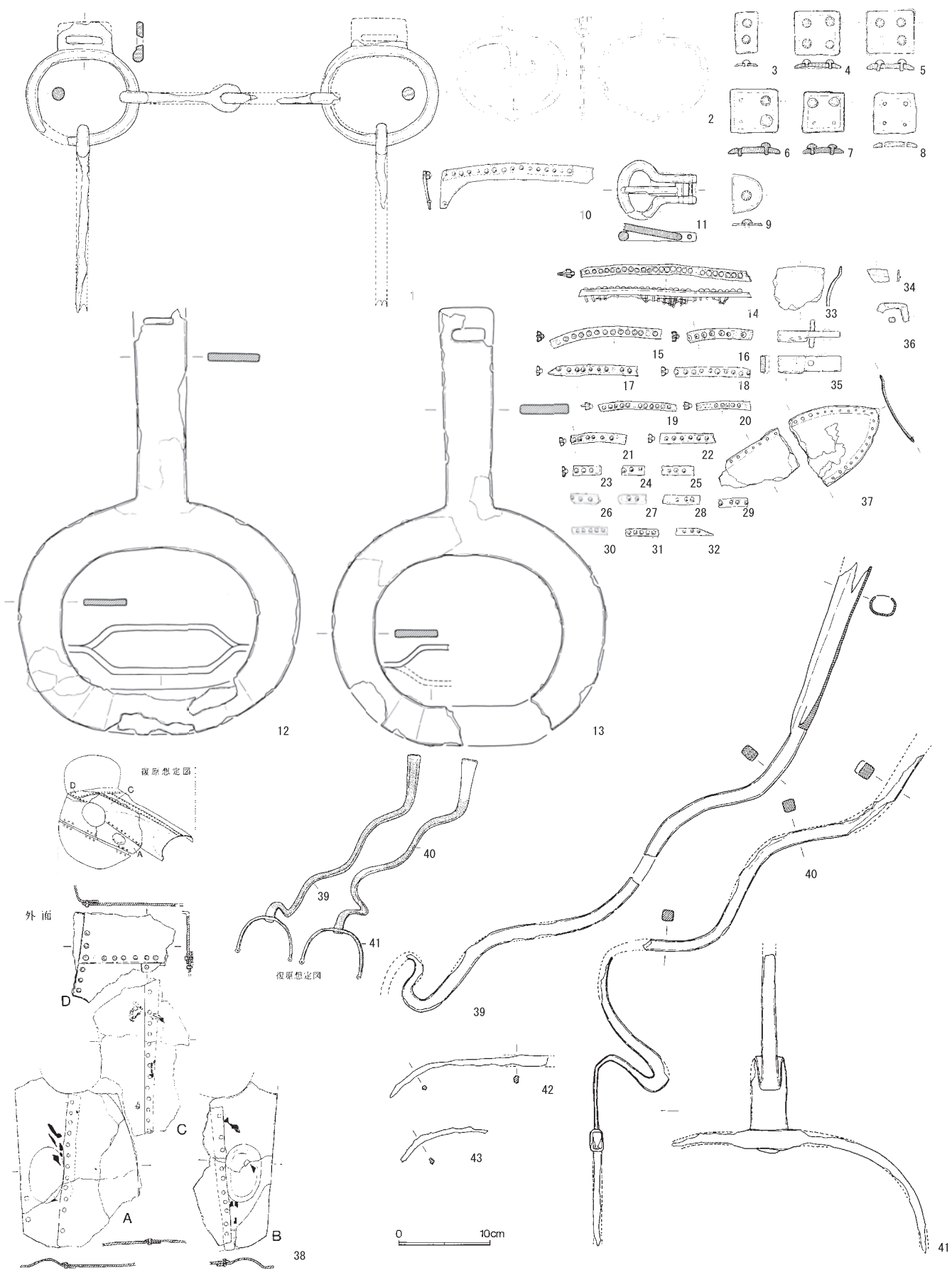




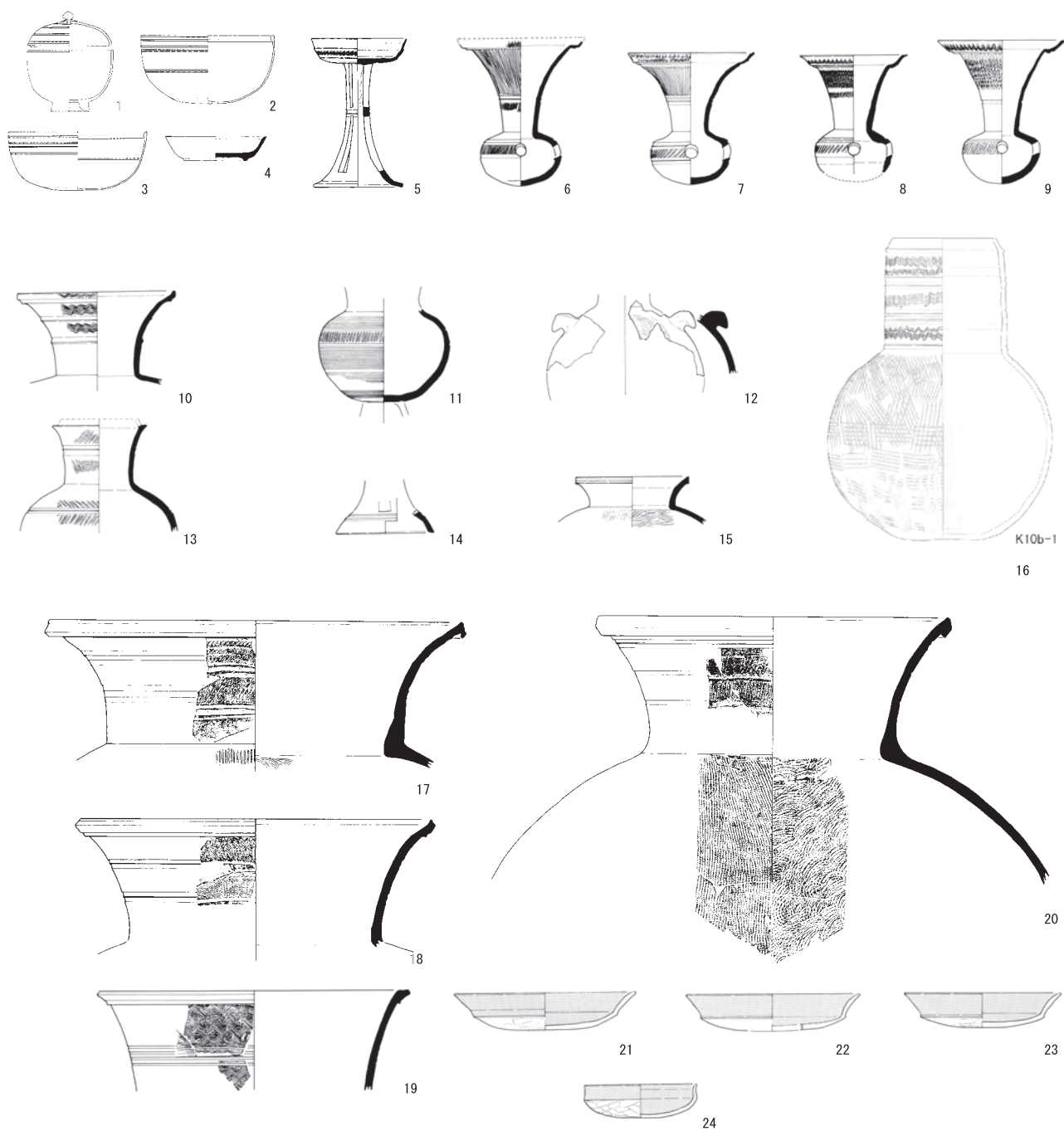
資料6 将軍山古墳横穴式石室の出土資料②(武具) S=1/5



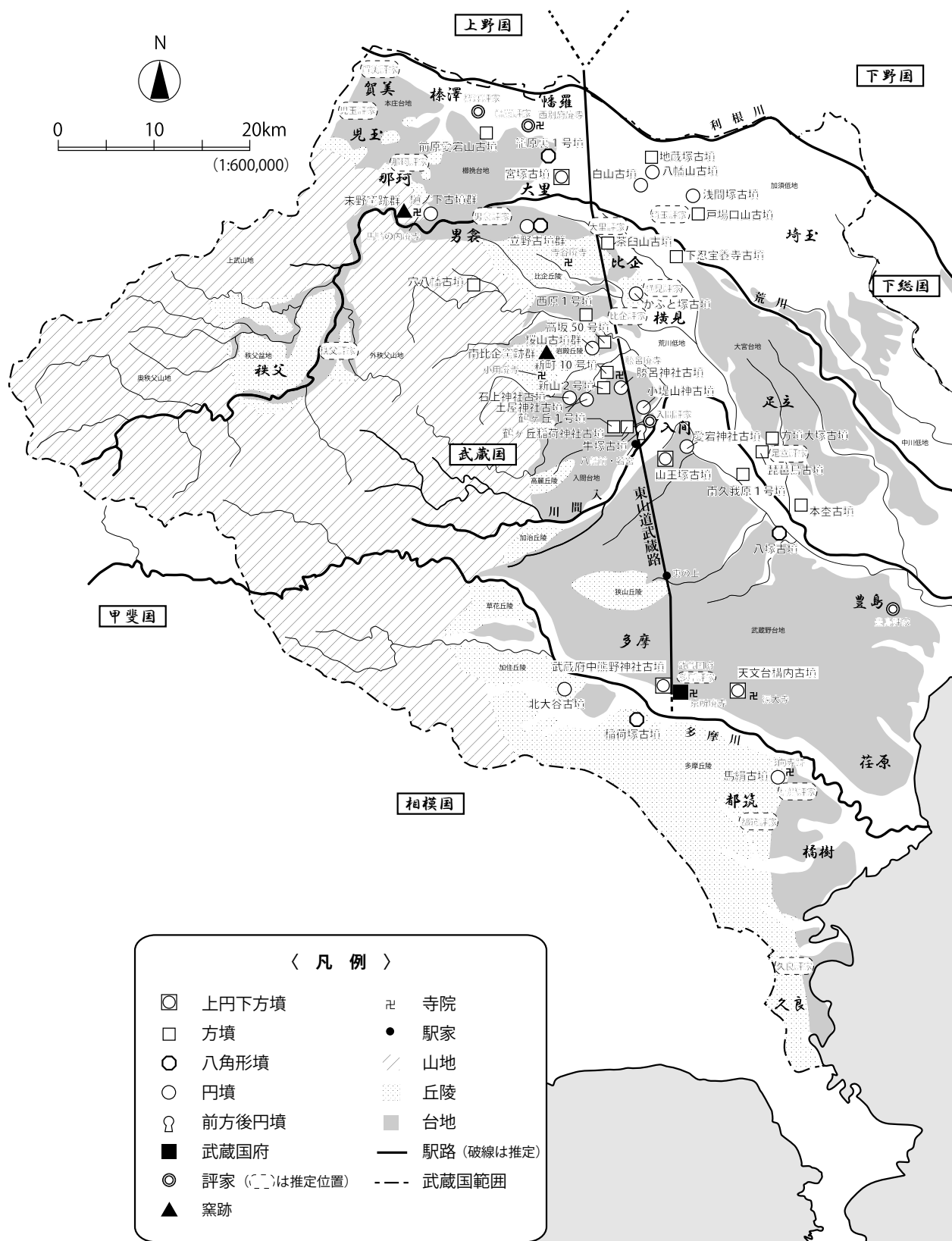
資料 7 将軍山古墳横穴式石室の出土資料③(馬具①) S=1/5



資料8 将軍山古墳横穴式石室の出土資料④(馬具②) 馬胃・蛇行状鉄器を除いて S=1/5



資料 9 將軍山古墳横穴式石室の出土資料⑤(銅鉢・石盤・須恵器・陶質土器・土師器) S=1/4



資料10 7世紀後半の武蔵国の主な古墳・寺院・評家分布図
 (川越市教育委員会2019『山王塚古墳 総括報告書』より転載 (縮尺改変))

西暦	時期 区分	畿内 主要古墳	歴史年表	南武蔵	北埼玉	北足立	入間	比企	大里	児玉			
450	中期	土師ニサンザイ 市野山 軽里大塚 岡ミサンザイ 白髪山	451 倭王済、宋に入貢	● 尾山狐塚	埼玉古墳群 ● 稲荷山 ● とやま ● 新屋敷 60 号	● 入西石塚 ● どうまん塚	● 入西石塚 3 号 ● 諏訪山 33 号	● 横塚山 ● 四十塚 ● 鎧塚 ● 女塚 1 号	● 長沖 14 号 ● 美里諏訪山				
462 倭王興、宋に入貢													
475 百済漢城陥落													
478 倭王武、宋に入貢													
479 済建国			● 狛江亀塚 ● 浅間神社										
493 北魏、洛陽遷都 この頃、倭名山が 一回目の大噴火（FA 降灰）													
503 斯麻、人物画像鏡を作る （隅田八幡神社蔵）			● 摺鉢山	● 終塚									
513 百済、加耶西部侵攻			● 庵谷	● 目沼 9 号									
524 新羅、加耶東南部侵攻				● 一夜塚									
527 磐井の乱													
532 新羅、金官加耶併合 この頃、武蔵国造の乱か	● 観音塚	● 二子山 瓦塚 ● 奥の山											
538 仏教伝わる 百済、泗沘遷都		● 永明寺											
600	後期	白髪山 五条野丸山 （藤ノ木） 太子西山 平田梅山 春日向山 赤坂天王山 （牧野）	この頃、倭名山が 二回目の大噴火（FP 降灰） 551 百済・新羅 漢城奪取 554 百済・新羅 交戦 聖明王政死	● 多摩川台 1 号 ● 愛宕山 ● 將軍山 ● 鉄砲山 ● 中の山	● 愛宕山 ● 將軍山 ● 真名板 相間 高山 天王山塚 ● 若王子 ● 小見真観寺 ● 八幡山 ● 地蔵塚	● ひさご塚 ● 三島神社	● 塚原 1 号 ● 塚原 3 号 ● 胴山 ● 塚原 2 号 ● 牛塚	● 秋葉塚 ● 長塚 ● 大塚 ● 伊勢山 ● 四十坂寅福荷	● 中新里諏訪山 ● 秋山諏訪山 ● 秋山庚申塚 ● お手長山				
562 新羅、大加耶併合													
581 隋、建国 582 隋、長安遷都 587 物部氏滅亡 588 飛鳥寺造営開始 600 隋に遣使													
618 唐、建国			● 稲荷塚 ● 北大谷	● 浅間塚 ● 戸場口山									
626 蘇我馬子死去													
630 第 1 回遣唐使 （633 物部連兄麻呂が国造に任命）													
641 山田寺造営開始 645 乙巳の変 難波長柄堂礎宮遷都													
646 大化の薄葬令 655 飛鳥板蓋宮遷都			● 熊野神社 ● 天文台構内	● 熊野神社 ● 天文台構内									
660 百済滅亡 663 白村江の戦い 667 近江京遷都													
672 壬申の乱 673 飛鳥浄御原宮遷都 676 新羅、朝鮮半島統一 680 東大寺造営開始 685 新羅人を武蔵国に移す 689 飛鳥浄御原令 698 渤海建国 694 藤原京遷都			● 影向寺	● 旧盛徳寺跡									
700	終末期／飛鳥	石のカタ 中尾山 太安万侶墓	701 大宝律令 703 高麗若光が王姓を賜る 708 秩父郡、和銅献上 710 平城京遷都 716 武蔵国に高麗郡をおく 717 郷里制施行 724 聖武天皇即位 729 長屋王の変 741 国分寺建立の詔 749 孝謙天皇即位 750 肖奈福信らが高麗朝臣を賜る	● 多磨寺 （京所廃寺） ● 武蔵国分寺		● 大久保領家廃寺	● 女影廃寺 ● 大寺廃寺	● 宮塚 ● 小用廃寺 ● 馬騎の内廃寺	● 城戸野廃寺 ● 五明廃寺 ● 昌樹原廃寺				
752 東大寺大仏開眼法会 754 安史の乱 756 高麗朝臣福信、武蔵守を兼任 この頃武蔵国分寺の主要建物完成 758 武蔵国に新羅郡をおく													
764 藤原仲麻呂（恵美押勝）の乱 771 武蔵国が東山道より東海道に転属 784 長岡京遷都 789 高麗朝臣福信、武蔵国で没 794 平安京遷都													
800			奈良	石のカタ 中尾山 太安万侶墓	701 大宝律令 703 高麗若光が王姓を賜る 708 秩父郡、和銅献上 710 平城京遷都 716 武蔵国に高麗郡をおく 717 郷里制施行 724 聖武天皇即位 729 長屋王の変 741 国分寺建立の詔 749 孝謙天皇即位 750 肖奈福信らが高麗朝臣を賜る	● 多磨寺 （京所廃寺） ● 武蔵国分寺		● 大久保領家廃寺	● 女影廃寺 ● 大寺廃寺	● 宮塚 ● 小用廃寺 ● 馬騎の内廃寺	● 城戸野廃寺 ● 五明廃寺 ● 昌樹原廃寺		
752 東大寺大仏開眼法会 754 安史の乱 756 高麗朝臣福信、武蔵守を兼任 この頃武蔵国分寺の主要建物完成 758 武蔵国に新羅郡をおく													
764 藤原仲麻呂（恵美押勝）の乱 771 武蔵国が東山道より東海道に転属 784 長岡京遷都 789 高麗朝臣福信、武蔵国で没 794 平安京遷都													
800					奈良	石のカタ 中尾山 太安万侶墓	701 大宝律令 703 高麗若光が王姓を賜る 708 秩父郡、和銅献上 710 平城京遷都 716 武蔵国に高麗郡をおく 717 郷里制施行 724 聖武天皇即位 729 長屋王の変 741 国分寺建立の詔 749 孝謙天皇即位 750 肖奈福信らが高麗朝臣を賜る	● 多磨寺 （京所廃寺） ● 武蔵国分寺		● 大久保領家廃寺	● 女影廃寺 ● 大寺廃寺	● 宮塚 ● 小用廃寺 ● 馬騎の内廃寺	● 城戸野廃寺 ● 五明廃寺 ● 昌樹原廃寺
752 東大寺大仏開眼法会 754 安史の乱 756 高麗朝臣福信、武蔵守を兼任 この頃武蔵国分寺の主要建物完成 758 武蔵国に新羅郡をおく													
764 藤原仲麻呂（恵美押勝）の乱 771 武蔵国が東山道より東海道に転属 784 長岡京遷都 789 高麗朝臣福信、武蔵国で没 794 平安京遷都													
800							奈良	石のカタ 中尾山 太安万侶墓	701 大宝律令 703 高麗若光が王姓を賜る 708 秩父郡、和銅献上 710 平城京遷都 716 武蔵国に高麗郡をおく 717 郷里制施行 724 聖武天皇即位 729 長屋王の変 741 国分寺建立の詔 749 孝謙天皇即位 750 肖奈福信らが高麗朝臣を賜る	● 多磨寺 （京所廃寺） ● 武蔵国分寺		● 大久保領家廃寺	● 女影廃寺 ● 大寺廃寺
752 東大寺大仏開眼法会 754 安史の乱 756 高麗朝臣福信、武蔵守を兼任 この頃武蔵国分寺の主要建物完成 758 武蔵国に新羅郡をおく													
764 藤原仲麻呂（恵美押勝）の乱 771 武蔵国が東山道より東海道に転属 784 長岡京遷都 789 高麗朝臣福信、武蔵国で没 794 平安京遷都													
800	奈良	石のカタ 中尾山 太安万侶墓							701 大宝律令 703 高麗若光が王姓を賜る 708 秩父郡、和銅献上 710 平城京遷都 716 武蔵国に高麗郡をおく 717 郷里制施行 724 聖武天皇即位 729 長屋王の変 741 国分寺建立の詔 749 孝謙天皇即位 750 肖奈福信らが高麗朝臣を賜る	● 多磨寺 （京所廃寺） ● 武蔵国分寺		● 大久保領家廃寺	● 女影廃寺 ● 大寺廃寺
752 東大寺大仏開眼法会 754 安史の乱 756 高麗朝臣福信、武蔵守を兼任 この頃武蔵国分寺の主要建物完成 758 武蔵国に新羅郡をおく													
764 藤原仲麻呂（恵美押勝）の乱 771 武蔵国が東山道より東海道に転属 784 長岡京遷都 789 高麗朝臣福信、武蔵国で没 794 平安京遷都													
800			奈良	石のカタ 中尾山 太安万侶墓					701 大宝律令 703 高麗若光が王姓を賜る 708 秩父郡、和銅献上 710 平城京遷都 716 武蔵国に高麗郡をおく 717 郷里制施行 724 聖武天皇即位 729 長屋王の変 741 国分寺建立の詔 749 孝謙天皇即位 750 肖奈福信らが高麗朝臣を賜る	● 多磨寺 （京所廃寺） ● 武蔵国分寺		● 大久保領家廃寺	● 女影廃寺 ● 大寺廃寺
752 東大寺大仏開眼法会 754 安史の乱 756 高麗朝臣福信、武蔵守を兼任 この頃武蔵国分寺の主要建物完成 758 武蔵国に新羅郡をおく													
764 藤原仲麻呂（恵美押勝）の乱 771 武蔵国が東山道より東海道に転属 784 長岡京遷都 789 高麗朝臣福信、武蔵国で没 794 平安京遷都													
800					奈良	石のカタ 中尾山 太安万侶墓			701 大宝律令 703 高麗若光が王姓を賜る 708 秩父郡、和銅献上 710 平城京遷都 716 武蔵国に高麗郡をおく 717 郷里制施行 724 聖武天皇即位 729 長屋王の変 741 国分寺建立の詔 749 孝謙天皇即位 750 肖奈福信らが高麗朝臣を賜る	● 多磨寺 （京所廃寺） ● 武蔵国分寺		● 大久保領家廃寺	● 女影廃寺 ● 大寺廃寺
752 東大寺大仏開眼法会 754 安史の乱 756 高麗朝臣福信、武蔵守を兼任 この頃武蔵国分寺の主要建物完成 758 武蔵国に新羅郡をおく													
764 藤原仲麻呂（恵美押勝）の乱 771 武蔵国が東山道より東海道に転属 784 長岡京遷都 789 高麗朝臣福信、武蔵国で没 794 平安京遷都													
800							奈良	石のカタ 中尾山 太安万侶墓	701 大宝律令 703 高麗若光が王姓を賜る 708 秩父郡、和銅献上 710 平城京遷都 716 武蔵国に高麗郡をおく 717 郷里制施行 724 聖武天皇即位 729 長屋王の変 741 国分寺建立の詔 749 孝謙天皇即位 750 肖奈福信らが高麗朝臣を賜る	● 多磨寺 （京所廃寺） ● 武蔵国分寺		● 大久保領家廃寺	● 女影廃寺 ● 大寺廃寺
752 東大寺大仏開眼法会 754 安史の乱 756 高麗朝臣福信、武蔵守を兼任 この頃武蔵国分寺の主要建物完成 758 武蔵国に新羅郡をおく													
764 藤原仲麻呂（恵美押勝）の乱 771 武蔵国が東山道より東海道に転属 784 長岡京遷都 789 高麗朝臣福信、武蔵国で没 794 平安京遷都													
800	奈良	石のカタ 中尾山 太安万侶墓							701 大宝律令 703 高麗若光が王姓を賜る 708 秩父郡、和銅献上 710 平城京遷都 716 武蔵国に高麗郡をおく 717 郷里制施行 724 聖武天皇即位 729 長屋王の変 741 国分寺建立の詔 749 孝謙天皇即位 750 肖奈福信らが高麗朝臣を賜る	● 多磨寺 （京所廃寺） ● 武蔵国分寺		● 大久保領家廃寺	● 女影廃寺 ● 大寺廃寺
752 東大寺大仏開眼法会 754 安史の乱 756 高麗朝臣福信、武蔵守を兼任 この頃武蔵国分寺の主要建物完成 758 武蔵国に新羅郡をおく													
764 藤原仲麻呂（恵美押勝）の乱 771 武蔵国が東山道より東海道に転属 784 長岡京遷都 789 高麗朝臣福信、武蔵国で没 794 平安京遷都													
800			奈良	石のカタ 中尾山 太安万侶墓					701 大宝律令 703 高麗若光が王姓を賜る 708 秩父郡、和銅献上 710 平城京遷都 716 武蔵国に高麗郡をおく 717 郷里制施行 724 聖武天皇即位 729 長屋王の変 741 国分寺建立の詔 749 孝謙天皇即位 750 肖奈福信らが高麗朝臣を賜る	● 多磨寺 （京所廃寺） ● 武蔵国分寺		● 大久保領家廃寺	● 女影廃寺 ● 大寺廃寺
752 東大寺大仏開眼法会 754 安史の乱 756 高麗朝臣福信、武蔵守を兼任 この頃武蔵国分寺の主要建物完成 758 武蔵国に新羅郡をおく													
764 藤原仲麻呂（恵美押勝）の乱 771 武蔵国が東山道より東海道に転属 784 長岡京遷都 789 高麗朝臣福信、武蔵国で没 794 平安京遷都													
800					奈良	石のカタ 中尾山 太安万侶墓			701 大宝律令 703 高麗若光が王姓を賜る 708 秩父郡、和銅献上 710 平城京遷都 716 武蔵国に高麗郡をおく 717 郷里制施行 724 聖武天皇即位 729 長屋王の変 741 国分寺建立の詔 749 孝謙天皇即位 750 肖奈福信らが高麗朝臣を賜る	● 多磨寺 （京所廃寺） ● 武蔵国分寺		● 大久保領家廃寺	● 女影廃寺 ● 大寺廃寺
752 東大寺大仏開眼法会 754 安史の乱 756 高麗朝臣福信、武蔵守を兼任 この頃武蔵国分寺の主要建物完成 758 武蔵国に新羅郡をおく													
764 藤原仲麻呂（恵美押勝）の乱 771 武蔵国が東山道より東海道に転属 784 長岡京遷都 789 高麗朝臣福信、武蔵国で没 794 平安京遷都													
800							奈良	石のカタ 中尾山 太安万侶墓	701 大宝律令 703 高麗若光が王姓を賜る 708 秩父郡、和銅献上 710 平城京遷都 716 武蔵国に高麗郡をおく 717 郷里制施行 724 聖武天皇即位 729 長屋王の変 741 国分寺建立の詔 749 孝謙天皇即位 750 肖奈福信らが高麗朝臣を賜る	● 多磨寺 （京所廃寺） ● 武蔵国分寺		● 大久保領家廃寺	● 女影廃寺 ● 大寺廃寺
752 東大寺大仏開眼法会 754 安史の乱 756 高麗朝臣福信、武蔵守を兼任 この頃武蔵国分寺の主要建物完成 758 武蔵国に新羅郡をおく													
764 藤原仲麻呂（恵美押勝）の乱 771 武蔵国が東山道より東海道に転属 784 長岡京遷都 789 高麗朝臣福信、武蔵国で没 794 平安京遷都													
800	奈良	石のカタ 中尾山 太安万侶墓							701 大宝律令 703 高麗若光が王姓を賜る 708 秩父郡、和銅献上 710 平城京遷都 716 武蔵国に高麗郡をおく 717 郷里制施行 724 聖武天皇即位 729 長屋王の変 741 国分寺建立の詔 749 孝謙天皇即位 750 肖奈福信らが高麗朝臣を賜る	● 多磨寺 （京所廃寺） ● 武蔵国分寺		● 大久保領家廃寺	● 女影廃寺 ● 大寺廃寺
752 東大寺大仏開眼法会 754 安史の乱 756 高麗朝臣福信、武蔵守を兼任 この頃武蔵国分寺の主要建物完成 758 武蔵国に新羅郡をおく													
764 藤原仲麻呂（恵美押勝）の乱 771 武蔵国が東山道より東海道に転属 784 長岡京遷都 789 高麗朝臣福信、武蔵国で没 794 平安京遷都													
800			奈良	石のカタ 中尾山 太安万侶墓					701 大宝律令 703 高麗若光が王姓を賜る 708 秩父郡、和銅献上 710 平城京遷都 716 武蔵国に高麗郡をおく 717 郷里制施行 724 聖武天皇即位 729 長屋王の変 741 国分寺建立の詔 749 孝謙天皇即位 750 肖奈福信らが高麗朝臣を賜る	● 多磨寺 （京所廃寺） ● 武蔵国分寺		● 大久保領家廃寺	● 女影廃寺 ● 大寺廃寺
752 東大寺大仏開眼法会 754 安史の乱 756 高麗朝臣福信、武蔵守を兼任 この頃武蔵国分寺の主要建物完成 758 武蔵国に新羅郡をおく													
764 藤原仲麻呂（恵美押勝）の乱 771 武蔵国が東山道より東海道に転属 784 長岡京遷都 789 高麗朝臣福信、武蔵国で没 794 平安京遷都													
800					奈良	石のカタ 中尾山 太安万侶墓			701 大宝律令 703 高麗若光が王姓を賜る 708 秩父郡、和銅献上 710 平城京遷都 716 武蔵国に高麗郡をおく 717 郷里制施行 724 聖武天皇即位 729 長屋王の変 741 国分寺建立の詔 749 孝謙天皇即位 750 肖奈福信らが高麗朝臣を賜る	● 多磨寺 （京所廃寺） ● 武蔵国分寺		● 大久保領家廃寺	● 女影廃寺 ● 大寺廃寺
752 東大寺大仏開眼法会 754 安史の乱 756 高麗朝臣福信、武蔵守を兼任 この頃武蔵国分寺の主要建物完成 758 武蔵国に新羅郡をおく													
764 藤原仲麻呂（恵美押勝）の乱 771 武蔵国が東山道より東海道に転属 784 長岡京遷都 789 高麗朝臣福信、武蔵国で没 794 平安京遷都													
800							奈良	石のカタ 中尾山 太安万侶墓	701 大宝律令 703 高麗若光が王姓を賜る 708 秩父郡、和銅献上 710 平城京遷都 716 武蔵国に高麗郡をおく 717 郷里制施行 724 聖武天皇即位 729 長屋王の変 741 国分寺建立の詔 749 孝謙天皇即位 750 肖奈福信らが高麗朝臣を賜る	● 多磨寺 （京所廃寺） ● 武蔵国分寺		● 大久保領家廃寺	● 女影廃寺 ● 大寺廃寺
752 東大寺大仏開眼法会 754 安史の乱 756 高麗朝臣福信、武蔵守を兼任 この頃武蔵国分寺の主要建物完成 758 武蔵国に新羅郡をおく													
764 藤原仲麻呂（恵美押勝）の乱 771 武蔵国が東山道より東海道に転属 784 長岡京遷都 789 高麗朝臣福信、武蔵国で没 794 平安京遷都													
800	奈良	石のカタ 中尾山 太安万侶墓							701 大宝律令 703 高麗若光が王姓を賜る 708 秩父郡、和銅献上 710 平城京遷都 716 武蔵国に高麗郡をおく 717 郷里制施行 724 聖武天皇即位 729 長屋王の変 741 国分寺建立の詔 749 孝謙天皇即位 750 肖奈福信らが高麗朝臣を賜る	● 多磨寺 （京所廃寺） ● 武蔵国分寺		● 大久保領家廃寺	● 女影廃寺 ● 大寺廃寺
752 東大寺大仏開眼法会 754 安史の乱 756 高麗朝臣福信、武蔵守を兼任 この頃武蔵国分寺の主要建物完成 758 武蔵国に新羅郡をおく													
764 藤原仲麻呂（恵美押勝）の乱 771 武蔵国が東山道より東海道に転属 784 長岡京遷都 789 高麗朝臣福信、武蔵国で没 794 平安京遷都													
800			奈良	石のカタ 中尾山 太安万侶墓					701 大宝律令 703 高麗若光が王姓を賜る 708 秩父郡、和銅献上 710 平城京遷都 716 武蔵国に高麗郡をおく 717 郷里制施行 724 聖武天皇即位 729 長屋王の変 741 国分寺建立の詔 749 孝謙天皇即位 750 肖奈福信らが高麗朝臣を賜る	● 多磨寺 （京所廃寺） ● 武蔵国分寺		● 大久保領家廃寺	● 女影廃寺 ● 大寺廃寺
752 東大寺大仏開眼法会 754 安史の乱 756 高麗朝臣福信、武蔵守を兼任 この頃武蔵国分寺の主要建物完成 758 武蔵国に新羅郡をおく													
764 藤原仲麻呂（恵美押勝）の乱 771 武蔵国が東山道より東海道に転属 784 長岡京遷都 789 高麗朝臣福信、武蔵国で没 794 平安京遷都													
800					奈良	石のカタ 中尾山 太安万侶墓			701 大宝律令 703 高麗若光が王姓を賜る 708 秩父郡、和銅献上 710 平城京遷都 716 武蔵国に高麗郡をおく 717 郷里制施行 724 聖武天皇即位 729 長屋王の変 741 国分寺建立の詔 749 孝謙天皇即位 750 肖奈福信らが高麗朝臣を賜る	● 多磨寺 （京所廃寺） ● 武蔵国分寺		● 大久保領家廃寺	● 女影廃寺 ● 大寺廃寺
752 東大寺大仏開眼法会 754 安史の乱 756 高麗朝臣福信、武蔵守を兼任 この頃武蔵国分寺の主要建物完成 758 武蔵国に新羅郡をおく													
764 藤原仲麻呂（恵美押勝）の乱 771 武蔵国が東山道より東海道に転属 784 長岡京遷都 789 高麗朝臣福信、武蔵国で没 794 平安京遷都													
800							奈良	石のカタ 中尾山 太安万侶墓	701 大宝律令 703 高麗若光が王姓を賜る 708 秩父郡、和銅献上 710 平城京遷都 716 武蔵国に高麗郡をおく 717 郷里制施行 724 聖武天皇即位 729 長屋王の変 741 国分寺建立の詔 749 孝謙天皇即位 750 肖奈福信らが高麗朝臣を賜る	● 多磨寺 （京所廃寺） ● 武蔵国分寺		● 大久保領家廃寺	● 女影廃寺 ● 大寺廃寺
752 東大寺大仏開眼法会 754 安史の乱 756 高麗朝臣福信、武蔵守を兼任 この頃武蔵国分寺の主要建物完成 758 武蔵国に新羅郡をおく													
764 藤原仲麻呂（恵美押勝）の乱 771 武蔵国が東山道より東海道に転属 784 長岡京遷都 789 高麗朝臣福信、武蔵国で没 794 平安京遷都													
800	奈良	石のカタ 中尾山 太安万侶墓							701 大宝律令 703 高麗若光が王姓を賜る 708 秩父郡、和銅献上 710 平城京遷都 716 武蔵国に高麗郡をおく 717 郷里制施行 724 聖武天皇即位 729 長屋王の変 741 国分寺建立の詔 749 孝謙天皇即位 750 肖奈福信らが高麗朝臣を賜る	● 多磨寺 （京所廃寺） ● 武蔵国分寺		● 大久保領家廃寺	● 女影廃寺 ● 大寺廃寺
752 東大寺大仏開眼法会 754 安史の乱 756 高麗朝臣福信、武蔵守を兼任 この頃武蔵国分寺の主要建物完成 758 武蔵国に新羅郡をおく													
764 藤原仲麻呂（恵美押勝）の乱 771 武蔵国が東山道より東海道に転属 784 長岡京遷都 789 高麗朝臣福信、武蔵国で没 794 平安京遷都													
800			奈良	石のカタ 中尾山 太安万侶墓					701 大宝律令 703 高麗若光が王姓を賜る 708 秩父郡、和銅献上 710 平城京遷都 716 武蔵国に高麗郡をおく 717 郷里制施行 7				

資料 11 埼玉古墳群と古代の北武蔵地域関連年表

令和7年度特別史跡埼玉古墳群シンポジウム

埼玉古墳群と古代国家成立前夜－資料集－

編集：埼玉県立さきたま史跡の博物館

発行：埼玉県立さきたま史跡の博物館

発行日：2025年（令和7）10月18日

印刷：株式会社ニッショープリント



旧盛徳寺跡上空からみた埼玉古墳群



埼玉県立

さきたま史跡の博物館

Museum of The Sakitama Ancient Burial Mounds